

本扉-----
真珠の道

堀越 信代

真珠貝は異物を核にして真珠層を巻いていくという
(「サンティアゴ巡礼日記」本文から)

目次-----

目次

第Ⅰ部 遙かなる海と薔薇……………7
1 生い立ち……………9
2 渡欧……………60
3 帰国……………77
4 カフェ……………89
第Ⅱ部 サンティアゴ巡礼日記……………121
第Ⅲ部 カフェギャラリー&窯 ばおぼぶ……………247
薔薇のコト。 あとがきに代えて……………370

本文-----

第Ⅰ部 遙かなる海と薔薇

1 生い立ち

赤レンガが無骨に壁として積み上げられた、ドイツの古色蒼然とした建物のような校舎であった。小さな教室の後ろのほうで、昼休みでもあったのだろうか、男子学生の五、六人がおしゃべりをしていた。

私は少し離れて座って話を聞いていた。彼らは口々に本を書いてみせる、きっと書けど、という決心を語っていたのだ。

自分はどうだろうか、と思いを巡らしていたのだが、おい、お前はどうか、とやはりこちらへ回ってきた。興味ある課題も特にあるわけでなし、本が書けるかどうか考えたこともなかったのだが、とっさに応えたのは、「私の人生そのものを物語にしてみせる」であった。かっこいい！という皆の歓声で休み時間は終わった。

そろそろ人生も終わりに近くなってきたが、どうだった？と問えば、そうだね、やはり生き来し方は物語かなあ……

生い立ちの記を書いてみたら、という勧めに背中をぐいと押された。

†

薔薇という女の子が生まれたのは神田はニコライ堂のとなりの産院だった。体重が一貫目あった。三・七五キログラムだ。一九四六年五月は、終戦からまだ一年も経っておらず食糧はひどく不足していた。子供の立派さに、「まあ、皇太子さまみたいね」と人々に言

われ、親たちは自慢だったろう。薔薇の父親は大陸で経理担当の将校であった。身重であった彼の連れ合いと共に終戦より早めに帰国していた。その産院は彼の友人の御両親のものだったという。

<薔薇の父（後列左から2人目）と祖母（前列中央）>

戦争へゆく前、薔薇の父は銀行で働いていた。その父親は警察官だったが彼が七歳の時に亡くなっており、母親一人が残された六人の子供を育てたらしい。彼女は群馬県から出てきて藤沢で材木商をし、日本初の女性のための看護学校へ入学し第一期卒業生として戦争中は横須賀の海軍将校用の病院の婦長であった人だ。正月には皇后陛下のお茶の席に呼ばれていた、と語られていた。姉の二人は美しく女優になったが、ふたりとも胸の病でなくなっている。薔薇の父は四番目に生まれたものの長男だったため甘やかされて育つようだ。彼は戦争中実戦はまるで体験していない。

薔薇の出産後、彼らは横浜市金沢にあった引揚者寮に住んだ。海辺に大きな二階建てが何棟も並んでいた。薔薇の母は沖縄出身である。薔薇を連れてよく海へ出た、貝を採るのだ。ここの海岸は遠浅で、魚貝類が豊富だった。金沢という地名が表すように土地に鉄分が含まれているせいで海の砂は黒い。縄文の昔から人々を養ってきた浜だ。父は再び横浜で銀行勤めに戻った。ここにいた間、薔薇はお隣の家で煮え立ったあさりの汁をひっくり返して足にやけどを負った。毛糸の長パンツを履いていたのでなかなか脱がせることができずに皮膚を傷める結果となった。左足の膝横からすねにかけてケロイドとして残ったが、成長するに従って薄くなっていった。その隣家の方は後年薔薇の家族を訪ねてきてケロイドの跡が薄くなっていることを確かめながらも、謝り続けていた。

薔薇が三歳の時一家は引越しをした。海軍将校用に戦争中に作られた住宅が空いたからだ。引き揚げ寮から大人の足で二十分ぐらいの距離だった。後から生まれていた一歳の弟を乳母車に乗せ、母と薔薇と歩いて移動した。しばらくすると薔薇は疲れてしまい、「ああ、もう歩きたくない、乳母車に乗りたい」と思ったのだが、「いや、おねえちゃんだもの、頑張らなくて」と思い直した。目的地はすぐそこだった。百坪ほどの土地はその辺一帯を所有していた大地主のもので手放さなかったが、その家を父は買った。まさかこの家で生涯の殆どを過ごすことになるとは、薔薇は夢にも思っていなかっただろう。

薔薇は玄関から廊下を走って座敷に入り窓辺に座った。外を眺めた。これが新しいおうちだ！なんて素敵なんだ！と、とても嬉しかった。座敷は六畳と八畳二つ、四畳半の洋間がひとつのたいして大きな家ではないのだが、今までと比較すれば素晴らしかった、開放感だった。

<父母と薔薇と弟>

裏の方にあった風呂場へは外からも入れるようになっていた。海水浴から帰ってくると砂の足を外の井戸端で洗って風呂釜の横から風呂場へ入った。その台所側から火を焚く。新聞紙を下に丸め、小さな枝、太めの薪を乗せ最後に石炭を載せる。木で出来たしゃがんで入る小さな桶のような風呂だった。大人と子供と一緒に入るとお湯がザーっと溢れこぼれた。

井戸は冷蔵庫の代わりでもあった。大きなスイカが吊るされていた。そのうち小型の冷蔵庫も台所に据えられた。近くの氷屋さんへ行って氷を一貫目買くと、大きな塊からのこぎりでシャーシャーと小気味良く切って縄でぶら下げてくれた。冷蔵庫内の上の段に置く場所があった。それが溶けるまで一日ぐらいだったろうか。

玄関のたたきは畳一畳分で、上がり口がかなり高く、ちょっとした訪問者はそこで腰掛けて話をした。天井が高かった。すぐ隣が応接間だった。出窓に押し開きの窓が付いていて、天井も壁も真っ白い漆喰で、扉、柱などは濃い目のこげ茶だった。小さなソファと椅子のセットがあり、近所の子供達との遊び場となっていた。大人目から少し隠れた気分がもてた。

庭には砂場、ブランコなどができた。池もできて、金魚が飼われた。父は庭には果物の木を植えなくてはならない、と言い次々と果物の木が植えられた。夏みかん、柿、桃、ビワ、ざくろなど。山桜の大きな木や松の木数本は既にあつた。紅梅は植えた。クリスマスツリーの生き残りも後に大きく育つた。シュロやハツ手は自生していた。草花も常に咲いていた。母は植物が好きでよく手入れをしていた。カナリアも何十羽と増やしたが、蛇に狙われるようになり、次第に飼うのをやめたようだ。うさぎは可愛らしかったが、大雪の時凍え死んだ。犬はしばらく飼って皆に可愛がられていた。スピッツの雑種でダイジイという名前だった。

路地の奥は行き止まりで、二十軒ほどだったのでひとつのまとまりがあつた。子供たちは大きい子にくっついて一団となって遊んだり、あちこちの家や庭で、かなり皆自由に遊びまわっていた。夏など開けっ放しの家が多くて、お父さんがふんどし一つでビールを飲んでいる姿や、お母さんが胸をはだけて赤ん坊におっぱいをやっている姿なども普通に見ていた。しかしまるで門扉を開けない家というのもあった。手入れをされた芝生の庭に防空壕がある家もあった。

大きな木のあるヤーちゃんの家で、数人でアサリ採りの真似事をして遊んでいたことがあつた。アサリ採り用のクマデはおもちゃではなかつた。薔薇のひとふりがハックンの足にあたってしまった。血が出た。彼の家はすぐそこだったのでお母さんが呼ばれ大丈夫よと言いながらすぐ手当をした。薔薇はオロオロしていた。のちのち大人になってから、ゴミ出しの時などに彼と顔を合わすことがある。彼の優しい笑顔はこの記憶を引っ張り出す。

引越ししてきて一年も経たないうちに五分ほど歩いたところに幼稚園ができた。三歳児だった薔薇は幼すぎて入れなかつた。しかし遊び仲間が入ってしまい、年下の子供らと残された彼女はつまらなくて、幼稚園に入りたいよう、と母親に頼み、幼稚園に交渉に行ってもらつた。幼稚園の入口で立ったまま面接のようなことをした。先生方は「おむつはしてないのね、ぐらいで入れてくれたようだ。たった一人のクラスだった。園舎は西部劇に出てきそうな木造の教会の御堂を利用して。祭壇との仕切りをジャバラでしてあり、そのジャバラに沿って年上のクラスが一行に椅子を並べ、窓側の壁に沿って年下のクラスが椅子を並べていた。薔薇の席はその真ん中の角のところだった。彼女はここで新しい楽しみを覚えた。絵本だ。キンダーブックという大判の絵本がたくさんあつた。挿絵が美しかった。ひとりでその美しい世界に浸つた、ひたすら眺めていたようだ。文字もいつの間にか読めるようになっていた。

教会の中だから壁の上の方にはキリストの受難の絵が並べかけられている。全くリアルな絵で、ローマ兵がキリストを十字架に付ける場面、大きな釘を大きなトンカチで手のひらにガンガンと打ち付けているのだ。十字架にぶら下げられたキリストの足は二つ重ねて釘が打ち込まれている。血だらけだ。顔は辛そうだ。幼い薔薇はそういう絵を眺め、この人は痛かろう、辛かろう、なんとかかわいそうなんだ、と同情していた。

園庭でブランコに乗っていたとき、そばでふたりの先生がおしゃべりをしていたのが聞こえてきた。「爪を伸ばそうと思ったのだけど母に叱られたの、であった。薔薇は大人の世界を少し甘く見た。

たまに背の高い外国人の神父様が園庭で幼稚園園長のロコナイ神父様と話していることがあった。その訪問者は後に薔薇が大学で出会うことになっていたアイルランド人のジョンストン神父様だったかもしれないのだ。のちのちの思い出話として田浦の日本語学校からの帰りに文庫の教会に寄ったよ、とおっしゃっていたから。

ロコナイ神父様はハンガリー？出身で背が高く、穏やかな優しい大きな眼を持った方だった。園児にたくさんお話をなさったのだが薔薇が覚えているのはひとつだけ。「神様はね、私たちの目には見えないの。でも神様から私たちはよく見えているの。そしてね、神様はいつも私たちを守ってくれているの」。この言葉「守ってくれている」が薔薇の心にストンと落ちて、それから先薔薇はずっとその安心感の中で生きている。

幼稚園で毎日唱えさせられた「主祷文」「天使祝詞」は文語ではあったが子どもの心には刻み込まれている。

てんにましますわれらのちちよ
ねがわくはみなのとまとまれんことを
みくにのきたらんことを
みむねのてんにおこなわるごとくちにもおこなわれんことを
われらのにちようのかてをこんにちわれらにあたえたまえ
われらがひとにゆるすごとくわれらのつみをもゆるしたまえ
われらをこころみにひきたまわされわれらをあくよりすくいたまえ あーめん

めでたしせいちょうみちみてるまりあ
しゅおんみとともにおわす
おんみはおんなのうちにてしゅくせられ
ごたいないのおんこいえずすもしゅくせられたもう
てんしゅのおんははせいまりあ
つみびとなるわれらのために
いまもりんじゅうのときもいのりたまえ あーめん

幼稚園の遠足はいつもバスだった。薔薇は乗り物酔いがひどくて最初のうちは参加しなかったが、先生たちがバスの中で吐いてもいいから一緒に行きましょうと言ってくださって、ビニール袋をたくさん持って参加した。何度か吐いているうちに丈夫になったようだ。しかし幼稚園時代の三年間は病気をひとつおりにやっていた。予防注射の時代ではなかったようだ。病気になって免疫力をつけてゆくのがあった。

幼稚園のころの夏休みは箱根の旅館で長期間過ごしていた。当時の吉田首相が姿を見せることもある老舗の旅館であった。大きな鯉が泳いでいる池があった。家族は独立した離れを借りていた。父は仕事もあるし週末だけの滞在であった。宿の爺やさんが子供の遊び相手をしてくれていた。虫取りをすると恐ろしい程たくさん取れる。北杜夫の作品にも同じような場面があったが、夜廊下の締め切ったカーテンを開けてみると、ガラス戸には夥しい数の虫がへばりついているのだ。大涌谷の地獄のような恐ろしさも垣間見た。登山電車の急勾配も、茂っている森も、ひんやりとした空気も何もかもがワクワクさせてくれた。

父との思い出なのだけど、横浜のニューグランドホテルのカフェのようなところで、焼きリンゴを食べさせてくれたことがあった。こんなに美味しいものがこの世にあるのか、という感動だった。マネージャーのような人が、お嬢ちゃん、コックさんがね、ナイフ一本でこのうしろに穴を開けて、それを蓋にして、と教えてくれた。幼稚園のころだった。

小学校の中ごろだったと思うのだが、大栈橋に着いていたブラジル丸という大きな船の船長さんと父と私と弟とだけで、船の一等食堂で正式な洋食を頂いたことがあった。ほかのお客様は誰もいなくて、大きな丸いテーブルにきれいに食器がセットされていた。普段は着ないようなよそ行きのワンピースを着ていた記憶がある。ナイフとフォークは外側から使う、ということから、パンを食べるタイミングとかいろいろ教わった。豪華な美味しさをたっぷり味わった。

幼稚園に入る前の記憶だと思うのだが、金沢文庫の駅から金沢八景の駅まで、見渡す限りが蓮の田んぼで、線路が一本スー…と通っているだけの景色というのがあった。今は埋め立てられて公団住宅やら、区役所、消防署やら、マンションやらでバイパスが一本通っている場所だが、広々となにもなく、いや蓮の田んぼだけがあったのだ。その前は、江戸時代の前期は入江だった部分だ。君ヶ崎という地名はもっと遠い昔に天皇が上陸なさった岬だからなのだ。蓮の花の開く頃のその一帯の美しさは、はるかに微かに夢の世界のようなものだ。鎌倉へ墓参りにでも行ったのだろうか、そういう美しさの中を電車で走っていったのだ。

金沢文庫の駅前は雨が降るといつも水浸しだった。駅を降りるとすぐ本屋さん、靴屋さん、金物屋さんだった。靴屋さんで父は靴をオーダーしていた。薔薇も一度ローヒールをオーダーしてもらったことがあった。子供用の靴が入らなくなったころだ。しかしよそいきだったので、そんなに履いた記憶がない。

幼稚園時代に戻るが、薔薇は本好きの無口な子と言われるようになった。幼稚園生活最後の聖劇は聖書に沿ってキリストの生誕が演じられる。薔薇にはせりふの少ない役が良いだろう、と先生方は聖母マリアの役をあたえた。飼いや桶の中に寝かされている赤子イエズスの前で跪き胸の前で手を合わせているだけの役柄。薄い水色の衣装でヴェールをかぶっていた。おデブの薔薇だった。ヨゼフ役はカズちゃん、天使役にはミーちゃん、アキちゃん、カヨちゃん、博士役にはヒロくん、ヨーくん、ジュンくん、ジュンくん以外は後にみな同じ小学校に入った。

歩いて十五分ほどの海辺に小学校が開校された。引き揚げ者寮があったその隣だ。寮はもうすでになかった。後に住宅地となる。

入学式当日、胸に名前を書いたハンカチをつけなければならなかったのだが、そんな子供じみた格好がイヤで薔薇はなんとか隠そうとしたがうまくいかずもぞもぞしているばかりだった。その小学校では一年の時から数年間は子供の数が多くて二部授業が行われていた。午前の部と午後の部で分かれるのだ。

東門から出るとすぐ砂浜が始まるまさに海際の学校だった。嵐の時などは校庭に波が入り込んでいた。その東門の近くの二階角部屋が図書室だった。東側の窓も南側の窓も全面開放で海の景色が広がる。遙か彼方に房総半島が見えたり霞んだりしていた。横浜港、芝漁港があるため沖には大小様々な船が浮かんで見えていた。

海は広いな大きいな月がのぼるし日が沈む
海にお船を浮かばせて行ってみたいなよその国

という歌が薔薇の頭の中でリフレインしていた。あの房総半島の向こう側はもっと大きな海で太平洋であるとだんだんわかってくる。いつかはきっとその向こうへ行くぞという思いになるのは当然だったようだ。本好きの薔薇の心をその図書室は外へ外へと向けたのだった。

一、二年生の受け持ちがK先生で、薔薇ちゃんは少しむつかしいものも読めそうね、と言って図書室で中学年向きの本の中から一冊選んでくださった。日本人作家の随筆のようなものだった記憶しかない。文字だけの大人の本への入門をした。父はいつの頃からか駅前の本屋で毎月一冊ずつ箱に入った少年少女文学全集から薔薇の好みで選ばせてくれていた。最初に選んだ本が「王子チャールズ」で「三銃士」「巖窟王」と読み進んだような。でも女の子らしい「若草物語」「小公女」「小公子」もあった。分厚い赤と青の表紙の文字も細かい「アンデルセン童話集」これが一番のお気に入りだった。後にデンマークのアンデルセン記念館でこの愛読書と同じ日本語版の本が置いてあったのが嬉しかった。父は薔薇に雑誌類も小学一年の時は一年生と二年生の二冊を同時に買い与えていた。高学年になった頃には河出書房の緑色の箱に入った世界文学全集を本箱ごと全巻買って与えた。漫画本は弟や友達から借りて低学年の頃に他と並列で猛烈に読んでいた。当時の漫画本は歴史を学ぶにとっても良かった。ナンセンスものがほとんどなかったのだ。たくさんの漫画本を読んでいつの頃か漫画を卒業していた。

映画館へは母に連れられて行った。時代劇が多かった、二本立てだ。人気俳優が繰り返し役柄を変えて出てくる。母ものや細雪のようなものもあった。小さなトイレ臭い劇場だった。いまの谷津公園の近くにあった。毎週新しい映画が来る。ほとんど毎週見に行っていたようだ。最初にニュースが流れる、それらは、世の中はまだ戦後なのだというざわざわした空気を教えてくれていた。ディズニーのものは隣の映画館だった。華やかさが圧倒的だった。

三年生の受け持ちは美術系の若い先生でどうも合わなかった。薔薇は絵を書く事は好きで、県のコンクールへ出せば賞をとったこともあるくらいだったが、この先生のもとではなんにもなかった。四、五年生の受け持ちがM先生。この方が生徒たちをのびのびと育ててくださった。自信がついた。学校生活が楽しかった。仲良しの女の子四人で皆歌が好きだったので、カナリヤグループと名付けていつも一緒に遊んでいた。ひと月に一度自主的に文集を出した。四人で順番に詩、作文、俳句を書いた。詩が一番好きだった。

一度クラス中でなにかの話から男の方が偉い、いや女のほうが偉い、という議論になっていった。薔薇は女の子の先頭で頑張っていた。それが沸騰したとき、先生は怒って、やめなさい、と大きな声を出された。小柄な可愛らしい先生だが凄みがあった。どっちが偉いわけでもないでしょ！と。クラス一同はシュンとなって目が覚めた。

六年生の時はN先生。初めての男の先生で、薔薇はすぐには馴染めなかった。思春期突入だったのだろう。学年が始まってまだ浅い日のこと、先生が薔薇の発言に笑ったことがあった。何故かはいまでも謎だが、薔薇は馬鹿にされた、と思い込んだ。先生に対する怒りと軽蔑も入っていたようだが、ともかく薔薇は教室で一切口をきかなくなった。先生は困られてM先生に相談に行かれたらしい。後々同窓会で笑い話で語られたが……。

六年生で薔薇は既に一六八センチの長身だった。三、四年の頃から一年に一〇センチも伸びることがあって親たちはとても心配した。ジャイアント馬場とかいう大男のプロレスラーが当時有名ではあったが、あのようになったらどうしよう、女ではどうなるんだ！ざるをかぶせてもだめだろうな……とか。

あるとき、悪ガキ、それも体格の良い三、四人が「おい、ちょっとこっちへ来い」と裏庭の方へ薔薇を連れて行った。人気はない。壁に薔薇を押し付けて「てめえは女のくせしてでかい面しやがって生意気だ」とまさに殴りかかろうとした時にN先生が駆けつけてくれた。知らせてくれた友達がいたのだ。

のちのち同窓会で、俺はお前にぶっ叩かれた、と言っている男の人がいたが、薔薇の記憶には全くない。

中学受験をして第一志望は落ちた。まさか落ちるはずはないと思っていたのだから、緊張感のない呑気ものだった。滑り止めのミッションスクールに入った。金沢の浜辺文化で育った薔薇にとって湘南のそのお嬢様学校はカルチャーショックでもあった。

その頃父は、銀行勤めを辞めて独立をした。通関業とかで小さな会社だったが、古いビルの四階事務所に案内してくれた新社長は自慢げだった。最初の頃は経済的にきつかったようだ。父と母は日々の争いが多くなっていた。母が日本料理をよく知らぬことがきっかけになるのだけど根っこは違っていた。お金と女だった。薔薇のお弁当も質素で、トマトを食パンにはさんだだけのサンドイッチが続いたことがあった。ピアニストを目指しているあるクラスメートがそのサンドイッチをあら、また？とか笑ったことがあったが、恥ずかしいけど仕方ないことなので知らん顔をしていた。

薔薇は背が高いのでバスケット部に入ったが、毎日練習に参加するということと運動部特有の空気がイヤですぐやめた。夏休みに弟のボーイスカウトのキャンプに母と参加した。山中湖畔の爽やかな空気とか、ワイルドな生活はとても気に入った。その時の富士登山でのご来光の素晴らしさ、頂上に達する喜びなどを体験し、夏休み明けには早々と学校のワンダーフォーゲル部に入った。ワンゲルが女子校では珍しかった。ちょうど中学二年から入れた。ズボンを履いてはいけませんの学校でよくぞ存在していた部活だ。丹沢から始まり北アルプスの白馬岳に至るまでの苦しくも楽しい山歩きを五年ほど体験できた。最後には部長になった。最初に登った塔ヶ岳では息が苦しくなって、その時の部長にリュックを持ってもらい、手をつないでもらってやっと登れたのだが、部長になった春には同じコースを弱い最下級生の荷をしょい、手を取って登った。感無量だった。顧問の先生の頂上で見せてくれた汗だくの笑顔。

<ワンダーフォーゲル>

高校二年の頃学校は米軍基地の街横須賀から大船へと移転した。男子のカトリック校栄光学園も田浦から大船へすぐ隣の敷地へ移っていた。玉縄城跡地なので山の上にあった校舎へはスクールバスで通学した。栄光生がどろんこのぬかるみ道を徒歩通学しているのを走るバスの中から見ていた。広々とした台地で富士山が正面だ。すすき野もある気持ちのいい場所だった。駅前の観音様が薔薇の横顔に似ているとからかわれた。

薔薇は高校一年の時にカトリックの洗礼を受けた。幼稚園のときからの馴染みでもあり、宗教の時間に学び納得したようだ。スペイン系の修道院が経営する学校で、スペイン人シスターがまだたくさんおられ、その異文化に強烈に惹かれたのかもしれない。スポンジが水を吸い込むようにキリスト教を取り入れた。シスターになりたいと本気で願ったこともあった。後々その問題で相談相手になってくださった慈父のような伊藤神父様は、いみじくも仰った。「薔薇さん、修道院に入る前に世の中を見ていらっしやい」これで薔薇は本音のところほっとしたのだと思う。お墨付きをもらえたようで冒険への勢いがつけら

れた感もあった。

信者ではあったが学校内では不真面目ないたずらっ子であった。階段の踊り場に知っている限りの外国語を使って大きな紙に、Kiss me more, Besame mucho, Embrasse moi plus……とかを書きなぐったのだが、あるスペイン人のシスターが、ねえ、これ薔薇さんでしょ？　ここ、スペルが違うわよ、と大笑いされたりしていた。夏服のブラウスはボタンをきっちりとかけなくてはいけないのだけど、薔薇はいつも一番上を外して、年がら年中注意されていた。しかし決してやめない。反抗が趣味だったのか。

教会にはカトリック学生連盟という全国組織の支部があり、そこに高校生と大学生のメンバーたちが集っていた。校則の男女交際一切禁止なども此処では問題にならず、出来のよい学生たちが品位を保って楽しく遊んでいたといえる。クリスマスには徹夜でゲームをしたり、大学生ともなればお酒を飲む機会も増えていた。合宿もあり、このメンバーから結婚してゆくカップルもかなり出たようだ。薔薇もある東大生に惚れたり、あるいは老年期に至るまで付き合っているボーイフレンドもこの時の仲間だ。慈父のような伊藤神父様がこの学生たちのお目付け役だった。この人は学生たちの母であり父だった。彼のその慈愛と大学時代のカトリック研究会顧問のジョンストン神父様の優しさとが薔薇を支えたようだった。巨大組織のカトリック教会、わけのわからない宗教というものが薔薇の生き方に大きな影響を与えているのだが、その世界につながる二本の糸がこのお二人だった。薔薇が世俗の世界に漂っていた長いあいだ、このふたりがいるのなら、カトリックでいい、と思っていた。

<ジョンストン神父>

家の中は次第に剣呑な空気が支配するようになっていた。父の酒量も上がってきていた。ちゃぶ台がひっくり返ったのは一回経験している。父が家に帰ってこないと家族は平和だった。しかしそれは彼が女の家にいるということで母の苦しみは想像がつかない。離婚をしたいと彼女は薔薇に言ったことがあるが、あなたたちが大人になるまで待つから、とも言ってくれた。

無意識の記憶の中での苦しみのみなのだけど、薔薇が大人になってから催眠療法を受けたことがある。胎児に至るまで遡ったら、胎児がひっ乾びていたのだ。死にそうに飢えていた。後から薔薇は母から聞いたのだけど、妊娠した当初に父は子供を墮せ、と言っていたそうだ。

ワンダーフォゲル部には薔薇の友達もかなり加わっていた。最後の記念写真を撮る時はありきたりではつまらない、というので校庭の東側にある丘に登った。風が強かったが挑戦するように、その風に顔を向けて一列に並んだ。タイトルを疾風怒濤とした。世界史で学んだドイツ文学のゲーテ、シラーの時代をそう言う。若く激しい力をイメージした。

あんなにスペイン語が出来ない子だったのに、ええ～？　J大学に受かったの？とスペイン人のシスターは薔薇の大学合格の話聞いて驚き、また喜んでくれた。三大学受けて、残ったひとつだった。試験問題を考えてみると、一番苦手な古文で、つい数日前に見たところが出てきたという点稼ぎがあったからだと思う。薔薇の実力はそのギリギリあたりにあったんだろう。友人の林檎はもっと実力があって三大学ともに受かった。それなのに、薔薇と同じ大学を選んでくれた。ほかの二つはW大学であり、K大学だったのでご両親は嘆いたことだろう。

薔薇と林檎はJ大学文学部ドイツ文学科に入った。三十人ほどのクラスだった。男子学生がおじさんみみたいな浪人とか地方出身の学生とか、荒々しい印象が強かった。学生会では入学早々校庭を警察官の訓練に貸したことが問題になっていた。薔薇は学校側で決められた代議員だったのだけれど、事態がさっぱり分からずクラスの委員会でリコールとなった。政治的なメンバーが彼女に代わって代議員となった。女子学生もミッション系はほとんどいなかったと思う。林檎と薔薇はそんなつもりはなかったのだけど、身につけている文化が少々異質であった。

薔薇が大学に入ったことで、母はひと安心し、長年望んでいた離婚を考え始めた。薔薇に離婚してもいいか？と聞いてきたので、あなたの人生だから好きなようにしていい、私たちはもう大丈夫だよ、と答えた。母は生まれ故郷の沖縄へと旅立った。母がいなくなってから生活が一変した。これほど大きな存在感だったのか、と初めて気づき、ここに穴が空いたようだった。

家事一般と弟の学校の呼び出しやらにも出て行かねばならない生活は大学生としてはかなりきつかった。授業中に居眠りをすることが多くなった。あまり寝てばかりいるので、あるドイツ人のおじいちゃん教授は、Sleeping Beautyと呼んでくれたのだが、ちょうどその映画が上映されていた時で、勉強を全くしてない薔薇をからかったのだ。太った笑顔の優しい神父さんだった。

結局は勉強ということが身につかないままに、試験試験を友人たちの助けで一夜漬けでしのぎ、夕方には皆で飲み歩き、というような学生になっていった。遊び好きのお馬鹿である。家にはお手伝いさんが入った。

一年生を終えた時フーッと感じたむなしさの風、ともかく行動せよという囁きに従って薔薇は友人を募り日本横断徒歩の旅を計画した。数人で行く予定だったが、当日の朝、校門のところに準備をして集合したのは薔薇と林檎だけ。他は普段着のままでやめます、やめなさい、と言いに来ただけだった。四谷をスタートとし日本海の直江津に向けて列島を横断する予定だ。三浦三崎で瓶に入れてきた海水を日本海に注ぐのだ。ふたりはなんと出立しようが出発した。一日目は熊谷だった。幼稚園の床板の上で寝袋で寝た。コッヘルからお米から自炊するつもりで持っていたものの重さは三十キログラム近くになり、ふたりとも肩が真っ赤に腫れてしまっていた。翌朝駅でチッキという方法で、その重荷を家に送り、身軽になって再出発。道の途中で畑に藁が積んであるのを見たとき、ふたりはそのベッドの魅力に逆らえずに寝かせてもらった。

高校三年の夏休みに受験勉強のために松原湖湖畔のお豆腐屋さんのお家にこもったことがあった。その家で司法試験の勉強をしていた大学生のお兄さんがいて、高崎ではその人の家に泊めてもらった。ご両親に歓迎され恐縮した。それから先の道に関してもいろいろ良いルートを教えてくださった。長野に入るに、神津牧場を勧められた。ここにちょっと遅く到着したのだけど、真っ暗闇から現れた二人を快く迎えて下さり、あなたたちなら大丈夫だとすぐわかったよ、と仰った。荷物が大きい、だから自殺希望者ではない、ということらしい。ここで牛乳風呂なるものに入ることができた。市販の牛乳なんかよりよっぽど濃い、とおっしゃっていた。その後神津牧場を夏の合宿の場として何度か利用させてもらった。

長野の善光寺さんのすぐ近くに母校の姉妹校がある。そこには昔可愛がってくださったシスターが転勤していらした。目をクリクリして大歓迎をして下さった。お昼をご馳走してくださった。

長野は三月にはまだ雪がある。新潟の方へ向かう田舎道で田んぼのあぜ道を歩いていた

のだけれど、犬の足跡に沿って雪を踏んでいたら、あるところでズボッと川の中に落ちてしまった。犬とは体重が違っていたのだ。近くに小さなお店が有り、濡れた足を乾かしたり靴下を変えたりを店先でさせてくださった。おまけに暖かいうどんなども頂けた。優しいお姉さんだった。

妙高に入る手前では国道沿いに歩いていた。黒塗のベンツか何か脇に止まり、「よ～、乗ってけよ」と声をかけられたが、歩くのが目的だからとお断りした。頑張れよ～とちょっと恐ろしげな方々は走り去った。

新潟は直江津の海。日本海は二人とも初めて、三浦半島周辺の海とは違って波が荒っぽい、水の色が深く暗い、水平線は遠く、荒れた波の間に霞む。

三崎の海からの海水をこの直江津の海に注いだ。精一杯の行動の証だった。その時林檎が、薔薇のバカ～～といった。海はつながっているのよ、そして二人で大笑いをした。

直江津の教会は古い日本家屋で狭く客室もなく、鍋焼きうどんをご馳走してくれたイタリア人の神父様は、食後妙高高原にあるその晩の宿まで案内してくださった。小さな御堂があり、そこの御堂番をしていたのが、笹川さんという若い女の人だった。ほっぺの赤い可愛らしいお姉さんだった。林檎と薔薇と笹川さんは夜遅くまで小さなこたつで温まりながらおしゃべりをし続けた。彼女は薔薇の手を見ながら未来が見えるようで、あなたは波乱万丈の人生を送ります、そしてとてもいい子が一人生まれます、と言ってくれた。この笹川さんが後にすごい人となる。

†

あれは二年の時だったのだろうか、大学内のあるカトリックのグループが「九〇日間世界一周の旅」を企画した。乗用車一台分ぐらいの値段だった。飛びついた。林檎も一緒だ。父は離婚の罪滅ぼし、というわけでもあるまいが、費用を出してくれた。一学期の後半を少しと二学期の前半を少し休むだけでよかった。メンバーは三十人余。出かける前の準備として、ドイツ語を学んでいる林檎と薔薇が、簡単な会話教室とかもやらされたりした。ドイツ滞在が一月ほどになるという。また日本舞踊、つまり盆踊りだが、日本の童謡などの、練習時間もあった。要するに観光ヴィザというものがまだ発行されていない時代で、文化使節という肩書きでの旅行許可だった。大学一、二年生が最年少組、三十歳ごろが姉御組、この二グループが元気だった、最年長が六十歳代で様々な年齢、様々な職業の方々の集まりだったが、次第にひとつ釜の飯の仲間となり楽しさは増していった。順路として、ハワイ、アメリカ、カナダ、イギリス、フランス、ドイツ、スイス、イタリア、ギリシャ、(イスラエルが紛争のため中止となった)、インド、タイ、香港だった。

ドイツはドイツの青年省の協力があつた、アメリカはクリスチャンファミリームーブメントという団体やパンアメリカンの協力があり、フランスでは大学生が面倒を見てくれ、各地その有力者の歓迎レセプションとかに招かれ、パーティーへの参加も多かった。普段の宿舎はホームステイが多く各家庭の暖かさを味わい、ユースホステルもホテルも利用した。

ハワイから始まった旅だ。飛行機を降りてトイレに入ったら、なんとその大きさにびっくり。薔薇は体格のいいほうだけどお尻が落ちこちそうに感じた。その晩ホームステイを引き受けてくださるアメリカ人のママが外でも裸足だったのにも驚いた。ゆるゆるの自由な空気の中に入ったようだった。

サンフランシスコは坂道の街でおとぎ話のような古風な住宅が並んでいた。ホームステ

イの家もそのタイプで、トイレがもちろんお風呂場といっしょなのだが、広いのにドアの鍵が壊れていた。翌朝その家族と一緒に教会のミサに出たのだが、薔薇が英語の祈りをスラスラと読んでいると、あら、英語が出来るじゃないの、と驚かれた。日本人の学生はね、読んだり書いたり出来るのだけどおしゃべりができないのです、と説明をした。

シカゴで全員で招かれたパーティー会場は一気に現代風だった。高層ビルの上の方でワンフロアすべてがその人、クリスチャンファミリームーヴメントの会長さんのものでとても広く広い。ガラス張りの向こうにはシカゴ湖の夜景が広がっていた。ご馳走、酒類はふんだんに有り、映画のシーンのようであった。色はブルーだった。

ニューヨークは、上を見上げなければ東京と似ているかも、くらいの雑然さを感じた。一番高いビル、エンパイアステートビルにエレベーターを乗り継ぎして上がった。ティファニーはウインドウを覗いただけ。地下鉄には乗らないように、と注意を受けていたが、乗った。腕の太さがおデブの薔薇の腿程の太さをした黒人のおばちゃんがお向かいの席に三人分ほど取って腰掛けていた。

<ニューヨーク>

<エンパイアステートビル>

カナダのモントリオールではちょうど万国博をやっていた。会場を巡っていると見たような人がある、エドワード・ケネディだった。サインや写真には気さくに応じてくれた。

<モントリオール万博・ソ連館>

ロンドンへ飛んだ。アメリカの食事は決して美味しいものではなかったがイギリスは食べ物の印象がない。灰色の街だった。どこかでパブに入った。黒ビールを飲んだ。これは美味しかった。店にいたおじさんたちが日本からの若いお客を歓迎してくれた。ロンドン博物館はやはり規模といい中身といい別格にすごかった。

<ルーブル美術館>

パリではパリ祭に重なった。さすが、英語がわかっても英語を話さないらしくフランス語ばかり。体格のいい優しい大学生がお世話人だった。薔薇のような大きな日本人の女の子は見たことがないと言って、僕の用心棒になってね、つまり用心棒という単語は、ゴリラ、Myゴリ〜ラ、と薔薇を呼び続けた、けしからん大男だ。ベルサイユ、モンマルトル、シャンゼリゼはさっと済ませて、三日間ほとんどの時間をルーブルに入った。しかし回りきれなかった。美術品の豊富さ、建物の豪華さには驚嘆する間もなく目の前には次から次へと初体験が巡ってくる。淡々と受け取るしかないんだ、とある種の気構えを捨てたりした。

ホテルが小説に出てきそうな安宿で、狭い階段を大きなスーツケースを持っての上り下りが大変だった。ベッドがダブルベッドで二人で使うのだが、真ん中がへっこみすぎていてそこへ滑り落ちていき体が触れてしまうのでとても困った。林檎と薔薇だったが滑らないように気を使うので寝苦しかった。

ドイツへ入ったら田舎へ来た印象であった。青年省の援助で、専用の運転手とその弟付きのバスで一ヶ月間ドイツ各地を巡った。青年省の大臣主催のレセプションはもとより各地で大歓迎を受けた。訪問着を着て盆踊りを踊り唱歌を歌ってやんやの喝采を受けるのだ

が、お返しにあちらもコーラスで、ということになるとその声量、歌唱力のスゴさに圧倒された。我らの芸はいかに子供だましの代物か。

しかしこのレセプションでも、官でも民でも食事の内容は素晴らしく、お酒類もシャンパンからワイン、スピリットすべてが出されており、タバコも葉巻まで用意されていた。賓客として扱われていたような気がする。

ホームステイ先も日本の当時の家庭とは比較にならないほど設備は充実し豊かな印象があった。

ベルリンを訪れた時は緊張した。ベルリンに着くまでがバスなので、東ドイツ内を走ることになり、この間一回の停止も許されないとのことだった。あちこちに監視塔があった。国境をはいるときはバスの底の部分に鏡を差し入れてチェックしていた。もちろん壁があった時だ。西ベルリンは東側に対しての宣伝もあるためにかなり町並みも美しく贅沢な感じすらあり、住宅もどンドン建てられていた。若者の間でネオナチという動きがあると聞いた。

ケルン、フランクフルト、ラインの川下り、ロマンティッシュ・シュトラッセ、ミュンヘン、シュバルツバルト、オーストリアのウィーンやザルツブルグにもリヒテンシュタインにもちょっと入り、スイスへも入った。ドクトル・ジバゴが流行っていた頃で、ホテルのピアノ奏者にリクエストしてスイスでのリゾート気分にご満悦だった。ラインフォールというラインの大滝の見物、ライン川やドナウ川は岸边まで水ギリギリに満ちたゆったりとした流れで日本の鋭い急な流れとはちがうものだった。自然のあり方も日本のそれと比べると人に近く優しい感触があった。

ドイツのケルン辺でのんびり過ごしていた時だったと思う。訪問者があり、グループリーダーのエルリンハーゲン神父との話し合いがあり、美人のお嬢様であった一人の姉御が、旅行グループから抜けてその訪問者とともに去っていった。秘話のロマンスであった。エルリンハーゲン神父という人は聖職者ではあるのだが、このような世界旅行を企画できる人でもあり、世界中に幅広い人脈があり、とても自由人でもあった。噂も絶えなかった。それで最終的には日本を離れたのだけど。この秘話のロマンスのヒロインと薔薇は五十年後に再会し、彼女の息子にカフェの工事を頼むことになる。

ほかの理由で、つまり留学をするためにドイツに残った姉御も二人いた。美学専攻と声楽専攻だった。ふたりともキラキラとした素敵な個性の持ち主だった。のちのち一人はドクターとなり大学教授となった。もうひとりもソプラノ歌手となり、ドイツ人と結婚し、大学で教えていた。

<ローマ教皇謁見>

イタリアに入り、予定にはなかったのだけど、ローマで教皇様謁見のために数日待たされたことがあった。第二ヴァチカン公会議が終わった時のパウロ六世という方だった。斡旋が成功し可能になった。訪問着を着て炭坑節を踊り、小学校唱歌を歌い、一人ひとり祝福を頂きおメダイも頂いた。教皇様の手に手を重ねているその瞬間の写真はヴァチカン付きのカメラマンがいて、おおきく引き延ばしたものを帰りに飛行場で渡してくれた。

ローマの休日でヘップバーンのいた広場とかの観光地巡りもした。若手元気組はコロセウムでの決闘を企画したのだけれど、相手が来なかった。彼は一応リーダーだったのだが、彼女ができて二人の振る舞いに皆がうんざりしていたのだ。

<パルテノン神殿>

ギリシャはアテネ、パルテノンの丘に登った。メンバーのひとりから譲り受けた赤いワンピースを着て薔薇は丘の上で風に吹かれていた、すると懐かしさがこみ上げてきた。なんだ？これは？自分は西欧人ではない、ギリシャ文明は自分の血の中にはないのに。しかし文学の先生がおっしゃった、君の読んだ本だよ、受けた教育だよ、と。蒼い空とエンタシスの柱があるだけの空間、何千年の昔にここが栄えた！踏みしめる大理石の階段は磨り減っていた。写真を撮ってもいいか、とどこの国から来たのかわからない人に聞かれ、おすましをしてその風の中でモデルとなった。街に降りて食べたトマトの肉詰めが美味しかった。バスで聖書で有名なコリントの地を走り抜け、かなり行った半島の中頃に位置する古代円形劇場跡を訪れた。小さなコインを落としても一番上部の客席ではっきりと音が聞き取れた。空と海と古代からの変わらぬであろう自然のままのギリシャがそこにあった。

次がイスラエルの予定であったが、あいにく紛争が起こり中止となった。

インドだ。

カラカスで便を乗り換えるために地上に降りたのだが、その熱気は体験したことのないものだった。ニューデリーに降りた。今までの世界各地の国々では人は皆同じだ、と感じられたのだが、ここは違っていた。あなたも私も同じ人間、という感覚から少し遠かった。飛行場にも牛はいる。それも痩せた牛。その牛の目には哀しみがあつた。そして傍らの人を見ると、彼らの目も同じように哀しく、諦念が満ちていた。

<インド>

この国では二人一組のホームステイとなる。安全のためだ。家族のメンバーすらmanとして危険だということだ。薔薇は弱いタイプの人と組まされた。気をつけてあげてくれ、との言葉とともに。旦那が会社社長、奥様が大学教授という裕福な家であった。幼稚園生ほどの小さな男の子がいた。この子がわがままで、薔薇の部屋に入り、カバンの中身を取り出していた。着物も袋から出されメチャメチャ。薔薇はそれを見つけ怒ったら彼は大声で泣き始めた。するとメイドさんが飛んできて、おぼっちゃまを叱るなんてとんでもない、と言われたのだが、お母さんが来て、いいんですよ、この子は叱られたほうがいいのです、と正当な反応があつた。

夕食は街のレストランへ行った。次から次へと料理を注文し、ちょっと食べては、突き返したりしている旦那を見て、かなり横柄なんだなあ、と思った。でもいろいろ美味しくいただきました。そして、キッチンへ戻された料理はどうなるのだろうか、誰かが食べるのだろうか、と思いを馳せた。その後ちょっとしたトラブルはあつた。

バスで市内を通っていると道端で小はともかく大まで平気でしている姿があつた。昼食のためにバスを降りるとき、子供たちにたかられるけど決してお金を上げないように、との注意があつた。一人で終わらない、数人でも終わらないということだ。たくさんの小さな腕が差し出されていた。指のない手は、赤ん坊の時に物乞いをする乞食として生きるために指をカットされる、と聞いた。バスに関わる人たちがいる。運転手とその助手のような人だけではなく、そのほかに戸を開けるだけの役割の人、窓を開け閉めするだけの役割の人と仕事を分担しているそうだ。彼らはバスの外側にへばりついていて。貧富の差は99対1。

首相？のレセプションもあり、ホテル住まいも体験。しかし、テーブルの上に置いたド

イツの時計工場でお土産に頂いた小さな置時計などは、外出から帰ってくると綺麗に無くなっていて。食事も注意されたのは水が危険だからコップの水は飲まないこと。瓶で飲めるものにする事だった。コーラとかビールとかだ。サラダも水滴が付いているから食べてはいけない、だった。二人ほど原因不明の高熱で倒れてしまった。薔薇は元気だったので、水を飲んでみるか、とちょっとだけ遊び半分で実験をした。するとやはりお腹がおかしくなった。トイレは、座るところに紙を敷くのはもちろん、中にも紙を先に散らしてからすること、つまり跳ね返りが恐ろしいから。

世界で一番美しい建物であろう、との評価をされているアグラのタージマホールは、見事だった。真っ白い大理石でドームを抱いた墓は絵のようにそこにたっていた。近づけば近づくほどその美しさに圧倒される。愛した王妃が亡くなりそのためにこの宮殿のようなお墓を建てた、とか。時代が遡れば遡るほど富やドラマは壮大になってくる。

タイに入ったらホッと安心する空気だった。時代的にも戻ってきた感じだった。仏教文化だからだろうと言いつつ合点ののだが、人々が明るく柔らかいのだ。

香港から東京へのルートを薔薇は一人外れて香港から那覇へ行くことにした。しかしヴィザが不完全で、母がその外で待っているというのに、薔薇は税関を出入れなかった。揉めに揉め、駆け出して塀をよじ登ろうとまでした薔薇は取り押さえられた。そしてその日最後の東京行きの飛行機に押し込められた。薔薇の騒ぎのおかげで大幅に出発時刻が遅れたようだった。ガラガラだったファーストクラスで帰国した。

これは素晴らしい旅行だった。その後同じような旅行を計画することはもうできなかったようだ、一回限りの奇跡のようなものだったらしい。これに参加したメンバーたちはほとんどがこの旅の体験でその後の人生の方向性が変わったと思う。薔薇は世界観がガラッと変わった。未知ではなくなった。どの大陸のビールも皆うまかった、そして直ぐにまた日本を飛び出すことになった。

旅行から帰って、車を買ってもらった。出来たばかりの第三京浜を飛ばしての通学であった。デパートの買い物はサインでできた。書物も買い放題だった。わがままいっぱいの学生生活だった。

卒業までの間は大学紛争がエスカレートするその時であり、学内は落ち着いて勉強するどころではなかった。薔薇のような落第生はラッキーだったかも。レポートだけで単位の取れる科目が増えたし、学校側はこの学生たちを速やかに卒業させたがっていたから、留年なんかはなくなっていたのだ。紛争は学内を吹き荒れ、友人たちは荒っぽい争いの渦中にいた。薔薇は右側からの誘いにも左側からの誘いにも乗らなかった。だいたい彼らの言葉は何を言いたいのかさっぱりわからなかったのだ。

薔薇はカトリック研究会に入っていた。部室ではロンドン土産の真っ赤なミニスカートとかで、タバコをプカプカ吸って、勝手なことを喋り、夕刻の酒の時間までを潰しているような不良であった。仲間はいいい奴らで薔薇というわがまま娘を遊ばしてくれて守ってくれていた。

薔薇は惚れっぽいのか、惚れられやすいのか、大学時代に恋はかなりあった。惚れられる方はすぐ飽きてしまう。こちらが初心で涙で終わったものもあった。本気でのめり込んだのは一回きりだが、これは双方が同じくらいどうにかしていたからなのだろうか、秘密にせねばならなかったこともあり、はしかにかかったようなものであった。

卒業旅行と称して薔薇は沖縄の母を訪ねた。まだアメリカ領土だったのでパスポートが必要だった。沖縄本島、石垣島、西表島と母と旅した。石垣島ではびっくりしたことに母の一番下の妹だと思っていたTちゃんが母の娘であり、もうひとり兄が居るといふ。その兄にも会えた。T姉は漁業組合の人と結婚して、小さな雑貨屋を営み、三人の子供を育てていた。M兄は大手の会社の社員だった。彼らから彼らが母に捨てられてからの話を聞いた。辛い話だった。周りの親戚は決して親切ではない。皆生活がとても苦しかったようだ。沖縄の特に西表島の歴史は過酷そのものだ。薩摩藩の重税にまつわる悲しい話は民謡の中に残っている。明治になってからも中央からの過酷な政策で、住民がどれほど死ぬ思いをしたか。ペリーが江戸湾沖に来る前に沖縄の方を回っていて、西表島に石炭がありそうだとしたことから山県有朋の計画が始まる。本土から罪人たちが送られてきて、人も入ったことのない深いジャングルの中でマラリヤと食糧不足で夥しい死者が出ている。カト研仲間に石垣出身者がいて、彼のお兄さんが、西表の歴史について詳しく本を著していた。

この過酷な歴史の西表島は美しい自然のかたまりである。深い山から甘い水が流れ、緑が生い茂り、あちこちに白い砂浜を持つ入江がある。世界一周旅行から帰ってきての薔薇は世界中でここが一番美しい、と叫びたくなった。たくさんの入江のひとつは“まるまぼんさん、”と呼ばれ、真ん中に白鷺の住む小さな島があり、陸路ではいけない森に囲まれた対岸に住む療養中の恋人を訪ねて、ある娘がサバニと言われている一人用の船をこいで夜な夜な通った……という話をその入江の辺で聞いていた、それが薔薇の母の母であると。

恋人は死んでおなかの中に子供が残った。このばあちゃんは小柄でインドネシア人のような丸い小さな顔で、可愛い人だった。彼女は後に村の大工と一緒にいる。他に八人の子が生まれる。

連れ子であった薔薇の母は成長して娘となる。踊りが上手だったそうだ。恋をし、その人と幸せに暮らしていた。ふたりの子供が出来た。しかし身分が違いすぎるといふ理由で、恋人の親がふたりを生木を裂くように別れさせた。追いかける子供を木に縛り付けて島を出ていった母、という話をその縛りつけられていた子供から聞いた。

薔薇は心に誓った。自分の産んだ子は決して手放さない、どんな運命になろうとも連れてゆく、と。これは親に捨てられた子どもの側からのストーリーが余りにも悲しかったからだ。

2 渡欧

薔薇は大学を出てすぐ父の会社で社長になるつもりで見習いをしていた。中、高、大学と一緒にいたFが近くの会社に就職していた。時々二人でお昼ご飯を食べていた。ある素晴らしく綺麗に晴れたお昼に、ふたりは午後会社に戻るのが嫌になってしまっていた。ねえ、ドライブに行こうよ、と悪巧みはすぐまとまり、丹沢へ向かった。山の空気をちょっと吸って満足して戻った。茅ヶ崎か平塚あたりで前の車が横断歩道を渡る歩行者のために停止した。薔薇も停止した、その時突然ドカンという音とショックで前につんのめった。後ろに六人ほど大の男が乗ったバンが薔薇のスポーツタイプのクーペにぶつかっていた。外を歩いていた人が、あなたたちの首が典型的なムチウチの動きをしていたから、すぐ病院へ行きなさい、と声をかけてくれた。

ぶつかってきたのは土建屋のおじさんで免停中のようだった。警察には届けなくてくれ、と懇願していたので、それはのんだ。必要なことを済ませて急いでFの家の近くの病院へ行った。ムチウチはここがいい、と言われていたのだ。即入院だった。周りからはバチが当たったのさ、とさんざん言われた。

半年以上の入院となり、なんともんびりと二人はおしゃべりの時を楽しみ、見舞いに来る友人たちとともに学生気分そのままにいたようだ。いい加減にそれにも飽きてきて、治療法もいろいろあるようだということで、リハビリをする他の病院へ移った。薔薇の家の向かい側の家のおじさんが日本では初めてという交通事故専門の弁護士で、きちんと土建屋さんから取り立ててくれた。土建屋さんもお金で済めばということで寛容であった。

薔薇は資金ができたので、会社を継ぐのはやめて、このあとヨーロッパへ行くことにした。その出発まで六本木のスイスレストランでアルバイトをしていた。あの三島由紀夫の事件はこの頃だった。事件の数日前に三島が楯の会のメンバーを連れて薔薇の働いていたレストランへ食事に来た。営業時間に少し早かった。ホールには薔薇しかいなかったので三島注文のステーキタルタルは薔薇が作った。大好きな三島のためにサービスできてとても嬉しかった。

三島の豊饒の海シリーズはその夏に完成していた。彼の文章の華麗さを愛していた薔薇は大ファンです、と彼に告げた。小柄なポロシャツ姿の彼は意外そうな顔をしていた。ピン札でチップをくれた。

その次の年の一月に横浜港の大桟橋からナホトカへ向けてのロシア船に乗っている薔薇がいた。桟橋には友人たちがたくさん見送ってくれていた。ずーっと後ろの方で父が立っているのが見えた。シベリア鉄道のハバロフスク経由でモスクワへ。長い汽車の旅だったが、お金をわざわざ別に包んで隠してあったものを、どういわけか洗面所に置いて忘れてきてなくなっていたりした思い出。やっとモスクワについて。地下鉄のエスカレーターのスPEEDが早かったことと、壁が美しく装飾されていたことが印象的だった。しかしものがないことがすぐわかった。オレンジを買うのに長い行列だった。

てっぺんに雲が掛かっているような巨大な同じデザイン建築物がモスクワに七個あり、大学やら病院やらなんだかやらで、その一つがホテルで天井も高く何もかもデカイ。こんな大きな建物に日本人を住まわせたらどうなるんだろう、とか考えるほど、大きいサイズなのだ。パリへフィアンセを訪ねて行こうとしていた同世代の女の子とそのホテルでウヲッカでしこたま酔っ払って、三日酔いの頭でウイーンへ、そしてバーゼルへと向かった。

バーゼルの近くのコルマーという古い街には大学の恩師の実家がホテルを開いていたので、お世話になることになっていた。レストラン経営を学ぶ、という名目である。しかしスイス国内のホテル関係の専門学校はほとんどがフランス語領域なのだ。薔薇はドイツ語、それもまだ不完全とくる。どうしようかと思ったが、まずドイツ語をちゃんとしようとして語学学校に入ることにした。それまでの間、恩師の実家のホテルで働いた。弟さんがボスで、怖い奥さんがいて、子供がたくさんいた。マリアというスペイン人の少し外れている女の人が下働きをしていて薔薇は彼女と一緒に働いた。じゃがいもを倉庫からリヤカーで雪の道を運んだり、何時間も皮をむいたり、皿洗いはもちろん、ホテルの部屋の掃除をしたり、トイレ掃除もしたり、宴会の時はキッチンの中でのヘルプから、時にはレストランのお客の注文を聞いて、ゆで卵はお湯が沸騰してから五分と言われたのに水から五分で出してしまう、怒られたりしていたのだが、忙しく過ごしていた。

休みの時には普段は空いている二階のホールにあるピアノを弾いてもいいと言われてい

た。楽譜を買ってきて下手くそながらも楽しんでた。雪のシンシンと降るある夕べ、雪に合わせ白いふわふわのウールのパンタロンとセーターを着て、たった一人の休日を楽しんでいた。そしてホールでショパンのワルツを練習し始めた。そこへ戸が開き見知らぬ男の人がニコニコしながら入ってきた。ショパンだね、と言いながら。なぜかその目が懐かしかった。彼は薔薇に代わってピアノを弾き始めた。ショパンのワルツでもむつかしくて薔薇には弾けないグラン・ブリリアントワルツだ。

薔薇と彼はこのようにして出会い、恋に落ちていった。ホテルのお客だった彼はチューリッヒから仕事で来ていた。それ以後薔薇の休みの時に合わせてデートとなった。彼は特許を持っていてスイス全土にわたる仕事をひとりで行っている人だったので自由はきいた。三十歳も年上だった。

<グラン・ブリリアントワルツの恋>

ドイツ語の学校を終えてドイツのデュッセルドルフに仕事の口があると言われたのだが、それよりは恋の生活を選びチューリッヒ大学の学生としてチューリッヒに住むことにした、という決断は、人生いつの決断でもそうなのだけど、～せねばならぬではなくて、～したいが優先だ。一緒にドイツ語を学んでいた日本人のお医者さんがいみじくもその決断を聞いて薔薇に言った、末は娼婦か野垂れ死に、だよと。かも知れないなあ……という不安がよぎらないでもないが、どこかで絶対大丈夫という安心感を持っているのだ。チューリッヒは街の真ん中で隣が教会、一時間おきに鐘の音がゴンゴン響くという女子寮に住んだ。大学の授業はほとんどチンプンカンプンで、彼とのスイス各地への出張旅行がメインだった。カレンダーの絵がそのままそこにあるような、美しいスイスの自然をそれからの五年ほど思う存分味わった。

フランス語圏の山々の連なる地方に行った時、夕食後に車で少し走った。ある峠らしいところで、真っ暗だったけど車は止まった。足元に注意ということで、そろりそろりと舗装のないところを歩いた。目が慣れてくるとすぐそこは断崖絶壁のようなのだ。立ち止まったところで彼は上を見てご覧、といった。まあなんと、素晴らしい星空なのだ。月もいないその明るさ。空全体がキラキラ輝いているようだった。ここから見る空が一番美しいと思うんだ、これを君に見せたかったんだ、と彼は言った。薔薇は彼の腕に支えられながら星座の説明を聞いていた。カストル・ポルクスという双子座は薔薇の星だ、ほら、あそこに、と彼は示す。

彼が既婚者であるというリスクは十分に重かったのだが、目の前に広がる幸せは大きすぎた。こんなに無条件に愛されているなんて。

子供を宿した。当然彼は反対した。が、薔薇は私に生きる意味を与えてくれ、と言い張り彼の同意を得た。未来はまだバラ色のもようでもあり、しかし最終場面が来るようでもあり、というざわざわとした感じを抱えた薔薇であった。もし世の終わりが来るのなら私の子がそれを眺め、見届けるであろう、という思いもあった。これは一見無責任のようだけど、本人はけっこう反対の気分でもいるのだ。

周囲のスイス人たちの暖かみの中で薔薇の子は生まれた。出産はチューリッヒ大学の附属病院だった。学生は恵まれていて広い二人部屋が無料だ。たまたま一人だったし、ちょうどクリスマスだったのでフィレスターキなどという豪華な食事でゆっくりと静養できた。その頃は街中の寮から静かな山際に下宿先を変えていたのだが、そこのご主人のLさんという未亡人は彼女の家財道具一式を薔薇にプレゼントしてくれた。六十歳で再婚するため一世帯分まるまるいらなくなったからだ。同宿の友人であったドイツ人のUは、薔薇

の伴侶のように細やかに薔薇と赤子の世話をしてくれた。薔薇はゆったりとしたアパートメントを郊外に借りることになった。小さな森と市営の墓地に隣接する、庭に菩提樹の木のある低層マンションだ。娘のアマリリスと訪れる彼との生活が始まった。彼は子煩悩だった。子供と遊んでいると疲れが取れると。

<アマリリスと薔薇>

日本語で読めるものは限られている。文藝春秋が時々回ってくる。そこに遠藤周作が或る出来事を紹介していた。秋田のシスターSが、マリア様からのお告げを受ける、木彫りのマリア像から涙が流れ出る、というものだ。涙は何年にも渡り百一回流れ出たそうだ。秋田の涙の聖母と言われている。薔薇の友である林檎はその頃ドイツはフライブルグの大学に留学していた。そこから電話をしてきた。このシスターSって、あの妙高の人ではないか、と。そうだろうとふたりは確信した。

このゴーヤングを借りるには、チューリッヒで日本人の世話をしてる公務員で車椅子のKさんという方の紹介があった。この方のお父様が北海道の農業学校でクラーク博士と同僚であったそうだ。戦争のために帰国したのだけど北海道での日本人の優しさが忘れられなくてとおっしゃり、こちらに来ている日本人の世話人のようになっていた。お母様もご高齢なのに優しい方だった。薔薇はそれからも彼らとお付き合いを続け、娘の洗礼を、自分のカトリックではなく、パパのプロテスタントの派でもなく、Kさんのルーテル派を選んで、自宅で今まで関わってきた友人のほとんどを招待し楽しく洗礼式を行った。この会が娘アマリリスやパパのお披露目の席でもあった。

Kさんは薔薇の将来を考えて、若いスイス人でとても毛並みの良い方を結婚相手として紹介してくれた。パパのことを識りながらである。洗礼式にもその方は見えた。何度かデートをしたのだけれど、しかしどうしても心が燃えなかったのでお断りをした。その方は娘のゴッドファーザーとして関わりを保ってくれた。

娘が三歳の時にパパは突然心臓病で亡くなった。米国製スポーツカー、ムスタングを買ったばかりだった。

薔薇は彼の奥さんから訴えを起こされた。外国人警察というスイス特有の外人とのトラブルを扱う警察署があるのだ。揉め事が起こればいい悪いは別として、外国人が常に悪い、という判断をするところである。スイス人を守るためのシステムである。当時はスイスにおける外国人が五人に一人という。豊かなスイスに職を求めて来る外人がいかに多いか、ということだ。スイス人の害となる外国人、ということで薔薇は国外に出なければならなくなった。山国スイスに長かったので、海の香りが欲しくて、スペインへ行くことにした。

日本語の教師をしていた時に生徒さんからプレゼントされた中古のオーディィで出発した。結婚詐欺のようなドイツ人に引っかかり彼がついてきた。パパの死は突然でスイスを出る混乱の中寂しくもあった。それからアフリカへ行きたかったのだ。彼がもうすぐアフリカへ行くと言ってたから。高校生の頃、美しいサハラ砂漠の写真を見たことがある。湿潤の国大和の対極だ、いつかはそこへ行かねば、と決心したものだった。地中海沿岸に沿って幼いアマリリスとそのドクターエンジニアと称するHと南下した。ジブラルタル海峡に近いコスタ・デル・ソルというリゾート地の貸別荘に落ち着いた。対岸にはモロッコが見える。日本の海に比べると潮の香りが薄かった。空はあくまでも青く水もあくまでも青い。波音を聞きながら砂浜で遊ぶか、別荘地内にあった小さな小屋掛けのたまり場でチェスをして遊ぶか、夕方は飲んで騒ぐ、という生活だった。娘は幼稚園に入った。スペイン人やドイツ人のおじさんたち相手に薔薇はチェスで勝ちまくっていた。シェパード犬

を飼った。車が壊れたので、大きな米車を買った。ガソリンばかりやたらと食う。

Hが街で知り合ったオランダ人の二人連れと何回か同席したことがある。女性は堂々としたタイプで男性は若い控えめな人だった。夢の話になったとき彼と薔薇は同じ夢を頻繁に見ていたのがわかった。それは、歯が全部抜けてしまい口の中が歯でいっぱいになってしまうというものだ。彼の説明ではこの夢は自分が道徳的に間違った生活をしている時に見るものだと。二人でお互いそうなんだよねえ、と隣に座っているそれぞれのパートナーを思いながら認め合っていた。こんな生活を続けていたのは、自分が何をしたいのか、がはっきりしていなかったからだ。日本へ帰ったら、と言ってくれる友人もいた。オランダ人で幼稚園のママ友とその夫で、いい夫婦だった。しかし帰りたくなかった。ちなみにオランダ人というのは言語教育がすごく進んでいる。小学校で何ヶ国語も学ぶそうだ。

二年たってHがやっとアフリカでの仕事に就けるようになった。ドクターは大きな企画に参加したようだ。待ちに待ったアフリカの地、アルジェリアのその現場に行った。犬と女は汚らわしいと言われているイスラム世界の真っ只中に住んだ。一人では街へ出るな、会社の社員が車を出して買い物に連れて行くから、と言われてはいたが、やはりそろそろと犬を連れて出るようになった。通りでは子供たちに石を投げられたりもした。郵便局のような人ごみのすごいところでは瞬く間に薔薇のために一本の道ができる。男たちが避けるのだ。社会主義のその国では品物は豊富にはなくて、店の棚が全く空っぽの時がよくあった。ソ連人に話しかけたりはできなかつた。大きなホテルでよく食事をしたのだけど、監視されているようだった。日本の建築会社の人たちもかなりいた。彼らは食卓に醤油の瓶を持ってきていたのですぐ日本人だと分かった。

<アマリリス>

此処では娘の教育は全くできないしHは娘を可愛がる人ではなかつたので、スイスのジュネーブにインターナート、寄宿舎を探した。チューリッヒ時代の友人がジュネーブに引越しをしていて、カトリック系の学校を見つけてくれた。そこでアマリリスは水を得た魚のように元気になった。スペイン語、フランス語、幼い頃のスイスドイツ語、母との日本語と相手を変えてはベラベラとおしゃべりの出来る子だった。ジュネーブという土地柄世界中からの人種が集まっていた。

Hと過ごして四年という年月が経とうとしていた。

カーニバルというお祭りは復活祭の前、断食の期間の前に行われる。バーゼルのそのお祭り騒ぎが有名だった。南ドイツはミュンヘンの郊外に住んでいたのだけど、バーゼルまで遊びに行くことにした。スイス国内を通り途中チューリッヒの近くを走った。Hはひどく嫉妬深い人で、お前はここの墓に入っているアマリリスのパパをまだ愛しているんだろう、俺の留守中墓参りに来ただろう、とか言い出した。事実そうなんだけど、いつもいらさせられているので、気分はひどく悪くなる。薔薇のお金がなくなり、彼の経済力で暮らし始めていたので、彼の出張中は僅かなお金を与えられ閉じ込められたような生活が続いていたのだ。

大きなレストランに入った。宴もたけなわという雰囲気だった。彼はダンスができない。しかしお客さんたちが薔薇にダンスの相手を申し込んでくれば断れない。しばらくして、彼がトイレに立った。車のキイはそこに置きっぱなしだった。逃げるなら今だ！酔ってはいたのだが、とっさにキイをつかみ薔薇は外へ飛び出し車を発進させた。吹雪だった。後部座席にシェパードがいる。最初のレストプラッツでさあどこへ行ったらいいのだろうか、と考えた。国境は越えられない、手配が回るだろうから。娘のいるジュネーブ？ それもなんの解決にもならない、そして、思いついたのがチューリッヒに住んでい

るBのこと。あの娘のゴッドファーザーになってくれた人だ。夜の夜中に公衆電話から電話をした。彼が出て、おいで、と言ってくれた。吹雪の中酔っ払い運転で普通なら一時間のアウトバーンを何時間かけたのだろうか。やっと彼の家にたどり着いた、よく見つけたものだ。雪の降るその戸口に彼は奥さんと立っていた。

居心地のよい小さな家だった。チューリッヒを出てからの四年間の生活を薔薇は夫婦の前で語った。済んだとき、Bは静かに言った。薔薇、お前は今日四年間で一番いいことをしたよ、さあ眠りなさい、あとは任せて。

目が覚めた時、なりゆきを聞いた。あの男が薔薇を自動車泥棒として訴えて、外国人警察の手配が回っている、既にブラックリストには載っている名前だし、即時の国外退出国か、捕まるか、だということだった。Bはスイスエアの東京行きフライトを予約し、支払いも済ませてくれていた。娘のことはジュネーブで何の問題もないから、あとは自分にまかせて、今はともかく日本へ帰れ、であった。シェパードと車は警察が管理する。

身も心もヨレヨレの薔薇はスイスエアの待合室で座っていた。そこへ、ある人が声をかけてきた。薔薇さんじゃないの？ どうしたの？ 立派な紳士だった。昔日本語を教えた生徒さんの一人だ。真っ赤なポルシェを持っていた人だ。スイスの会社の日本支社の社長として東京に滞在しているそうだ。困ったら会社へおいで、バイトぐらいはあるよと言ってくれた。

3 帰国

日本に帰ってきた。十年ぶりだ。古き絆からゆるゆるとこちらの社会に戻った。日本到着から数日後、友人の家を訪ねていた時、薔薇は突然高熱を発して数日間動けなくなってしまった。知恵熱のようなものか、と思ったが。友人には迷惑をかけた。父親は数年前に既に亡くなり、未亡人であるKさんが一人で住んでいた実家に行くしかなかった。住まわせてもらった、そして住み着いてゆく。英字新聞の求人広告で勤め先を決めることができた。ドイツの会社の秘書室での仕事だった。初めてのまともな会社勤めだった。自分のドイツ語のレベルの低さにも気がついた。アマリリスをジュネーブから日本へ呼び戻した。これは親のわがままだと知っていた。会社の遊び仲間も薔薇の人生では初めて出会うような人々だったのだが、その仲間の中の一人と結婚をしてみようか……といい、してみた。男の子が一人生まれた。一年七ヶ月でその人とは別れた。会社の周りの人達は皆知っていたが、薔薇だけ知らなかった彼の嗜癖が原因だ。

アマリリスは美しい娘だったし切ないまでのいい娘だった。小学生なのに下に生まれた男の子の親代わりをしていた、保育園の送り迎えもしてくれた。薔薇の母親がわりもしていたかもしれない。薔薇はフルタイムで働き夜遅く酔って帰ってくると、玄関に冷たい水を持って来て飲ませてくれる娘だった。

大学時代のカトリック研究会のメンバー達と時々会うようにもなった。二年上の先輩で子どもにプールでの飛び込みの仕方を教えようとして首の骨を損傷し、四十日あまりで亡くなった人がいた。同期で修道女になった友もガンで亡くなった。飲み仲間のひとりも肝硬変で亡くなった。若く逝ってしまう彼らの葬儀が続き、残された仲間がよく会うようになった。同窓会が定期的に行われるようになった、顧問の神父さん、ジョンストン神父様をお呼びすることが増えてきた。そして祈りの会、講演会等が行われるようにもなった。薔薇は幹事役で集まりを進めていた。そしてメンバーのひとりと、妻子持ちとはもう二度と恋はしないと思いながら、恋に落ちてしまった。

本当に愛し愛される一人がこの世にいるはずだ、きっと巡り合うはずだ、と思っていたが、この恋人、ルーカスがその人だった。ふたりは素早い決断を重ね、新生活を始めることにした。スイスからのアマリリス、短い結婚生活だった人との息子ケン、そのふたりを加えての薔薇の実家での新家族だ。

ルーカスが初めて家に来たとき、三歳だったケンに紹介したら、ワー、新しいパパだ、とひどく喜んだのだが、僕は君のパパではないよ、とそのミシラヌオジサンは淡々と言ったのだ。ルーカスはまっすぐにそう言ったのだ、外交辞令など言える人ではなかった。そこでケンはショボンとしてしまった。薔薇はそれをフォローできなかった。

既に四十の坂は超えていたのだが、ルーカスとの間に子供が続けて二人生まれた。ケンはこの輪の中には次第に入りにくくなっていく。少しずつ距離ができた。義理のおばあちゃんにあたるKさんはそういう事情を察知してケンに優しくした。料理の腕は彼女のほうが上だ。これも大事な要素で、ケンの生活はほとんど家のあちら側で行われるようになり、Kさんは実質的にケンの育ての親となった。

アマリリスはルーカスをいい人だ、と言った。Kさんもそう言っていた。そうだ、彼はとてもいい人なのだ、薔薇にはもったいないくらい、と言外にあるんだよと、我が友人の一人が言っていた。家のあちら側は古い部分で和室を中心に四部屋ある。家のこちら側は新しい部分で、二部屋しかなかったのだが、あと三部屋増築した。こちら側で、専業主婦となった薔薇は子育てに専念する。前のふたりの時と違って、子育ては楽しかった。ただひたすら子供を可愛いがってあげればいい、何の心配もない、複雑な家族関係も何の心配もない、全てはうまくいっている、というぐあいに薔薇は専制君主として順風満帆を楽しんでいた。

薔薇の支配体制が家の中を締め付けていた。表面は平和のようでも裏では不満が渦巻いていたのだろうか。小さなふたりはめんどりの翼の内側だったので、まだ安全ではあった。翼の外側に追いやられた、と感じている後のふたりにとっては、安穩さが遠ざかる。不安、不満、気づかぬように争いや暴力が入り込んでくる。暴力は伝播する。専制君主は自分の力でなんとかできる、と思い込んでいるので、いろいろ試みはした。しかしそのこと自体が暴力を呼ぶ、ということには気づいていない。幼い下のふたりを守るのに精一杯となってしまう状況がきた。富士山の好きなルーカスは小さな家を富士の裾に買った。週末はそこへ逃げるように四人で移住する、という生活パターンができてしまった。

アマリリスは思春期真っ只中に入る。幼い頃は離れ離れだったり落ち着かない生活が続いていた、母子だったろう。ともに暮らしてもフルタイムで働く母親、そのうちに新しい家族ができる、母の関心はそちらへゆく。自分に向いたとしても小言、命令ばかり。混血児アマリリスはいつもひとり。時には弟たちの優しい姉として家族の中で穏やかに過ごすこともあった。母の希望はバイリンガルを保とうで、学校もいろいろ入ったりやめたりで落ち着かなかった。「私はね、普通の子なんだよ」と彼女は薔薇に訴えていた。薔薇はアマリリスは普通の子ではないと思っていたのだ。大学時代の友人が言った、「この子は僕たちの子のような単なる作品ではないよ、この子は美術品だよ」。そう思っていた。美術品である以上に天才でもあったと思っていた。

アマリリスは友人もたくさんいたし彼氏もできた。その彼氏を母は気に食わなくてむりやり別れさせた。母に対する反抗、怒りは積り重なる。次第にわけのわからない混乱が彼女を巡って起こってくる。家族の中での台風のように荒れた。潔癖症にはいるころから病的であると認めざるを得なかった。徹底的な掃除で扉などを風呂場で隅々まで洗い清める、怒りの発作、母の高価な香水を一本ではない、五本はあったのに全て窓からぶちまけ

る、ペンキで自分の部屋だけでなく居間も白く塗りたくる、この家は暗いんだ、と叫ぶ。拒食症はガリガリにやせ細るまでやり、今度は過食ででっぴり太ったと思うと、過食嘔吐で体型だけは保つ。寝ている幼児の頭にケチャップ、マヨネーズをかける、真夜中炊飯器を抱え台所の床であぐらをかいておしゃもじでご飯を口にはこんでいる、それに出っくわすと、見たなあ〜と激しい恨みを込めたような目つきで人を睨みつける。家族ぐるみの大勢での自宅でのパーティーが多かったのだが、その席でお客の頭へソースをかける、彼女の大きな胸を強調する、等次第に奇行がエスカレートしていった。高校を卒業して専門学校も出た、一時家を出ていたこともある。ギョツとするような化粧で帰宅する。お腹にピアス、奇抜な服装、大声を上げる、万引き騒ぎ、それも宝石店で数千万円単位でやる、場所を変えて数度あった。駅ビルのトイレで弟たちのおもちゃの鉄砲で脅しての強盗の真似とか、捕まえてください、という姿勢でいるので、毎回すぐ捕まり、警察署で却ってリラックスするとかを繰り返していた。まだ依存症ってなんだか全くわかってなかった薔薇。毎日何事が起こり、現実混乱させられ、その日が無事に済むかどうかさえわからない。東京タワーでの、また城ヶ島での自殺未遂で危うく助けられ母が迎えに行くのを待っていたアマリリス。迎えには行ったものの、アマリリスの欲しいものはなんであるか全くわかっていなかったその母。

アマ「お母さんは私を愛している、と言うけど、
私が欲しい愛はそんな愛ではないよ」
薔薇「……」

アマ「お母さんは今何が欲しいの？」
薔薇「……」「平安」

彼女の部屋に通じる階段の途中で後ろを振り返り立ったままのアマリリスと、階段下での薔薇との会話である。アマリリスが自死する数日前である。

アマリリスはその朝、母薔薇と同じ電車で東京方面へ出た。電車の中でバイバイと二人は別れた。その数時間後に渋谷の道玄坂にあるビルの屋上から飛び降り自殺をした。薔薇の仕事場は麻布だったので仕事場の友とすぐ駆けつけた。嘘だろう、なにかの間違いだろう、と言いつけようとしていた。確認させてくれるまでかなりの時間を警察署の廊下で待たされていた。永遠の時間が流れるようだった。地下で遺体を見せてくれた。幸い顔は綺麗なまんまだった。葬儀屋が手配されていて、言うがまま、その車で、お棺と一緒に家に戻った。

諸々の儀式が流れ過ぎてゆく。涙も流さずに仕切っていた。冷静ではあった。自分の存在自体を恥じていた。そう、娘の哀しみ、苦しみにはこれっぽっちも思いが至らずに自分の恥のことばかり。自分の全てが否定されたのだと、自分の過去も何もかも否定された。足元に大きな穴がドカンと空いたような感じであった。自分が存在するに値しない、とも思った。誰の目にも晒されたくなかった。もろもろの儀式の後、閉じこもった。

どのくらいの日数が過ぎたのだろうか、お母さん、もう悲しまないで、もう黒は着ないで、と息子の一人に言われ、ハッと目が覚めた。

彼らとともに生活していることに気づいた。そうだ、この息子たちがアマリリスと同じ目に遭わないようにするのが、今の自分の目標だ。何が何でも、自分が変わらなくては行けないのだ。アマリリスの死を無駄にはできない。

そして動き出した。勉強会、研修会、瞑想の会、神様の問題の棚卸し、己を変えるためにアンテナを張りチャンスを捉え続けるようになった。

ルーカスのガンはその頃には急速に進んでいた。彼の最後の年月は二人できっちりと死を前提とした話し合いをして、彼の好きなように過ごせるように試みた。これはキューブラー・ロスの本を読んで学び試みたことだったが、当人にとっても良かったと思う。彼の兄からの援助もありがたかった。全ては彼のためであった。

ホスピスに入った。三ヶ月ほど過ごした、週末自宅に戻るのだが、自宅の方が心地よさそうなので、ある時期に半分誤魔化しつつ自宅に搬送した。ホスピスを彼が望んだのは薔薇に迷惑をかけたくないから、という理由だった。しかし実際始まってみるとホスピスに通うほうが薔薇にとってよりしんどいとわかってくる。薔薇は最初から自宅のつもりでいたので、モルヒネの供給に関する問題を解決してもらって自宅に移れたときはホッとした。二匹の飼い犬も彼のベッドの下で和んでいた。ジョンストン神父様は時々お見舞いにいらしていたが、末期には頻繁に来てくださった。ジョンストン師の持っていたらっしゃる御聖体によって薔薇は支えられていた。周りの友人たちにはどんどん会ってもらい彼らの暖かさで喜びの時間をたくさんいただいた。

彼はあちら側と時々行き来をしていて、とても広いところだよ、みんなの場所があるよ、お母さんやお兄さんが早くおいで、と誘いに来るよ、と語っていた。最後まで痛み止めのモルヒネを大量に体内に入れつつ最後には意識はほとんどなくなっていったが自宅で出来る限りの医療サーヴィスを受けられた。ヘルパーさん、看護師さん、往診の先生、みなさん心優しい方々で、薔薇は、のんびり休んでくださいね、という彼らの言うとおりに、下のお世話は全くせず済んだし、辛いことはほとんどない彼との最後の時間が過ごせた。心臓の強さで長引いた経過のようであったが、兄や姉妹も最後の日に会えたり、ジョンストン神父もタイミングよく会えた。お昼頃にいらした医師が今夜あたりでしょう、とおっしゃった。グノーのアヴェマリアが流れている時、彼は逝った。最後の息は引くんだ、やはり、と薔薇は見つめていた。死後一時間ほど経った時、彼の前の奥様との子供たちが来て電気をつけ彼の顔を見て皆はびっくりした。あれほど苦しそうだった表情が消えて、生き返ったの、というばかりの満面の笑みをたたえていたのだ。そうなの？やっぱりそちらはそうなの？と私は彼にあちらに行ったら様子を教えてね、と約束した答えを得たと思った。

彼の葬儀には神父様が六人ほど祭壇に立ってくださって、感動した。こんな葬儀は初めてだ。要するに行き当たりばったり神父様たちにお知らせしてしまった薔薇のせいなのだ。カトリックの葬儀に初めて参加なさった歯科医師会関係の方も多かったと思うが、これは普通ではないのです。

彼が逝ってしまってまたしばらくはボーッと過ごしていた薔薇だった。次の夏にはこれが皆でいかれる最後だろう、と子供たちと西表島の母の所へ遊びに行った。

たまたま出会った弟に、いい加減にシャンとしなさい、子供たちの手前もあります、と言われ、この時も目が覚めた。

4 カフェ

五十年前の世界旅行の仲間がドイツにいたのだが、喉頭ガンからの奇跡的な復帰を記念して、東京でソプラノのコンサートが開かれた。若い時の声に比べるとぶどうジュースがワインに変わったような芳醇な声と歌で楽しませてくれて感動した。その帰り道、旅行の同窓会のようなのだが、あの美人姉御と帰りの電車が一緒になり、話のはずみに彼女の息子さんが大工をやっていると！ ブラボーだった。カフェを開こうと思っていたの

だ。来てもらって話をしたら、いろいろ意見がぴったり合う、というラッキーな出会いで、早速計画が具体的になった。その息子さん、フィルは天才的な空間創りの才能があった。アイルランドと日本の混血のせいで、薔薇の今まで体験した世界中のいいところ取りをしようという混沌たる感性を理解してくれた。図面はかけない人ですべてが頭の中だそう。薔薇とフィルは話し合いながら、無垢の木、自然のものだけ使う、塗料は柿渋と墨だけ、という条件でアジア風のしかし無国籍で、風の通う爽やかな、細部に文化を感じさせる、というカフェ空間を作った。

陶芸教室をほそぼそと続けていたのだが、偶然とは言えぬ良い出会いが重ねられ「カフェギャラリー&窯 ばおぼぶ」が誕生した。薔薇五十七歳の秋だ。

オープンして最初の日曜日にエンジェルがばおぼぶに入って来た。それが、薔薇が幼稚園の時に得たあの暖かい安心感を持ってきてくれた。

おばあちゃんKさんは一年ほどで風邪をこじらせ肺炎となりだんだん弱り始め、上の息子の心優しい介護に支えられ過ごしていた。一人でトイレに行かれなくなったら終わりだ、と前からよく言っていたのだけれど、その日は昼頃トイレには息子に抱えられて行った。前日の晩に薔薇が呼ばれて別れの挨拶があったし、お風呂にはいつもより長い時間入っていた。準備だったのだ。トイレで立てない、と叫んだ彼女を薔薇が助けおこし、息子と抱えて座敷に運んだのだけれどKさんはもう息をしていなかった。八十八歳だった。

薔薇の母も九十二歳で南の島で逝った。住んでいた西表島には病院はないので、石垣島の病院で腰のリハビリをしていた。前の晩にはお寿司が食べたい、と買ってきてもらったそう。姉が夫君とともに寄り添ってくれていた。薔薇は喪主として出席しただけだった。これで四回喪主をやったことになる。

人が逝く、しかし日常生活はぼーっとしていても流れてゆく。そして飲み込まれる。死者達のために思いっきり大泣きをしたい、という動機もあった。荒行のような何かを求めている。巡礼にでも行くか……

スペインのサンティアゴ・デ・コンポステーラ巡礼は本棚に誰かがいれたであろうパウロ・コエリョの本「星の巡礼」で興味を惹かれた。偶然フランスから映画もきた。その画面が薔薇を呼んでいた。カフェを皆に託し、三ヶ月の休みをとって一人で出発した。

<ばおぼぶ・入口>

<ばおぼぶ・店内>

カフェをやりたい、という思いはずっと昔に原型はあった。貴族のサロン文化に憧れたのが始まりだ。様々なジャンルの文化人が談笑し、交流する場だ。フランスの貴族のご婦人たちの各々の城における何曜日のになにに婦人のサロン、とか呼ばれていたものだ。スイスに行った時は具体的なヨーロッパのレストラン稼業を学ぼうと思っていた。ヨーロッパ各地での素敵なレストランに出っくわすと、そこのオーナーがひどく羨ましい、と感じたりしていたものだ。

日本に戻ってから、フルタイムで仕事をする時期とか専業主婦としての時期とか経てしばらくは忘れていた。ルーカスの無き後陶芸教室をやっていたのだが、食事をするとき、あ〜カフェがあったらいいのに、と口に出ていたようだった。こんな土だらけの教室ではなくカフェが別にあつたらどんなによかるうか、と思っていたのだ。その仲間に、早くしないと年を取ってしまうわよ、と言われ、本気になった。

そして、五十年前の世界旅行のつながりでフィルに出会い、具体化した。建築をする間

のワクワクする楽しい思いもあったし、空間は思った以上に素晴らしい出来となった。自然素材、無垢の木のみの使用、イメージをアジア風とした。今からみると半分くらいの狭さだったが、今の雰囲気はもうでていた。家具一つ一つに思いがあった。今まで使っていたアンティークのものを使いまわした。カーテンはまだなかった。

空間を作り上げること、それをハードとするとソフトな部分、この空間で行われることも選択が大事だった。最初からノウハウが分かってやっているのではなかった。全ては直感で進んでいたようだ。あやまちもあった。それまでは知りもしなかった全く価値観の違う人々との関わりで、危うく壊されそうになったこともあった。世界にはまだまだ知らない部分があるのだということも学んだ。

最初に聖書を読むグループが出来た、今に至るまで続いている。長年聖書を読み続ける、旧約から新約すべてを淡々と何度も繰り返して読み続ける、そういう作業を否応なくこの十六年やってきた。メンバーは入れ替わりの部分はあるもののベースは同じメンバーでずっと続いている。己の信仰についていつもここではさらけ出している。こんなにも違う生き方、性格をもったメンバーたちが、各々なりの神とのかかわり方をしている、その姿を安心して垣間見ることができる。おまけにほとんど毎回ミサがここで行われる。

アート系の動きはそれとは違って様々な方向性があり浮き沈みがあった。絵画系、文学系、音楽系でいろいろ催し物や勉強会を試みた。近隣で独特な活動を行っている方々のお話のシリーズは面白かった。コンサートは音を出しすぎての失敗が数回あった。ご近所を敵に回すことになってしまったのは失敗だった。今はひたすら大人しく、アコースティック系のみである。

展示はご希望があれば大体はお受けしている。

食べ物に関しては、最初はその道に通じている方を選んでお願いしていた。そのうちにだんだん自分で出来ることをやり始めた。パン作りは前々から好きだったけど、ケーキは子供たちのためにはパパがいつも作っていて、薔薇は焼いたこともなかったし、料理も好きではなかったのだ。息子たちがびっくりしている、今の母が料理ができるようになったので。

最初の頃の薔薇のケーキを食べていた友人の息子さんが、こんなケーキを作っていて、大丈夫だろうか、と心配してくださったとか。人参、かぼちゃが大きな塊でゴロゴロと入っていたのだ。今はケーキの味、パンの味、スープの味には自信がある。時には失敗もあるのだけど。

<玄米雑穀おにぎり>

<全粒粉パン>

商売としてやっていたのではなさそうだ。この稼業をやりたくてやっていたようだ。結果食べていければいい、ぐらいいで落ち着いたのだろう。人と接するのがメインであるため、もともとお金よりも人を大事に考えているので、それがギリギリ、しょせん道楽よ、と取られるほど気楽だったのか。

なんときついおばさんだろう、という印象があったようだ。気持ちとして相手を大事に思っている、表現方法が直接的でオブラートに包まないのがそう思われる。常識的でないのだ。今もその表現方法で人を傷つけたりすることをしてしまう。少しは前より穏やかな表現ができるようになったのだが、それはみなさんに教えられてきたからであろう。

ここは、このカフェは大人の学校である、との意識があった。すべてのイベント、勉強会は学びであった。まずは薔薇のための学びの場であった。コンサート等でお客さんは薔薇一人、なんていう時も何度かあった。だからこそ、ひたすら客になろうとした。

このカフェの基盤になっているのは「親の会」だということを時々忘れる。「親の会」

は会の名前を付けようという時に一番素っ気ないものをつけたのだが、これは「問題を提示する子供を持った親たちの会」である。「問題を持った親たちの会」と普通に言われるものと同じなのだが、問題は提示している子供にあるのではなくて、その親たちに問題があるということを表現したくてそうだった。

不登校の子供たち、家庭内暴力の子供たち、摂食障害の子供たち、精神病とまでは至らないところの、心療内科にお世話になる子供たちが、この会のメンバーの子供達だ。それらをいまや、当たり前現象として我々親はとりはじめているのだが、まだまだ現役で渦中におられ、苦しんでいる方々もいらっしやる。カフェを始める時は横浜のこの会が立ち上がってから六、七年たっていた。ミーティングの会場に使っていた場所がたまたま閉鎖されることになり、次の場所を探していたのだが、カフェを作ってそれにすればいい、と決心した時でもあった。もう移動の心配はなくなる。薔薇は死ぬまでこの「親の会」をここで継続するつもりである。

このカフェは開いてみていろいろ、ああそうだったのか、と納得したのが上記の事どもである。薔薇の人生すべてがここで行われているようなのだ。お客様たちは薔薇の人生のひとつひらを共に生きてくださっている。

†

さて、これまでの間に薔薇が直感的に選んで試みた自己啓発のいくつかをここに紹介したい。これらのおかげで少しずつ、曖昧な精神生活が整えられてきた感じがするのだ。

内観 7日間 2003年
サダナ 3日間 2006年
ヴィパッサナー 9日間 2007年
サンティアゴ・デ・コンポステーラ 45日間 2008年
サダナ 9日間 2011年

*内観 7日間

カトリックの祈りの仲間の一人が、内観をやっているらしい、というのは知っていた。いつもなにかの折に内観はいいですよ、とニコニコしていたからだ。しかし彼のその言葉をほとんどの人は聞いていても聞いていないようだった。薔薇もそうだった。アマリリスが病気になってから、病気の子供よりその親が勉強しなさい、という精神科の先生のススメで薔薇はいろいろな勉強会や講義に出ていた。それぞれで必ずなにかの気づきは得ていた。本も何十冊と読んだ、残るものはあった。だんだんこのギョウカイが見えてきた。いろいろ学んだことは学んだのだ。しかし西洋的なアプローチばかりだったのが気になり始めた。そして、いまいち何かが足りなかった。ちょっと切り口を変えたくなっていた。東洋にだって何かあるはずだ、と。そこで思い出したのが内観だった。ちょうどその人に出あったので、聞いてみた。内観でいいですか？ 彼はにこっとして、いいですよ、とても幸せになれますよ、とおっしゃった。薔薇は、ええ～？ 人って幸せになっていいんですか？

人は幸せにはなれない、と思い込んでいた、ということに自分でも初めて気づいたのはその時だ。逆説的だが、薔薇は友人に対して、今の私はとても幸せよ、とよく言っている、常に言っているのだ。事実そう思っていたのだけれど。しかし心の奥底では違っていた？

夏だったので、箱根の山の中の内観研修所を選んだ。一週間、朝から晩まで部屋の隅に置いた九十センチ四方の屏風の中で、幼い頃からの記憶をたどる。部屋の大きさは八畳程が一人分でトイレも次の間もついている。日に二回は温泉に入れる、という環境だ。まずは母との関係性そして父との関係性。二、三時間おきに聞く方が来られる。屏風を外側か

ら開けて下さるのだが、そこに畳に頭をこすりつけて礼拝の姿勢を取っていらっしやる。内観する人、つまりこちらを仏様だと設定している姿勢だ。西洋式の先生患者の上下関係に慣れきっていたので度肝を抜かれる瞬間だった。親鸞上人が考案された修行僧の教育法だとか。ここでは成果があった。記憶の断片一つ一つがジグソウパズルを完成させるように、絵巻物のように、映画のようになってきた。彼らがそこに生きていた。そこに現れてきた父、母をドラマの主人公を見るように愛おしく思い、客観視していた。ひとりの男として、ひとりの女として。彼らは一生懸命生きていた。

それから、お腹に抱えていた冷たいものがボールのようにぼろんと出て行ってしまった。転がっていくさまが見えたようだった。それ以後全く戻ってこない。

家に帰って、すぐにKさんの前に座り、頭を畳に触れるようにしてお辞儀をし、今までの生活における感謝を述べた。Kさんはとんでもない、と同じように座り直しお辞儀をしこちらこそ感謝だと述べた。ふたりは泣いた。ふたりの間にあった過去の冷たさが溶けた。

子供たちにも一人一人感謝を述べた。きょとんとした。

Kさんは父の後妻さんとしてこのうちに来た人だ。薔薇の母親と父親の生活は薔薇が幼稚園のころから、女性の問題で影がかかっていた。小学校の高学年になる頃、母から離婚をほのめかされていた。実際に離婚したのは薔薇が大学生になってすぐ。Kさんとの関係性は母よりも長いという。ほかにも数人影が見えるなんとも華やかなワイルドな時代だった。薔薇にとって勉強、家事の両立はきつかった。そしてこれから将来父の面倒を見るはめになるのは真っ平御免、とっていたので、Kさんとやりに家に入ってもらおうと考えた。薔薇のいとこが新聞記者をやっていたので彼に相談をし、二人でKさんの営む小さな割烹へ行った。薔薇はそこでKさんとは初対面だ。しかしすぐ薔薇だと気づいたようだ。挨拶は全く交わさなかった。いとことカウンターでお酒を飲んで何かを食べて、ただそれだけで帰ってきた。それから数日してKさんは薔薇と父の住む家に来たのだ。着物姿の彼女は玄関の間に三つ指をつき頭を床にこすりつけて丁寧に挨拶をした。そして家に入ってきた。

*サダナ 3日間

サダナ？ 何それ？ 出て見ればわかるわよ、と聖書を読む仲間に誘われ、葉山のどこかで参加した。

サダナ三日間で、座って瞑想をすることを知った。これはインドのカトリック司祭が考案した西洋と東洋、イグナチオ・ロヨラの祈りとブッダの瞑想法、それに現代心理学を合体させたものだ。そのブッダの瞑想法はヴィパッサナー瞑想法として今に至るまで伝えられていると言う。それでヴィパッサナーに興味を持った。

*ヴィパッサナー 9日間

ヴィパッサナーは当時は京都の丹波にしか行っているところはなかった。山の中に百人近くの人を収容できる質素な建物があった。大ホールに全員で座る。基本的におしゃべりをしてはいけない。朝から晩まで食事その他の雑用以外はほとんど座っているわけで、最初の二、三日は脚の痛さで悲鳴を上げた。どうしたらいいのですか、と聞いたら、馴れませ、と答えが帰ってきた。鼻から吐いて鼻と唇の間に触れる息を感じることからスタートし、意識を頭のとっぺんから足先まで全身をくまなく巡らせていくことを学んだ。講話もある。ひたすら意識を体に巡らし、これを繰り返すことであった。

家に帰っても毎朝晩一時間は続けること、と言われ、無理だ、と思ったのだが、まずはやってみようか……と帰ってきた晩に座って見た。あと一日ぐらいはできるかなあ……あと一日かなあ、そしてまた一日と。もちろん一時間なんて座ってはいられない。形だけでもいいじゃないか、とかなりユルユルに変化させた。あるとき、祈りの姿勢を取っているのに、キリストがいないじゃないか、寂しいなあ、と感じたのだ。自分がキリスト教徒で

あることに気づいたのだ。キリストの伴走が加わった。結局は内容もどんどん変わったものの、祈る、という習慣が身に付き今に至るまで毎朝座っている。脚はもう全く痛くない。この姿勢が一番楽である。

*サンティアゴ・デ・コンポステーラ 45日間

サンティアゴ・デ・コンポステーラ、死者たちを思って大泣きをしたい、という思いと、苦行のようなことも考えていた。休暇が欲しい、大好きなヨーロッパで過ごしたい、という気持ちもあった。日本語の案内書は全くないし、コエーリョの「星の巡礼」とシャーリー・マックレーンの体験記を読んだだけ。でも友人が巡礼を扱ったフランス映画の上映を東京で行ったあと、DVDを持ってきてくれた。美しい映像だった。その道が私を呼んだ。スペイン語の勉強を始め、皆に行くから、と宣言しつつ自分に言い聞かせて一年近くの準備をし、最小の荷物で翌年の四月にひとりで出発した。

ヘレンとマークのロンドンの家をまず訪問した。四月といえどもその日のロンドンはかなり吹雪だった。町の中心から離れ三階建てぐらいの小さな家々が連なっている。前庭から入る、いかにもロンドンぽい住宅街だった。家の中のあちこちはまだマークの工作中でもあった。そこで荷物の最終の点検を行い、マークご自慢のジャガーでドライブし、メアリー・スチュワート幽閉の城巡りなど少し休憩をしてから汽車でパリへ向かった。ロンドンの駅では別れ際にヘレンとマークの長身の腕の中で涙ぐんでしまった。これっきりか、と思ったのだ。パリから巡礼の出発地点、サン・ジャン・ピエ・ド・ポーまでは二段ベッドの夜行列車で、男の人ばかりのコンパートメントだった、部屋を変えてくれといったが、ダメだった。フランス語でよくわからなかったが、研究会かなんかに出席するらしいインテリ層らしくて、危険は感じなかったが、知らぬ男たちとともに、というところが日本の深窓から来た娘はドキッとしたのだ、これから先にこれが当たり前になるとは……。到着した山裾のその村は静かな朝をむかえていた。事務所で登録をし、必要なものをもらって、狭い街の通りを抜け橋を渡ると、もう山道へと入った。

道はフランスとの国境であるピレーネ山脈を越えるところから始まる。一日目が一番きつい。千年の歴史を持つ巡礼路だ。美しい自然のまんま残っているというのもすごい。

ドイツ人、カナダ人、スペイン人、韓国人が目立ったけど、世界中から人々が歩きに来てた。老いも若きも、ベイビーも。日本人に出会ったのは八百キロメートルの道中で数人だった。かかる日数は人によるが三十〜四十日ぐらい。薔薇は体調の調整でしばしば休んで六十日程。

英語とドイツ語で人々と話した。スペイン語はお店での注文ぐらいに役立った。いろいろな人生があったが、しかしよく似ていた。自死をした家族を持つ人々とどれだけ出会ったであろうか。あなたもか！と叫んだ米国系韓国人もいた。

二段ベッドや三段ベッドのユースホステルのような大部屋が多く、男女は混合で、オヤジの大いびきで悩まされる夜な夜なもあったが、食事は巡礼者用でメインが肉か魚でたっぷりあり、ワインはテーブルにひと瓶ついていた。宿泊も食事も千円未満であった。真ん中より後半にかけて疲れてくると、ホテルを取ってゆっくりとお風呂に浸かったりという贅沢も自分に許した。

ワインは若い時から好物であった、そしてアルコール依存にもなっていたようだ。しかし巡礼の十五、六年前のある朝、幼稚園生である息子が、お母さん臭い、と言ったのだ。夜は飲んででも、朝はしゃきっとお母さんに戻る、つもりでいたから、その声にびっくりした。そして恥じた。その晩からアルコールは止めた。ロハで飲めるワインが毎晩テーブルについているのは残念だったが、水も美味しいものだ。

サンティアゴに着いた達成感は喜びそのもの、幸せだった。大聖堂での到着者のためのミサ、道中見知った顔との再会、数日のんびり街の散策などしたが、オランダ人のマリアの誘いをかけて、バルセロナの友人を訪ねることにした。電話をし、夜行バスで出発した。ドロテアという八十歳ぐらいのお婆ちゃんだが、日本に来た時に家にホームステイし

たので、今回は一人暮らしの彼女を訪ねた。サグラダ・ファミリア等ガウディの建物を訪ねバルセロナを満喫した。そしてその後ドイツとスイスにいる友人を訪ねた。移動は汽車にした。地面の上にはいたかったのだ。

マインツに住む学生時代の友人とそのファミリーを訪ねた。日本人でありながらドイツ風に家をまかなっている彼女だった。ご主人はバイオリンを作るマイスターだ。彼女と娘たちは数回日本に来て我が家に泊まっている。

スイスの真ん中へんの山間部になるだろう、クール近くのTrinに住んでいるウルストラを訪ねた。一番の友人であるとも言えるのだ。彼女は障害児の教育者として仕事をしてきたが、定年退職後、絶景の地に土地を買いペンション兼自宅を建てた。友人たちとメデイーションと音楽演奏を行い、ライン川源流に近いスイスアルプスの真っ只中の小さな村での生活を満喫している。二週間ほどいただろうか、彼女と毎日毎日話した。その小さな村はハンブルグから移り住んだ彼女のふるさとであるし、私にとってもスイスに於ける心のふるさとである。お互いの誕生日ごとに国際電話をし合っている、手紙も書いている。十歳年上のウルストラはもう八十三歳になるのだが、声は全く昔のままだ。

*サダナ 9日間

東日本大震災のあの年の夏だ。福島へのボランティアとか友人宅への訪問とか、自分には何ができるのかと模索はしていたのだが、無理なことがわかった。それで夏の終わりに福島ではなくて広島へ行こう、と決めた。サダナ九日間だ。静かに祈りたくなった、ということだ。イエズス会のその修道院は広島郊外の山際にあった。和洋折衷の古い建物だった。カエルの声とせみの声の中、畳敷きの広い聖堂でひたすら祈りの時間をとった。座禅布団があったので座りやすかった。

ちょうどプログラムの真ん中あたりのセッションで、今までの人生で一番悲しかった時を想定してみることとなった。十四年前の娘の自死のこと、遺体を確認する前に長時間警察署の廊下で待たされていた場面を思いうかべた。すると突然イエス様がスーパーマンのように飛んできて、ビルの屋上から飛び降りた娘を空中で抱きかかえ、薔薇の目の前に立たれたのだ。彼の腕の中にこれ以上の美しい笑顔はないという笑顔で娘アマリリスがいて母にはほほ笑みかけてくれた。そして彼らは天に飛んでいった。

なんという喜び、なんという安心感だったろう。今まで巣食っていた哀しみがすっかり消え去った。娘が救われたかどうかの確信がもてなくてずっと気になっていたのだ。イエスさまの腕の中にいる娘とは！ これは薔薇の救いであった。

まさにルンルン気分が広島から戻った。

ひと月もかからなかった、乳ガンが発見されるまで。
笑ってしまった。神様、今度はなんですか？

いわば、ここまでが、己を変えなくては、と決心した、アマリリスの死の一九九七年から十四年間で食らいついた外部へのアプローチであった。驚く程の収穫だったと言える。扉が次々と開けられ精神生活を豊かにするための世界がそれらの内側に広がっていた。

そして、
ガンの発見とは一体何なんだ！！？？

†

秋田の涙の聖母に関してはチューリッヒにいた頃文藝春秋で読んだことと、帰ってきてから笹川さんご自身から送られた「秋田の聖母マリア」という本を読んだことだけだった。急にその聖母に逢いたくなって、もう公開されている季節ではないとも知らずに突発

的に飛行機の切符を買ってなんの申し込みもせずに秋田へ飛んだ。ガンが発見されてひと月半ぐらいだった。十一月は宿坊がしまっている。しかしその日は神戸のシスターTが申し込みをしていて、開いていた。聖職者のためには開けるそうだ。神戸のシスターは東北での傾聴のボランティアを何ヶ月かなさっての帰り道だとか。東北まで来ているのなら秋田のマリア様を訪れよう、と思われたらしい。薔薇はそのシスターがいらしたから泊めてもらえたわけで二泊ご一緒できた。二人できりたんぽを突っつくなんて、なんと幸せな時間だったろう。秋田の聖母といえはシスター笹川あつての場なのだが、シスター笹川がまだ在俗の頃にお会いしたあの妙高での晩の話をシスターTに語った。あなたには一人とても素晴らしいお子さんが生まれます、と笹川さんはおっしゃったけど、四人も子供を産んだいま、どの子だかわからない。と言ったところ、シスターTは即座に、お嬢さんに決まっていますでしょ！と言われた。その瞬間に薔薇はそうだ、とわかった。そうではないか、と思っはいたのだが。キリストとあなたをつないでくれたのはお嬢さんです。と彼女ははっきりと言われた。

自死という行為が教会では掟違反なのだ。シュタイナーでもあの世で自死の者が苦しむ様を語っている。しかし自死に至るには様々な経緯があるはずだ。アマリリスの真っ直ぐな暖い心を見直すべきだ、と初めて考えた。掟は破るのが趣味だったような薔薇ではないか、実際教会内のおかしな掟は無視しているのに、この掟にとらわれていたとは、何というパラドックス！ 人というのはそんなものなのか。そうだったね、アマリリス、誤解してごめんね、と心はさっぱりして嬉しくなった。

信仰深い、なんてとんでもないのだ。神様だ、キリストだ、ということに関して否定はしない、しかしほんとかいな、と思っないわけではない。今まで散々語ってきたのだけど、神様が存在したほうが説明がしやすいから、とか、あるいは神様という言葉を使えば神様のような存在について語りやすいからかもしれない、とか、あるという方が楽だから、とか、と考えている時もある。娘を連れて飛んできたキリストについては、これはどうしようもなく現実なのだ、しかし幻想かも知れない。思い込みの錯覚かも知れない、わからないのだ……とごまかすしかない。わからないのです、神様のことは、本当は、わからないのです。

秋田の立派な聖堂の左側の広い廊下に涙のマリア様はたっておられた。硬い木の表情で、何も語っては下さらない。静かにそこにたっておられた。その木の像と、本当のことがわかってない薔薇は日差しの中で向き合い、時間を過ごした。

最初は手術は受けるつもりではいたのだ。しかし医師との相性が悪くてへそを曲げ、秋田から帰って、手術を拒み、病院をおさらばした。薬剤師の友人の助けを借り、免疫力を上げる方針でしばらくは頑張った。良いといわれていることで抵抗のないものは取り入れた。かなり元気な年月を過ごした。しかしだんだん油断したのだろう、管理がきちんとできなくなり、あちら側、ガンのことをバルバラちゃんと言ったのだが、バルバラちゃんが優勢になってくることがあった。そういう時には病院へ行ったが、しかし投与された抗癌剤が余りにも強く体にダメージがあったのですぐやめ、もう二度と病院へは行くものか、と思った。数年後に又かなりのピンチに陥った。とても迷ったのだが、周りの友人たちの勧めもあって、嫌だったら帰って来ればいい、とか、最終決断は自分の直感だよ、とのありがたいサジェッションで病院へ行く決心がついた。今回の病院治療では抗癌剤でほどほどにバルバラちゃんを押さえ込んだのだが、同じ薬を長く使うことによる停滞感から放射線治療も行った。発病から八年たっている。薔薇は素直でもあるのに、時には臍曲がり、七面倒臭い道を選ぶということになる。しかし己の選んだ道を歩くのだから、責任は己にある。

しかしながら、いい加減にうんざりもしてきていた、このバルバラちゃんと付き合うこ

とに。そんなある日、ひよんなことで、そんな話となり、友が言った。心臓病を患っている人はガンにはならない、と聞いていたけど、あるんだねえ、と感心？し、薔薇のガンは肺に転移したりで、結局胸の部分に病が集まっている。これは多分愛の問題にかかわっているのではないの？ 胸は愛のチャクラのあるところだから、と。

そういわれてすぐ納得してしまった薔薇だった。どんぴしゃりなのだ。薔薇の人生はまっすぐに愛を求めてきたのだ。何もかもを切り捨て、愛することを大命題として生きてきたのだ。その男たちとのドラマの陰には何時だって反対側で苦しみ、泣き怒り、悲しんでいる女たちがいたはずだ。薔薇が子供の時に母と共に味わったあの虚しさ、理不尽さを、大人になって、加害者に転じ他の人々に与えていたのだ。

彼らの痛みが今薔薇の胸の部分に証として存在している。

実感としてそれを感じた。

罰とか、償いとか、十字架とか、なんとでもいえる。己の作った陰の部分の証がこれらの病だった。このように位置付けると、ああ、なんとわかりやすいプラスマイナスだろうか。

これを理解し納得した今、ある意味、病は終わったような気がする。

たまたま放射線治療の結果だろうけど転移した部分はきれいに戻ったし、ゆるゆるの抗癌剤でこれといった症状が目立たなくなっている。毎日の生活での疲労感も前ほどない。

そしてこの十一月に日本にお見えになった教皇フランシスコのものすごいパワーの余波も受け元気をいただいた、そのタイミングが全て重なっていた。

†

薔薇はテレビも新聞もシャットアウトしてもう十年以上になる。時間の無駄だと思ったのだ。知識は読書と友人たちからなのだ。かなりの縄文人で、携帯電話も持ったことがない。電車に乗るのもいちいち現金で切符を買っている。自由時間を何に使っているか、といえば、かなり多くを読書に割いている。薔薇は読書で育った子なのだ。読書で老いを整えている。おしゃべりにも時間を割く。これが一番の楽しみかも知れない。カフェはだから天職なのだ。文章を書くこともとても楽しくて時間を使う。

カフェはおしゃべりの場である。イベントや勉強会もかなり行われる。金沢文庫という横浜のハズレの海も山もほどほどにあり、北条家ゆかりの称名寺を懐に抱えた、縄文人がその辺を歩いていただろう、この土地にもう十六年もカフェをやってこられた。十六年間いろいろな人達が入り出りをしてくださったということだ。彼ら皆が、この場を作り上げてきた。彼らが置いていった気配とか、知識、経験などを、この場も薔薇も吸収することで、学び、今の姿へと変えられてきた。

<木漏れ日>

入口の前には結界があるのだろうか。ここから引き返してしまう人々が居る。入りにくい、という声も時々聞くから、こんなにオープンなのに、と不思議なのだが、薔薇の個性が強くて入れない、と感じる方々なのだろう。外側は鬱蒼とした木立、それも手入れがされていないボサボサのまま。たまにはスタッフのおかげで小奇麗になるが。十六年の間に大木に育ってしまったえのきの木とか建物の北側から南側に床下を通してテラス側に移ってきた竹林とか、裏庭から屋根を伝って東側に伸びてきたアイビーの蔓とかに囲まれている。東側の大きなガラスのひき戸が入り口だ。正面はギャラリーの壁と棚となる。右側がカウンターで薔薇手製の陶器の食器が雑然と並んでいる食器棚がある。左側が客席となる。洋風の椅子席と和風の座敷席と、テラスに出るの席となる。ガラス戸がほとんどなので室内は明るいはずが、どういうわけか薄暗い。建物全体が木に覆われているようなのだ。座敷の印象が強いのが少し不満なのだが、アジアを意識しながらフランス、イギリス

の家具も収まっている。

座敷にわらしがいるのを見た、という人がいた。

ここでは楽器の演奏がのりやすい、異世界につながる音が出る、とおっしゃったミュージシャン。

同じ舞もここで、どこの舞台で見るよりも、最高に美しかった、と言われたことがある。

天使はしばしばここを訪れてくれる。

二〇一九年十二月 Advent
のぶよ

<薔薇とばおぼ>

第Ⅱ部 サンティアゴ巡礼日記

スペインの巡礼路を歩いた

スペインでは巡礼路を CAMINO（カミーノ）という。こんにちは、さようなら、という代わりに巡礼路ではブエノカミーノ、ボンカミーノと挨拶する。二〇〇八年四月十五日から六月五日までの五十二日間、私はカミーノを歩いた。世界中から歩きに来ている人達と出会いみんなとその言葉を交わしてきた。

途中バスやタクシーを使ってしまったけれども、フランス側の出発地、サン・ジャン・ピエ・ド・ポーから歩き始めてサンティアゴまでの八百キロメートルを歩き通した人は一五%程だという。一応これに入った！ 全行程を完全に歩く人は三%程らしい。

出かける前に読んだこの道に関するパウロ・コエリョやシャーリー・マックレーンの本は刺激的だったし、フランス映画「サン・ジャックへの道」を見たときはその美しい道が私を呼んでいる、としか思えなかった。

九世紀に始まったというこの巡礼路は、レコンキスタ（国土再征服運動）といわれているイスラム勢力へ対するキリスト教国連盟の戦いと連動して成立したらしい。

戦いのための道という忌まわしさにひっかかったものの、しかしそれから千年以上もの間歩かれてきている。

真珠貝は異物を核にして真珠層を巻いていくという。

きっかけは戦いかもしれないが、人々が歩き続けることにより、何かが変わってきているのではないだろうか。歩くということは人にとってはひどく単純な行為だ。千年の間たくさんの人々が汗と血にまみれ様々な思いと祈りとでこの道を歩いたのだ。そして今そこには美しい真珠のような何かがあるようだ。

二十一世紀に入りここ数年で爆発的に増えたらしい「その道を歩く人々」。道自体が世界遺産にもなったとか。日本で手に入る情報はとても少ないまま、私も歩きたい、どうしても歩きたい、と熱い思いに駆られていた。仕事も子供たちも何もかもが大丈夫だ、という態勢が整ってくれたので、私はヨーロッパで昔の友人達と出会うプランも含め三ヶ月の休暇をとって出かけていった。

<ヘレン、マーク、ニコ>

4月9日

成田を発つ。

ロンドンでヘレンとマークが迎えに来てくれた。十一年ぶりだ。ニコという二歳の男の子がいた。この子に会いたくてロンドンへちょっと寄り道。車は昔のモーリスではなくてジャガーだった。ロンドンの街外れの小さな前庭のある共同住宅。廊下の壁の色のグリーンで迷っていると。バスルームは使えるけど未完成。アジア系のインテリアで日本で買い集めたものも目立つ。キッチンの窓から見えるのは裏の学校。

明るい太陽とニコの泣き声で目が覚めた。居間の奥に据えられた暗赤色のベッドコーナー。彼らが仕事に行っている間、パソコンで「道」の情報を取り出して眺めた。写真と歩いた人々の感想とで一気に「道」が身近になってきた。

買い物もいくつがあるのでヘレンと中心街に出る。チョッキがいいのがあって助かった。重さが分散できる。リュックを軽くするために必要最小限度の物を持ったつもりだったが点検をしてみるとまだ省ける。スイスのウルスラのところにそれらを送った。最後は彼女のところで休暇をとる予定なので。靴はやはり望む物はなかったので履いてきたメルルでよしとする。マッサージボールもやっと手に入れたが、思っていた物とちょっと違う。

ロンドンの街の中の大きな木がうれしい。そこに生きている年寄りのよう。ジャガーの心地よさに沈み週末はチェスターフィールドのヘレンのご両親を訪ねた。高速道路に乗るともう緑の世界。身長の高い優しいご両親に暖かく迎えられゆったりと過ごさせて頂いた。メアリー・スチュワートが幽閉された城を見に行った。

4月14日

彼らの都合で出発日が決まった。ヨーロッパに着いたら地面の上に行く事になっていた。彼らに助けてもらって予約をすます。寝台車、一等。

ロンドン駅での別れ際に涙が出てしまった。巡礼途上での行き倒れもいいかもと思ったこともあり、これで永の別れかと！ 背の高いヘレンとマークにしっかりハグしてもらって出発。

ロンドン～パリ間は最新の滑らかな海底特急。片言のフランス語使いたくてうずうず。地下鉄を乗り換えオステルリッツ駅よりの夜行列車。出発までの三時間を駅のカフェで出発予定の電光板を気にしつつ行きかう人々を眺めていた。服装にしる漂わせている空気にしる日本とほとんど変わらないと感じる。初めてヨーロッパに来た四十年前に感じた文化の差異がもうない。

巡礼に行くような夫婦が一組現れた。やわらかい感じのフランスの男たち三人とのコンパートメントで出発。

4月15日

巡礼の出発地、サン・ジャン・ピエ・ド・ポー駅に着く。何の案内もなく静かな住宅街。車を降りた巡礼者たちと共に古い街のある中心のほうへ向かい巡礼事務所を探し

た。路に面してない奥の建物で分かりにくい。並んで登録をして巡礼パスポートと資料をいただく。街の狭い通りにはこぢんまりとお土産屋が何軒か並んでいた。下にきれいな水がとうとうと流れている橋を渡りいよいよ道が始まる。

乗換駅で英語もフランス語も分からなくて困っていたデュッセルドルフからの老夫婦（パリでみかけた）といっしょに歩き始める。来る前にあちこちたくさん歩いてトレーニングをしてきたらしい。農業なので今は暇な時期とか。信じられないがサンダル履きだ。これが一番だと。八キロメートル先のオリソン巡礼宿まできつい登り。休憩でデュッセルドルフ製の菓子パンの甘さが元気をくれた。もうこの道にそんな宿はないのではないか、と絶望がよぎった頃、角を曲がったら山小屋が見えた。

フランス側の山並みがパノラマのように広がる宿のテラスでカナダのケベックから来たというマリーとリリーと仲良しになる。彼らの友人に私に似た感じの人がいるらしい。少し年下で「山椒は小粒……」の感じ。

なんと穏やかな日差し、なんと静かな時間だ。空気がシーンといている。スイスでの昔の生活、わが青春を思い出す。

あれがあったからこうなった、というより、そのようにしか選択できなかった私がいたということか。やはり私はこの人生を演じてくるしかなかったのだろうか？

「カフェギャラリー ばおばぶ」（私のカフェ）宛てに絵葉書を書き始める。四人のスタッフに任せてある。連絡方法として唯一絵葉書だけ。携帯とかいうものは持ったことがないので今回も無し。息子の勧めでホットメールとかの登録はしておいた。

大家族のように二十人ぐらいの巡礼者達で大テーブルを囲み夕食。誕生日のフランス人がいてお祝い気分。ワインのボトルがメニューについている（この後どこでもワイン付きだったが、私は水しか飲まない）。私は「本当の」日本人ではない、というようなことを言ってしまうと皆を楽しませ私も笑い転げた。「典型的な」といえばよかったのだが、間違った。右隣ドイツ語、左隣フランス語、お向かい英語と早速言語のミックスサラダを味わう。

六人部屋、二段ベッド、男女混合にはちょっとびっくり。マリーたち二人、ドイツ人の背の高い元気なおじさん二人、スイスの太ったおばあさん、と私。夜中にすごい音で目が覚めた。いびきだった。朝まで変化球で続いた。

4月16日

朝食が七時三十分。カフェオレをたっぷり頂く。出発は八時になってしまった。最後まで歩き通すことが出来るのだろうか、とかすかに不安があるので、慎重にゆっくりと登る。皆が追い越してゆく。中学、高校の時ワンダーフォーゲル部で山登りをしてきた感じが体を通して思い出されてくる。天気は良く景色は三六〇度見渡す限りなだらかなピレネーの山々。雪が少し残っている。冷たい強風が耳元でフランス語のようにヴォワー！と響く。帽子を飛ばされぬようにぎゅっと押さえる。身体も風にゆれゆれ飛ばされそう。

やっと下りが始まったら突然風のない森の中。フランスとスペインの国境をまたぐ。落ち葉が敷き詰められ、じゅうたんの上のような路、雪解けが沢のように流れる路、木がたくさんあるのに明るい森の路。水溜りの青空を覗くと吸い込まれそう。しかしいくら歩い

てもいつまでも終わらぬ。いつの間にか心地よさはなくなり、一足を出すのがつらくなっている。きつい、もう投げ出したいくらいにきつい、どうしたらいいの？ 一步一步行くしかない、進む以外に何の方法もない、私がこの道を選んだのだから、と分かる。

<ピレネー山脈>

林の中に入り杖になりそうな枝を拾う。頼むよアミーゴ！

休憩を取って乾いたサンドイッチを食べ水を飲む。昨日のコーヒーについていた砂糖を取っておいたのをなめたら生き返ったようになった。食べ物、休憩ってこんなにすごいのか！ ロンセスヴァリスまで二十キロメートル。八時間かかった。

<ロンセスヴァリスの宿泊所>

大聖堂のようなでっかい建物、小学校の体育館を横に五つぐらい繋げたような、天井の高さが三階建て分ほどの大ホールの中に二段ベッドが二、三百並んでいる。ゆうべのいびきのおばあさんのベッドが又近かったので、急いで場所を変えてもらった。二メートル先と二十メートルでは被害は違う。

くたくたの私をマリーが出迎えてくれた。一緒にレストランに食事に行く。リリーは手持ちのパンだけでいいらしい。私たちはまったく同じ「ラヴェンダーオイル」を持っていた。食後のコーヒーで遅くまで話し込んだ。家族の中の自死者について。人が生きる死ぬはどこでも同じだ。仲良しになるのは共鳴する何かがあるから、というのも何処でも同じ。

4月17日

朝、雨。

二十二キロメートルの山道を抜けた半日。街道筋の小さな町に出た。ツビルだ。待ってくれたマリーとリリーと三人で買い物をして夕食を作った。彼らはヴェジタリアン、私はほとんどヴェジタリアン。野菜の卵とじのつもりが、トマトも火を通すと私が主張したので野菜が多すぎてしまった。キッチンにはフランス語、ドイツ語、英語、スペイン語が飛び交っている。身支度のしゃきとしたポルトガルのお姉さんがいた。

いびきの彼女がまた現れた。二つ部屋があって別のほうだったのでほっとした。「音楽だと思えばいいじゃない」とフランス人と日本人のハーフだという女の子（彼女はロングスカートの裾が泥だらけになるろうが普段着のまま来てしまいました、という気楽さ）が言ったけど「あなた、それは甘い、ハードロックなのよ！」と二晩の被害者は言わざるを得ない。ひげ面の優しい彼氏は日本語がほんの少しできる。

4月18日

トリニダッド・デ・アレまで十九キロメートル、また山道だった。マリーたちはパンプローナまで行く、と言っていたが、私は今日はもう歩きたくない。歩くペースが違うからどこかで彼らとお別れと思っていたが、ここですか。ポルトガルのお姉さんが「伝えておく」と言って先にいった。

山から下りてすぐの橋のたもとに建つ修道院に宿を取る。玄関から聖堂の中を歩いて暗い迷路を抜け美しい中庭に出た。その奥が宿舎だ。ヴァレンティーノという年取った修道士がニコニコしていて親切だった。洗濯機でこずっていたので、「古いんでしょ」というと、「そう、私やあなたのように」と大笑い。スペイン語を辞書片手にスタートする（半年特訓した）。

静かな奥の部屋、八人用なのに私ひとり、ラッキー！ 後から来たほかの人たちは他のところに詰め込まれていたみたい。キッチンがあったので、ひよこ豆、ブロッコリー、オイルサルディーン、卵とパンで夕ご飯から朝食とお弁当まで作った。

翌朝、森で拾った杖は外壁に立てかけておいたので外扉が閉まったために取れなくなってしまった。出口が入ったところと違って裏口になっていたから。

4月19日

パンブローナはすぐそこだった。大きな町なので何でもあるかと期待したが、歩いている範囲では見つからない。本屋があったので「道」の案内書を探す。皆が持っている各国語の小型版があるかと思ったらスペイン語の大判しかない。迷ったが買う。本屋の窓の外を巡礼者が通り過ぎてゆく。あのいびきのおばあさんがノルディックを2本使い普通のピッチで、しかしつらそうに私の目と鼻の先に現れ通り過ぎていった。笑い話のネタに散々使ってきたことが申し訳ないと感じた。

既になくしたもの

マッサージボール一個、ボールペン一本、タオル一本、簡易雨具（破れた）

婦人警官がいたので、雨具を買いたいのだが、と聞いたらその辺にいたおじさんに案内を頼んでくれた。スポーツ店ではなく中国人の経営する雑貨屋に連れて行ってくれた。本格的なポンチョが欲しいのだが。

初めて銀行に寄り、しかしオートマティックは外にあるので、道路でユーロを下ろす。一回では出来なかった。

今日の予定のシズール・メノールまで九キロメートル。小さな町。通行人にアルベルゲ（巡礼宿）を聞いたら目の前だった。玄関の間で待たされたが、中世の世界にいるようだった。壁も家具も扉もどっしりとしている。大きな木の茂る庭をまわり宿舎に入る。別棟のキッチンで韓国の女の子に会う。初めて東洋人の巡礼者と同宿だ。パソコンがあったのでメールを送ろうと思ったが、分からなくてそばにいたドイツ人に手伝ってもらった。

4月20日

<金属の巡礼者像>

アルト・デル・ペルドンまではゆるい登り。またまたぬかるみ、すべる。バランスを取るため杖が必要だ。靴の裏をきれいに掃除すべきだったと後悔。風力発電の風車が並んでいる。広々とした景観に良く似合う。頂上には金属の巡礼者像が風の中ですっくと立っていた。

下に降りてウテルガという村でレストランに入り、スペイン初のトルティーヤを食べ、

ホットミルクで温まる。友人のジリアンがうちのカフェで作ってくれたトルティーヤのほ
うがずっと美味しかったので、本場ものにがっかり。杖と巡礼者のシンボル帆立貝と絵葉
書を買う。貝はサン・ジャン・ピエ・ド・ポーで見かけたきりここに来るまで売ってる店
がなかった。つまり欲しいものは見つけたらすぐ買うべし、と学んだ。ここで泊まろうと
思ったが、時々会っていたドイツ人の夫婦がコーヒーを飲んでいて、次まで歩ける時間と
距離だと言うので同意する。この人たちは良い案内書を持っていていつも私に情報をくれ
た。

次の街オパノスの宿の世話人、ホアンにボールペンを買いたいんだけど店はないか、
と聞いたら、店らしきものはここにはないらしくて彼のを一本くれた。外のベンチに座っ
た姿が町の景色になっているかのような人だ。

シャワーのお湯の出がすごく良くてうれしくて、日本を出て初めて髪の毛を洗った。中
庭に面した部屋もゆったりとしていてほっとする。靴の裏をブラシを借りて掃除をし、洗
濯物を日向に干して満足。

明るさと石の街。人気はなく教会前の広場で子供たちがサッカーをしている。町の中心
らしく広々として、芝生の美しい公園のようなものがある。「去年ここで一休みをしてい
たら、あまりに心地よくてぐっすりと眠ってしまったの。目が覚めたら観光バスが傍にと
まっていて人がたくさんいて恥ずかしかったわ」と話しかけてきたのはドイツ人のエリ
カ。私と同じ年。後で一緒に食事に行った。「その後ひざを痛め医者にもストップをかけら
れ、帰らなければならなかったの。ドイツの医者も手術を勧めたけれど、手術をしたくな
い一心で他の方法を探した。いろいろ試し、結局もう一度歩くことにしたの」。歩けば直
ると信じている。今回は荷物を徹底的に少なくし、旦那も置いてきて軽やかに。今のとこ
ろ痛みはないと。

南ドイツの田舎で静かに暮らしている。親になって自分の親と同じようなことを、子供
に対してしていると気がついたとき、子供の自分がいやだったことはもうやめた、と話し
てくれた。息子さんも軌道修正しながら着実に進んでいるようだ。

4月21日

プエンテ・ラ・レイナの街の入り口に大きな駐車場付きの今風のホテルが建っていて山
から出てきたばかりで違和感を覚えたが、一歩街に入れば古い街並みで石畳の道。カフェ
で朝のカフェコンレチェ（ミルクコーヒー）を飲みながら北ドイツから来ていた女画家と
話す。すらりとした人。ローマになぜか郷愁を感じているようだ。街から出ると美しい王
妃の橋だ。ここから三つの巡礼路が一本に合わさり「カミーノ・デ・フランセ」となる。
道が世界遺産となっている。

野の道に帆立貝が落ちていた。小さめのかわいいもの。こないだ買った私のは大きすぎ
て赤い十字架が付いていてキッチンで好きでなかった。このかわいいのはゆうべのいびき
のおじさんのリュックについていたのとよく似ている。ちょっと先の村で買い物をして
いる彼に追いついた。やはり彼のだ。「取り替えてくれるか」と聞いたら快くOKしてくれ
た。うれしい。言ってみるもんだ。

<矢印>

「俺はいびきがひどいから」と皆に触れ回っていたオーストリア人なんだけど、静かな夜だった。玄関の隣の小部屋がいびきをかき人を隔離する部屋らしい。ホアンに連れて行かれたらしい。

黄色いペンキを持って道しるべをきれいに書き直しながら歩いている小柄なおじさんがいた。道標とは別にちょっとした石とか壁とかあちこちに黄色い矢印が書かれている。サンティアゴを指して。これが私たち巡礼者の頼りの綱なのだ。手を合わせて感謝した。風で帽子を飛ばされないようにとか、足元を確かめるためとかで下ばかり見て歩いていた。ふっと目を上げたらそこにメープルの薄ピンクの花が咲いていた。見渡せば美しい春の野だ。

ロルカは小さな村。今日は十三キロメートル。アメリカ人の女の子とスペイン人の彼氏がオーナーの宿。パソコンは無料で使わせてくれた。若者の気楽さと親切が我が家にいるような気分にくれた。

エリカと又一緒になる。六人部屋で二人だけ。うれしい。

エリカの格言

- *ほえる犬はかまない
- *重荷はリュックの中ではなく肩の上
- *笑いに通訳はいらない

フランス語を共通の言語としている熟年の三人グループがいた。こちらに来てから知り合い一緒に動いているらしい。イギリス、カナダ、フランス人だ。彼らとエリカと食卓を囲む。年恰好が同じぐらいで話題は何でもありみたいでシルクは日本製が上等だ、いやフランス製だ、乾燥機にかけられる、否とかで騒いで楽しんだ。

4月22日

六時間歩いた。途中エステーリャには郵便局があったので寄る。何処にもあるわけではなく大きめの街だけで、時間もほとんど昼休みまで？

イラッシュのフエンテ・デ・ヴィノ（ワインの泉）というところではワインが蛇口から出てきて巡礼者は自由に（？）飲ませてもらえる。ドイツのウルムからずっと歩いてきたという二人の若者が既に出来上がっていた。こないだの韓国の女の子も一緒にいて少し酔っていた。誘われたがあいにく元アル中の私は禁酒をして十七年もたつ。

ヴィリヤマヨール・デ・モンハルディンは古いお城のような建物を改造した巡礼宿だった。オランダの教会のボランティアが運営している。外からの見栄えはよいし景色も最高、しかし中は窮屈。洗面所には必要なものがひとつずつしかなくて、四十人からの男女が一緒では何もする気にはなれぬ。シャワーや洗面は一日ぐらいしなくてかまわないが、絶対的にせねばならぬことはあるのだ。じっと行列を耐え忍ぶ。食事はアジア風カレーでOK。ヴォランティアの方々の善意が鼻についてしまうというはいやな奴なんだろうか。

イレヌがレインウェアのズボンの一部をはさみで切っている。風通しを良くしたいとか。厚地なのではしていると汗びしょりになってしまうらしい。こんな切り方では使い物にならないだろうと思って見ていた。なんだかんだの荷物でトータル十四キログラムとは！ 私の倍だ。水だっていっぺんに二リッターも買うことはないだろうと思うが、そん

な風に持っていたい人なんだ。自分は貧乏だから運が悪いからというが……

翌朝扉の開け方が誰もわからなくて皆で閉じ込められて玄関の間で待っていた時、私は管理主義に対していやみを言いすぎてしまった。私のおしゃべりの相手をしてくれた人が後ろ姿を見せて歩き出した時、彼とはもう二度と会えないのだと気がついたとたん、いやみを言っていた自分をひどく恥じた。

4月23日

街の中を歩く時に、普通に生活をしている人々、労働をしている人々に出会う。歩いている我々がのんきに見えるのだろうか、と感じるようになった。最初は巡礼者である自分を特別視して欲しいような甘えがあったし、沢山のスペイン人が我々巡礼者を大切にしてくれてるのがうれしくて、それを当たり前のように思っていた。

日常生活というのは同じようにカミーノである、と思う。つらい歩みを続け、休み、また歩き、何が待っているか分からないままに最終地点まで歩き続けるのは日常生活もカミーノも変わらない。

ロス・アルコス教会前の広場で又皆に会う。フランス語の三人組、ミュンヘンからの夫婦、オーストリーのイリス、二人の気楽娘、ウルムからの若者たち。ベンチで休んでいる。ヤー、と挨拶を交わし私は先へ。

街から出ると嘘だろうというくらい美しい景色の中にいた。春の野と山。黄色い花の灌木は何だろう、ピンクはエリカのようにだけど……まさに花盛り。

二十キロメートルでトレス・デル・リオに着いた。丘の上にある御伽噺に出てくるような村。

小さなほうの巡礼宿を選ぶ。顔なじみが多い。

新しいカナダ人が隣のベッドだ。オーラという。ここは英語を話す人が少ないと彼女は言うが、しかし英語を母国語としている人たちの多言語に対する怠惰は何か失礼な感じがある。彼女とテラスに出る。ヨーロッパ人は日光浴をしたがるが、我々は日陰を探した。「歩くのがつらい、ジャンクフードが食べたくなくなってしまふ、なんだか泣きたくなることが多いの」という。私は「ここには泣くために来たのよ」と返事する。

洗濯をしに下に降りていったら、新顔のドイツの小柄なおじさんが目をまっすぐに見つめながら「あなたはなぜこのカミーノを歩いているのか？」と単純に聞いてきた。アジア人なのに不思議だと思えるらしい。アジア人も君たちヨーロッパ人と同じような心と思考過程を持っているということを受容してもらった。舗装道路のほうが歩きやすいからと、本来のカミーノではなく車道を歩いているらしい。

こんな田舎なのに、横長の美しい写真の絵葉書が売られていた。カメラは重たい!!ので持たずに来たから絵葉書を買っておく。

4月24日

山のあなたから朝日が昇る。朝の体操を終え、歩きだそうと振り向いた西の空に月が淡

く見えた。春の野にかかる太陽と月。

ヴィアナまで十一キロメートル。今日はこれでよし。オーラに又出会った。今日はホテルにする、と言っていた。少々疲れているようだ。アルベルゲの生活は改めて考えてみればかなりきつい。しかし長い道中、贅沢は出来ない事もあるし、この共同生活も巡礼の一部だと受け取っている。

バスク人、カナダ人、韓国人達とアルベルゲの開くまで扉の前で待っていた。お向かいの遺跡の天辺にコウノトリが巣を作っていた。

<コウノトリの巣>

フランスパンの大きいままのサンドイッチをボッカディーリョという。でか口、と言う意味らしい。これがシンプルだけどすごく美味しい。ケソ（チーズ）かチョリソーか生ハムと新鮮なパン。バターもサラダもなし（長持ちする）。グワッと味わえる。私の発明でオイルサルディーンも美味しい。朝歩き出してから、見つけたところで焼きたてのパンを手に入れ、チーズ、オレンジ、りんご、パプリカ、水と確保できればその日一日は夕方まで生き延びられる。巡礼に出る前私は「ばおばぶ」の玄米雑穀おにぎりが大好物で、スペインに行ったらどうしたらいいんだろう、と心配してたのだが、パンがこんなに美味しくて幸せだ。

この街にはスーパーマーケットがあるではないか。他の店もある。絵葉書や切手も買える！すごい。切手はタバコ屋さんにあるらしく通りかかったおじさんのグループが私を店まで案内してくれた。我々の行列をロレーヌが上の道から眺めて笑っていた。

かなり病気が進んでいるのだろうか？ ロレーヌはケベックの人で透き通るような白い笑顔が優しくて美しい。旦那も見るからにいい男で、彼は歩きで彼女はバスで移動し宿で待ち合わせる、という巡礼をしている。

ここのベッドは三段だ。食堂は大きい、キッチンも大きい。昔修道院の病院だったようだ。

食堂で韓国人の若いソン君と話す。英語の発音でお互いドイツ語が話せると分かり楽なほうにした。ドイツの大学に通っている。端正な美形。靴があわないらしい。彼は私が歩いた翌日ピレネーを越えて嵐にあったらしい。雪と雨とあられと強風で四人の怪我人（強風で飛ばされ骨折）が出て道は封鎖となったそうだ。リュックの中身はもちろん身体の芯までずぶぬれ。寝袋もぬれていて夜は冷たくて眠れずもう死ぬかと思ったと、何日か後にサングラスのケースから水がこぼれたと。

たった一日の差で……！！

大きな町の教会ではミサが毎日夕方に行われているらしい。今日のミサはお葬式だった。黒い服装がほとんどなくて、家族だと思われる人のショッキングピンクの上着には驚いた。教会内の装飾が豪華で金ぴかだが、大空間なのでそれなりに美しい。祭壇の真ん中にマグダラのマリア像があり、キリストの十字架像が左側に飾ってあったのもちょっと楽しい。スペイン人は像が好きらしい。たくさんある。

カトリック教会は世界中どこでもまったく同じようにミサが立てられている。どこで

も安心して参列できるのだ。異邦人がいようがいまいが誰も何も言わぬ。世界で一番大きな企業のような感じがしてきた。

4月25日

寝苦しい夜だった。ベッドの真ん中の段の人が夜中近くに帰ってきて、私の足元ではなく頭の傍で頭にランプをつけてパンツひとつになり、のろのろがさがさ寝仕度をしていらただしかった。ベッドも彼の寝返りでひどくきしんだ。

たぶんその人だと思うが、朝になってログローニョの街に入る前の休憩所で出会った。ヨハンという名だそうだ。おしゃべり好きだ。

ログローニョで泊まるつもりだったが、早すぎたのでナヴァレテまで来た。二十一・五キロメートル。見かけた虫はカタツムリ、アリ、カメムシ、ダンゴ虫、チョウチョ。暑さと肩の重さがつらい。リュックの下を手で支えてこらえた。手の甲が真っ黒に日焼けしている。

食堂で書き物をしていると、いろいろな人が、やー、と声をかけてくれる。「ドイツ語を話す日本人ってあなたなのね」と隣のベッドの婦人。我々の部屋にシャワールームが付いているので他の人の出入りが多い。入り口近くのベッドだったので大きな薄手のショールでカーテンとした。しかし昨日の宿よりは落ち着く。

ソン君が又同じ宿、バスク人の彼もカフェでビールを美味しそうに飲んでいた。

4月26日

十六・五キロメートルでナヘラまで。一日の大半は自然の中や畑の中を歩いているのだけれど、まったく人と出会わない時がある。ただひたすら下を向いて一足一足に気を配っている。聞こえるのはカッコーの声だけ。

この道は生活道路と隔離されているようだ。出会うのはほとんど巡礼者のみ。守られている道。町に入っても人気のないのが不思議。日差しが強いとカミュを思い出す。

橋をわたり古い町の中に入。水の美しい河畔はゆったりとし大きな木に風がそよぎカフェの parasol も映画のシーンかと思えるほど瀟洒。ここには人がいた。今日は町の祭りらしい。子供たちが色とりどりのピエロのようなコスチュームを着ている。

公の宿は三時まで待たねばならなかったのが、町の中の小さな宿にしたがこれは失敗だった。ドアを開けてすぐの場にベッドが四つ。トイレもシャワーも一つきり、隣の部屋にあるだけ。おまけにあのヨハンが今度は私の下の段。

河べりのカフェに行ってトルティーヤとカフェコンレチェ。parasolの下でボーっとしてたら、向こうからきれいな女の子が来る、と思ったのがソン君だった。もう少し先に行こうと思ったがここがきれいなのでここにす、とやってた。靴はまだみつからないらしい。

あまり長く座ってもいられないし、お日様のせいであつたりしたので、河のほとりの草むらで休む。河の中洲に水草がゆれ流れは速い。向こう岸にはキャラバンやテントが見え

る。草のにおいをかぎながら横になる。アリが私の上をあるいている。

散歩をした。扉が開いていたので入ってみたら修道院だった。中で隣の教会につながっていた。中庭のある回廊は写真でみた覚えがある。教会の奥のほうに墓があり一番奥にマリア像が飾ってあった。寺もそうだが教会も死と隣り合わせの場なのだ。掃除をしていた赤シャツとジーパンのお兄さんにミサの時間を聞いた。八時だ。入る入り口も教えてくれた。

夕食は宿のオーナーのレストランで同部屋の仲間と取る。エリカ、クリスティーヌの二人連れは「私たちは優雅な巡礼をする、無理をしない」と盛んに言う。持ってきた荷物が重すぎたので、パンプローナでリュックを買い換えて、いらぬ物を自宅に送ったと。私は幸せな人生を送っているから、と強調もする。ヨハンは皆を一応しゃべらせてから自分で話し出したが、止まらない。今日一日何をした、どこに行った、グローバル化した地球の話までえんえんと続く。やっと終わりにして、私はミサに行く。あのジーパンのお兄さんが司祭だった。

<パンプローナ市内>

祭りは昼間だけでなく夜が本番だった。夜中の三時まで近くの広場で特大のアンブ六個と花火の打ち上げが続いた。花火の振動と、壊れた機械のような音楽の大音響とヨハンのいびきとで絶望的という夜中にクリスティーヌは笑い出していた。

4月27日

ほとんど薄暗いうちに歩き出す。街は宴の後の掃除の最中だった。消防ホースの水でごみを一気に流していた。街を抜けると山道になった。

いつも歩き出してからまもなく日の出となる。地平線の向こうから、山のあなたから、雲の合間から太陽が昇る。

草の上にリュックを下ろして太陽に向かって真っ直ぐに立つ。深呼吸をし手足を思いっきり伸ばし、丸い太陽を見つめる。光を浴びエネルギーを頂き、満たされて一日をスタートする。

ヨハンが追い越していく時、ノブヨの帽子とズボンが目立つよとおしゃべりを始める。ズボンはインドネシアのイカットを友人が縫ってくれたもの、帽子はパリ製のソムブレロ。さっさと追い越していかないので「先に行ってもいいのよ」と言ったら「今はねノブヨの傍で休みたいんだよ」とのたまわった。東洋の安らぎ!!

サント・ドミンゴまで二十一キロメートル。街に入ったところで若い大きな男の子が足を引きずりながらつらそうに歩いていた。三十四キロメートルも歩いてきて足の豆が痛いのだと。日差しが強い人気のない石の街を二人でゆっくりアルベルグを探しながら行った。

遅かったのでぎりぎり二つベッドが空いていた。屋根裏部屋で広々として二段ではないのがうれしかった。韓国人の女の子二人の隣になれてお互い喜んだ。すぐ後に到着したイタリア人たちはベッドがもうなくて、あと五キロメートル歩きなさい、と言われていた。彼らとはお昼にレストランで出会ったよね。ここいらあたりで人生を変えようと思ってき

た、と言っていたお兄さん、ワインなんか飲んでゆっくりしていたからベッドにありつかなかったのだ。結局はこの街の中のペンションを探したらしいが。

ロレーヌと又一緒になった。足がつかいらしいのでヨガで習った足運動を教えてあげた。マッサージボールも貸してあげた。電子辞書にオプションでフランス語を入れておいてよかった。

ソン君とドイツ人の若いのとレストランに食事に行った。巡礼メニューはだいたい八か九ユーロ。アルベルゲの宿泊料が五から七ユーロ、ドネイションだったり二とか三ユーロという安いのもあったから食事がちょっと高いと感じてしまう。スープかサラダかパスタが一皿目でメインは肉か魚料理にいつもフライドポテト。デザートは果物かヨーグルトかプリン。ワインのボトルか水のボトル。お腹がすいているのでありがたいのだが、たまに美味しい食事でありつくとうれしい。

スペイン人の十人ぐらいの団体がいた。じい様ばかりですごく騒がしい。食べる時も、遊ぶ時も、歩く時も、常に騒がしい。騒がしいことで有名らしい。

4月28日

前のほうに犬を連れた若い女の子が一人で歩いていた。何かを落としたり。声が届かないのでそこに着いた時に拾って（赤い毛糸のぼんぼん）後を追った。しばらくして気がついたらしく立ち止まって後ろを振り向いた。

やっとスポーツウエアでない人に会えた。幅広のぴらぴらズボンで真っ赤なスパッツをみせ、カラフルな麦藁帽子とざっくりしたカーデガン。金髪をなびかせて。自分のファッションが楽しそう。ほとんどの人はスリーパーズに別れるズボンでスポーツウエアそのものという味気なさなので。

彼女はスイス人だった。それもチューリッヒの出だったので話は弾んだ。昔チューリッヒに六年程住んだことがある。我が青春時代なのだ。タマラ、という名は珍しい。お母さんはユーゴスラビアの人だと。犬はリュネ。フランスのトゥールーズからもう一ヶ月以上も歩いていると言う。フランス国内は道の経験者の彼氏が一緒に歩いてくれたけど今は犬と二人、犬は日差しに弱いので曇りの日に余計に歩く。赤いボンボンが友達からのプレゼントで大切なもの。その友は私が昔住んでいた町の住人だ。私がこの旅の最後に訪れようと思っているウルスラの村の近くに、彼女のお父さんは別荘を持っているとか。チューリッヒに近いスイスアルプスだ。

ピレネーは今まで大変な嵐の体験談しか聞いてなかったけど、一日違いの私の良い話が聴けてうれしいという。今日は歩きすぎたかなと思っていたが彼女にあえたのでよかったと感じていたら、彼女も今日はあなたに会えてよかった、と言ってくれた。

クワトロフォルクという宿は四ヶ国どころか五ヶ国語をほとんどパーフェクトに話す親父がやっていた。韓国のチョンミンさんとリーさんとソン君も同じ宿。ソン君はまだ良い靴が見つからない。チョンミンさんとリーさんはヨーロッパは初めて。ビデがなんだか分からないというので説明してあげた。二人はテレビ局と製薬会社で働いている。彼らと同じテーブルについたが、韓国の食事文化が強いと感じた。食事はかなり美味しく楽しかった。材料は変わらないのだけれど作り方なのか。

南アフリカのデイビッド君が隣のベッドで大きな身体をもてあましていた。礼儀正しい若者。

ロレーヌとその彼に街の中で出合った。寒いのでセーターを買ってきたところだった。真っ赤なきれいな色のそれを見せてくれた。ともかく寒い。スペインの四月とは思えない。

ベロラードの教会での夜のミサはジージャンを着ていた神父さんだった。ミサの後に聖堂内のコーナーに巡礼者を集めてなんだか内容はよく分からなかったが熱っぽく話してくれた。こんな風に集い共に祈ることは初めてだった。

4月29日

寒気がする、風邪かも。右足首が痛い。びっこをひく。こないだ足の豆で痛そうだったドイツの男の子が、元気いっぱい輝く笑顔で「少ししか歩かないと言ってたのに大丈夫？」と声をかけてくれた。ありがとうね。君の足良くなったのね、今度は私の足よ。

初めて会うフランス人の男の人が心配そうに駆け寄り「サヴァ？」と握手までしてくれる。サヴァ（元気）じゃないけどしようがないものね、「メルシ」ありがとう。

黒ずくめのスペインの若い男の子は昨日も私を抜かして行ったよね、二度目に会うともう昔からの知り合いみたいに思える。笑顔がきれい。公園での休憩の時間におやつを分けてくれた。彼は猫にも分けていた。

優しい男達の励ましで今日のようなつらい日がこんなに明るく幸せに満ちるとは。ああ私も女の子なんだ！

十二キロメートル、ヴィリャフランカ・モンテス・デ・オカは何もない街道筋の村。歩くコースは山から来て山へ入る。大きな建物で普通のベッドがゆったりと並んでいる。休暇気分になる。風が強いが良い天気。大洗濯と昼寝。風に飛ばされパンティー二枚が行方不明。洗濯ばさみ一個で二つをとめたからだ。塀の向こうの草葉の陰でやっと見つけた。

村を歩いてパール（飲食店）一軒が見つかった。その片隅で缶詰めとオレンジと卵が買えた。十分待ってパンも買えた。

4月30日

寒い山道。オルテガのカフェで一休み。セーターを引っ張り出して着る。ニュージーランドから来ているという女の人とおしゃべりする。彼女はファッションもかなり個性的、手仕事が好きなんだろう。この後スイスの友達のところへ寄り最後はスコットランドのお母さんを訪ねる、と言っていた。やはり遠路はるばる来るんだもの、会える人には会っておかねば、という気持ちは同じね。歳もおなじくらいみたい。

足が痛むので十三キロメートル歩いてアヘスというところでもう今日は止める。

疲れも溜まる頃なのだろうか。反対にすっかり場なれして気分はどンドン楽になっている。気を張らなくなっているから身体がやっと悲鳴をあげているのだろうか。

沢山の人たちにいろいろ故障が出始めているようだ。

足首の痛みの原因がわからない。靴のせい？ 出かける前に散々試して選んだ拳句のものなのに。

アヘスの村の中、おしゃれなカフェがあったので入ってみる。スペイン語とドイツ語のぺらぺらなおじさんがやっている。

スペイン人かドイツ人か分からなかったので「お国は？」と聞いたら「そのような直接的な質問はするな、ご挨拶代わりや好奇心で聞いても二分後には忘れているのだから」との返事。

「私は忘れません。好奇心はきっかけではないの？」と食い下がる私。
いや単なる好奇心はマイナスだ。興味ならいい。あなたはどこの国の人とは聞くけど、あなたはだあれ？とは誰も聞かない。

誰だって一番関心を持っているのは自分のことなのさ。

三十五年間カミーノを歩き、ここで店をやってきた。何千キロとフランスやドイツから沢山の人と歩いてきた、沢山の人と出合った。しかし誰一人として記憶に残らぬ。本当に知りたい人のことは時間をかけて知るべきだ。行きずりの好奇心に答える気はない。

一日中おしゃべりをしている人たちがいるけど何を話しているか知ってるか？ 人は話をするより聞くことを学んだほうがいい。ダイレクトにものを聞くものではない。

「少しずるく聞けばいいのかしら」「いや、たくさんずるくだ。日本にはそういう哲学があるだろう？」「……う、うん、あるよ。ヨーロッパの哲学とは違うのが。でも今それらはお互いに近づいて、重層的になり理解を深められる時代を迎えていると思うんだけど」「うん、そう思う。そして今はカミーノの時代だよ……」

分かれ際に「忘れるな」だって。何を??

ノブヨはだあれ？ 答えられるだろうか。

ノブヨは今かなり積極的に「個」であると感じる。それにこのカミーノでは何処の国の人でも、どんな人でも、お互い巡礼者として出会うときはまったく何の仮面もいらない！
これ、すごい発見！

カミーノでは 皆同じ方向を向いて歩いている。自分のペースで、自分の限界まで、ただ歩いているだけ。

カミーノのもう半分はアルベルゲの生活なのだ。二段ベッドの、男女混合の、いろんな文化ごちゃごちゃサラダの、キャンプ生活しながらの不便さを、しかも毎日違うところで違う人たちと共にする。

見知らぬ者同士でも巡礼者であることは一目で分かるし、もう既に仲間としての意識ができていようだ。

<アルベルゲ>

5月1日

こんなによく眠れたのは初めてかも。すごく元気でもったいないくらいだけど、ここからはバスに乗る、とつらい決心をしたのだ。足の痛みはもう限界だし、ブルゴスの近くは工業地帯らしいので。

アルベルゲの親父に教えてもらって一時間も痛む足で歩いてバス停のあるところに着いた。しかしいくら待ってもバスは影すらみせない。お向かいの村の店が開いた。聞きにいったらいつも簡単に「今日は五月一日、休日だからバスは走らない」だって。

<ブルゴス>

結局村から出てきた一台の車をヒッチハイクした。なんとカリスマ派のおばさんだった。車の運転は大丈夫かと心配になるほど熱っぽく神を語ってくれた。「神はあなたの内にいる」と。

ブルゴスのカテドラルではちょうど結婚式のミサが行われようとしていた。参加させてもらった。

薬局も医者も今日はだめ。街の中にアルベルゲがあるはずなのに見つからず、ホテルを探しても休日で満杯。街は大きく美しく観光客でいっぱい。川沿いの公園を郊外のアルベルゲまで痛い足を引きずって歩いた。

外から見ると兵舎のよう、中に入ると牢獄のような大きなアルベルゲ。ぎゅうぎゅうづめ。トイレは扉がなくビニールのカーテン。庭はゆったりとしているし天気はいい。韓国の女の子とレストランでの食事から帰ってきたら、庭のテーブルで韓国人の御婦人が一人で食事をしていた。同じ世代。ドイツに何十年と住んでいるそうだ。彼女とうまが合い二人で散々言いたい放題で発散した。

5月2日

先へ行くことにした。足は痛むがこの街に留まる気にならなかった。強い日差しの中を足を引きずりながらやっとたどり着いたオルニリオス・デル・カミーノ。村の真ん中、教会のすぐ前の小ぶりの石の建物。ぎりぎり最後のベッド。体格の良いホスピタレーロ（巡礼宿の世話人）が私のリュックを部屋まで運んでくれた。昨日ブルゴスでおしゃべりした韓国人がキッチンでご飯を炊いたのを分けてくれた。この旅ではじめてのご飯だ。おかず無しだが「ご馳走」としていただいた。

食後キッチンでハンガリーの恋する男と恋されているドイツの女とドイツに住んでいる昔恋した韓国人と大昔恋をした日本人の四人で、なぜカミーノを歩くかから始まりさまざまな話をがんがんにやった。社会問題から歴史問題からやはり戦争の話も出て「お前の国はこんなこともやったではないか」で緊張した。いい訳めいたことを言ってしまってからしまったと思った。未来に向けて平和を望むから話すのだ、お互いのしこりを解くために話すのだと思う。こんどこのような場に出会ったら個人として謝りたいと思う。

昨日も狭いベッドコーナーで一緒だったデンマーク人のおばあちゃん、私の下のベッド。三度目のカミーノだって。今回はもう歳だからレオンまでにしておくと。お向かい

のベッドの六十七歳のアメリカ人、両親がメキシコからアメリカへ移住したという、もう三度目だって。二人とも何度やってもカミーノは素晴らしいって。夜二人で長いこと静かにおしゃべりをしていて。二人の穏やかさが聞いていて心地よかった。

昼間井戸のある休憩所で一緒になったカタルーニャ人のグループの女の子、具合が悪くなりタクシーで病院へ行った。もう歩けないのだ。こないだのクリスティーヌもこの村の入り口でもう歩けなくなったと。

5月3日

足を何とかしたくてやはりブルゴスに戻ろうと思ったが、朝が早すぎて何の連絡も取れない。ヒッチかなと思ったがやっと一台止まってくれた車は酔っ払っているような若い男たちが乗っていた。それで吹っ切れた。迷いを捨て歩いて先に進むことにした。

途中で追い越していったドイツ人が、「靴のせいではないか？ こんな道だからもっと深い紐の靴がいい。症状は炎症だから透明なゲルを塗ればすぐ良くなる」と教えてくれた。選んで選んで誤った靴の選択をしたというわけか。原因は何ヶ月か前に捻挫したせいではないか、とも思う。オンタナスまで十一キロメートル。ゆっくりゆっくりびっこをひきながら。

あの恋する二人に又出会った。赤く火照った顔（日焼けもあるが）、みっともないほど分別もなくしている時なんだろうね。人類はこうして絶えることなく……

頭痛と寒気がしてたので宿についてすぐ寝た。いびきをかいて眠り込んだ。明り取りからの日差しが顔に差し込んで目が覚めた。古い建物の内部が斬新にリフォームされている。ゆったりとして居心地のいい部屋だ。お向かいのベッドにはいつの間にもやら小さな犬を連れた腕に刺青のある大柄なお姉さんがいた。

この街に薬屋はない、医者はいない、この宿には薬箱もない……明日は日曜日だ。

カナリア諸島から来ている若い男の子が封も切っていない新しい薬を私に使い、と貸してくれた。ホスピタレーラのお姉さんが冷凍したアイスノンを貸してくれた。冷やすといいと。

カフェにクリスティーヌがいた。またビールを飲んでいる。ポーランドから来た太った若いお兄さんはパンプローナから歩き始め、一日五十キロメートルとか歩いて、足が豆だらけでもう歩けないんだって。くたばったクリスティーヌ、エリカ、豆のお兄さんと私で明日はタクシーを頼むことにした。

目の前をマラソン選手のような人が駆け抜け、報道の車がついていった。カミーノを何日かで駆け抜けるという試みで何かのチャリティーでもある、とかいう話だった。

昔の巡礼が歩いたように歩きたいからと、そのような衣装やら何やら一年間準備してきたというドイツの女の子がいた。真っ赤なフリースのマントだ。天使のついた杖とかちょっとやりすぎみたい。彼女はヴェジタリアンだから肉の入っていないサンドイッチが欲しい、と言ってるのだけどスペイン語が分からなくてカフェのカウンターで困っていた。ノブヨさんその位はごまかして言えるのでお助け。トルティーヤのボッカディーリョで私も腹ごしらえ。

5月4日

カストロヘリスは二キロメートルの細長い街。古城の遺跡のある山の下腹のほうに三本の道が平行に高さを違えて伸びている。街の入り口のマリア教会のすぐお向かいにカフェがあった。ホステルでもある。タクシーはそこで止まった。心地良い部屋で久しぶりの個室か！と喜んだが甘い。すぐ後に来たドイツ人が相部屋を望んだので、そのほうが安くもなるのでOKした。ブリギッテという気さくな人。

二キロメートル先の街の端っこにある教会でホステルのオーナーの甥っ子の初聖体の式があると聞いたので、車で連れて行ってもらうことにした。街中の人がいるのではないかとというくらい混んでいた。初聖体の子供たちはうれしそう。帰りは街を見たくて歩いた。中世から変わってないのか？ ぐらいに古い。街の真ん中へんの広場ですごくにこやかなおじいさんに出会った。君は日本人か？ ここには日本人がいるよ、と手をとって連れて行ってくれた。広場の上にあるアルベルゲのホスピタレーロが日本人だった。

ヒデという五十歳ぐらいの人。カミーノで初めて日本人をみた。一瞬探るような目をしたようだったが海外での生活が長い人らしい空気を持っていた。亡くなったスペイン人の友達の後を継いでここを引き受けたらしい。

ヒデのおかげで日本語での確な情報が入った。医者はずぐ目の前にあり十一時からだと。明日はこちらに移ることにした。

夕食をブリギッテとキャンプ場のレストランで取っていたら雨が降ってきた。久しぶりの大雨。洗濯物は誰かが屋根の下に移動しておいてくれるとは思うけど、窓が開けっ放し！ すぐ止む、私がぬれるはずはないと思っていたがなかなか止まぬ。キッチンでゴミ袋をもらい穴を開けてかぶって帰ろうとしたらキャンプ場の入り口に着くか着かないくらいで雨はあつけないほどピタッと止んだ。すばらしい虹がでた。

5月5日

やっと医者に出会えた。緑色のアクセサリーが目立つサッパリした女医さん。塗り薬と飲み薬と締め付ける靴下を処方してくれて一日十キロ以上歩くなど。無料。

昨日のにこやかなおじいさんはお店を持っていた。なるほど。カミーノで必要な物は何でもそろっていた。今まで何処にもありそうでなかった店だ。彼自身何度も歩いたことがあるので何が必要か分かっている品物がとても良い。出発前には見当がつかなかったが、今や私も体験者なので何が欲しいかははっきりしている。本格的な大きなポンチョ、しっかりしたサンダル、小さなナイフを買った。十字架をくれた。

ヒデとおしゃべりをした。マザー・テレサのところ働いていたこと、エチオピアの同じようなところで働いていた事、そういうところに来る世界中からの若い医者とか、カミーノに来る若い人たちの多くがモラルに欠けているとかなり批判的だった。

長い午後をヒデ、マジョルカ島からのお兄さん、ドイツのおばさん達、ブラジルから来た日系の若い女の子二人等と入り口横のテーブルで過ごす。良い天気だ。マジョルカのお兄さんはどんな痛みにも効くという「タイガーバーム」を貸してくれた。懐かしい東洋のにおいのする軟膏だ。

何故カミーノに来たのか、という質問はお互い知りたいところでよく聞かれるし、私も聞く。

- *ともかく突然いきたくなった
- *カトリックだ
- *スピリチュアルに成長したい
- *亡き夫、娘のために
- *修行？ 休暇？

大体こんな感じで適当に答えてきた。他の人も似たり寄ったりだ。スポーツ、観光としての人も多い。しかしスポーツとして歩き始めてもここでは歩き終わるころには巡礼者になる、という話もある。

出会うのもこれっきりであろうと思われる人達と世間話のように心の奥のほうまで話してしまったりする。これはカミーノだからだろう。自分のためにやっていることなのだ。

一期一会。

「偶然はない」と私が言ったらマザー・テレサの言葉にも同じのがあるとヒデがいった。

5月6日

ヒデの友人が次の村でアルベルゲをやっている、すごくいいところでいい人だから寄るといい、といわれ、案内書にも魅惑的に書かれていたので、たった九キロメートル先で早い時間に着いてしまったのだけどそこに決めた。サン・ニコラウスという家。イタリア人のリノがちょうど鍵を開けに出てきたところだった。ダンディーとも言える、しかもにこやかな静かな人。十三世紀の救護院の建物を使っている。ひんやりとした内部は天井が高く教会のよう。どっしりとした木製の家具、中世の世界そのままのよう。リノの美意識を感じる。

巡礼路のふちに建っているのに周りは広々と緑のみ。洗濯物は裏庭の木々の間に張られたロープに干す。カッコーの声を聞きながら遠くの森と空行く雲を眺めベンチで過ごす。医者のところ出会ったスチュワードスだというアメリカ人、韓国からのシュタイナー学校のグループの一人である十四歳のパウドアン君、歩いている日本人に初めて出会う、信太郎君、彼らとのおしゃべりで午後の時間が過ぎてゆく。

シュタイナー学校の子供達は中学生で十五人ほどが次から次へと到着してきた。歩く時は各々のペースでばらばらで最後に先生が三人到着。お父さんの参加も二人ほど。お父さん達は飛行場のある大きな街から数日一緒に歩いてかえってゆーらしい。子供達は三十五日間で歩き通すつもりらしい。終わったらパリで休暇を楽しむと。十四歳といえしっかりしていて、日本語を勉強したいからと私と話をする。分からなくなると英語で話す。大人のようにきちんと会話を楽しませてくれた。中学生が一人で歩いても安全な道であると、彼らは言っていた。そう思う。若い女の子が一人で歩いてもこの道では何の危険性もないであろうとおもう。

夕食はみんなでイタリア風にスープとサラダを作り、チーズ、サラミ、パンで家族のよ

うに大テーブルでろうそくの光でいただいた。おいしかった。夕食前に昔祭壇だったところに集まり、洗足式が行われた。昔の巡礼者が足を洗ってもらったように、円座に座った私達の足をリノが水で濡らし拭いて祈りの言葉を唱えてくれた。キリストが最後の晩餐の前に弟子達の足を洗ったこととつながっている。

5月7日

朝ごはんがすごく美味しくて居心地も良くて長居をしてしまった。コーヒーが久しぶりに美味しかったのはエスプレッソで沸かし香りが良かったせいかな？ パンも中がしっとり、外がパリッと少し全粒粉が入っていて理想。

足の痛みが減っている。押しても痛くない。

次のボアディーリャ・デル・カミーノの宿はリノのところとは打って変わってプールサイドのサロン風。何もない死んだような村の中で唯一華やいでいる。買い物もするところがないから全てをこの中でまかなう。独占企業。刺青がアクセサリ感覚の若者達やビールを飲んで騒いでいるグループ、ビキニのちょっとトウのたったお姉さんなどで昨日の静けさが宝物のように思える。

カナダからの医者である母娘と食事のテーブルで話す。この道には何故こんなに沢山病院跡があるのか？ おかしくないか？ 純粹に巡礼だけのための道というより戦争のにおいが濃いと感じてくる。

白人種の日の焼け方と黄色人種のそれはかなり違って来るようだ。われらはすぐ褐色になってしまう。彼らはまず赤くなりその後もゆっくりみたいだ。私の手の甲が真っ黒になっているのに私がびっくり。

5月8日

フロミスタの銀行でお金を下ろし、カフェで朝食を取り、スーパーで食料を買った。すばらしく美しいサン・マルティン教会がすぐそこにあった。中には入れなくて残念だったが外で眺めているだけでほれぼれするようだった。

ポブラシオン・デ・カンポスには小さな元小学校校舎の宿があった。管理がすごく厳しいと案内書に出ていたので刺青系はこういうところに来ないだろう。ところが無人でまったく自由だった。夜になってやっとバールのお兄さんが現れお金を集め、スタンプを押し、冗談を言って笑いながらすぐ消えてしまった。

マドリッドからの五人グループがいた。エレネという小学生のお母さんだという人と校庭だった庭で話す。子供はパパと一緒においてきている。友人達と来ている。全行程を歩かず明日の街からマドリッドにバスで帰るらしい。昨日の宿も同じところだったらしい。落ち着かなかったね、と同じ考えだった。

彼らと村を散歩しレストランに入る。コーヒーを飲んでからゲームをすることとなった。地元の人たちがよくテーブルを囲んで遊んでいる物だ。サイコロでのすごろくだった。知らないからやらない、と言ったのだけどやらされた。エレネが手伝ってくれた。控えめに参加していたせいかな、二度ともトップで上がってしまった。

ノブヨ、チャンピオン!!

5月9日

彼らは今日はカリオン・デ・ロス・コンデスへ行くといっていた。私はその前の村ぐら
いで泊まるだろう、と彼らに言ったけどその村に着いたらまだ早いし体調はいいしでカリ
オンまで来てしまった。

大きな街だ。アルベルゲは三ヶ所もある。だからあの窓辺に忘れて来た新しいサンダル
に彼らが気がついて私のだと分かり、私のために持ってきてくれるであろう、と固く信じ
ていたのは何故だろう。

すごい、本当にそうだった！ 彼らはたまたまこの宿を選んだ。アルベルゲのコンク
リートの中庭でオランダ人のおじさんたちと缶詰めとパンの食事をしていたら彼らが中庭
に入ってきた。笑顔でサンダルをぶら下げて。

一緒に食事をしていたオランダ人が「必要な物はこの道ではヤコブ様が守ってくださ
る」と私に告げた。

夕方彼らと散歩に出た。街を抜け河を渡りかなり遠くまで歩く。サン・ゾイロという古
い修道院の見学。カミーノに関する書物、記録のセンターとなっている図書室があった。
古風なつくりの美しい部屋。日本語の本もあった。ドイツ語で標語が大きく書かれてい
た。「道が目標である」と。

道が目標である
Der Weg ist das Ziel.

サンティアゴが目標でないことは分かっていた。その言葉に出会ったことがうれし
かった。

5月10日

朝から本格的な雨だった。初めてだ。廊下でエレネに会えた。別れの挨拶をする。新
しいポンチョをかぶり覚悟を決め歩きだす。

十七キロメートルの間村が一つもない農道が続く。何も無い。雨なのでリュックが下
ろせない、ベンチには屋根がないので座れない、足の痛みが復活する。あまりにつらく
て泣きたくなる。祈りか、悲鳴か、ぼそぼそ声が出る。

「あゆうはてんごく…アユウハテンゴク…青遊は天国…」

青遊は天国にいけたのであろうか？

命を自分で絶つという愚かな行為をした娘を神は受け入れてくださったのであろうか？

私の唯一の願いは彼女の魂の平安。

天国にいて欲しい…

やっとたどり着いた村はみすぼらしい。雨がここで止む。宿も今までで最低の部類に
入る。ホスピタレーロが管理好きときた。管理されることをひどく嫌う私。食事に行っ
た村のレストランも気に食わない。

5月11日

環境が悪いと私は自己を閉じてしまう。精神的には詰まったまんま歩き出した。

むこうから歩いてくる人がいる。この感じは忘れ物だろう…そうだった。二人目だ、又来た。これは違うみたい…すごい、帰り道だって！ 素敵な笑顔の女性だった。もうサンティアゴが射程距離に入ったのか。

昨日見かけた宿のパンフに惹かれ十五キロメートル先のサン・ニコラウス・デル・リアル・カミーノにする。その一つ手前の村でちょうど十二時になり教会の前を通った。ミサが始まる場所だった。小さな教会で村人と一緒にミサに出た。体調が最悪で息苦しくなってきた。ホステアをいただいたら涙が出てきた。甘えが出たのかも。心の奥の哀しみが刺激されたのかも。ミサの後外のベンチで少し休んで泣いた。

パンフに偽りはなく趣味の良い宿だった。若い奥さんが自然で感じが良い。旦那も悪くないけど強い酒をカウンターで影で時々飲む姿が気になった。洗濯機と乾燥機を使った（何処でも一回両方使うと十ユーロぐらい、宿代より高い）。頭の毛を洗って乾かなくて、寒気がしてきた。外の日向に出て乾かした。

同室のフランス人の五人の年寄りグループは外で自炊をしていた。オーストリーからの若い二人のお兄さん達と同じテーブルで夕食をとる。

5月12日

ベルシアノス十六・五キロメートル、元司教館とかいう建物。ハンガリー人のお姉さんがホスピタレーラ。つなぎのジーンズとか愛想の良さとかが違和感に満ちている。もう一人いる親父も一見知的な感じをさせるが、事務所に出入りのたびに鍵をかけてるむつつり野郎で気に食わない。この家は見かけだけで設備は最低だ。同宿の巡礼者も今日はみな気に食わない。何もかもくそ食らえだ。長い午後の無為の倦怠感にとられる。

みなで一斉に取る食事の前に歌を歌わされた（ハンガリーのあのお姉さんが自分の歌を最後に聞かせたいがためかと後で勘ぐる）。スペイン、フランスの次ぐらいにハボンだって！ 「夕焼け小焼け」を風邪でかすれた声で歌った。途中で歌詞があやふやになったけど、誰も日本語が分からないから適当に終わらせた。でもステキな歌だと後で褒めてくれた人がふたりいた。少しの救い。

5月13日

歩き始めてからぼつぼつ雨が降り始めた。風邪らしいがのどだけやられている。雨脚が強くなったのでちょうど着いた町でバスに乗ろうかと思ったが、バスは一日に一本でもう行ってしまった後だった。バールに後二人タクシーに乗りたいた人がいたので一緒に頼むことにした。十三キロメートルはタクシーで、後の十四キロメートルを歩いてマンシーリャ・デ・ラス・ムラスまで。

疲労と倦怠に満ちた今、私が行き着きたい先はサンティアゴでもウルスラの家でもなく金沢文庫の私の家だ。

マンシーリャの宿はシャワーもひどいしベッドもひどいし部屋もぎゅうぎゅうだけど、ウルフという名のおじいちゃんドイツ人が宿主ですごく優しくてニコニコしていい人

だってすぐ分かって、全てが許せる。窓辺を飾ってある花鉢がひとつひとつ丁寧に挿し木でふやしたようで切なくてかわいい。人ゆえに人は和むのだろう。人が場の命だ。後で分かったがこのウルフは名物おじさんで困ったことがあったら相談するように、と案内書に書いてあった。

ドイツ人の若いのがシュタイナーの自然農法でワインを作っている、と言う。パーマカルチャーの話とか神様の話とかいろいろ彼と話した。あんたは日本では有名人か？ だって（農業のせいで人に慣れていないみたい！）。風邪がひどくなっている。優しそうなチェコの女の人が風邪薬をくれた。何の疑いもなく信頼して薬を飲む。運命共同体だ。

<レオンの街>

5月14日

レオン行きのバスを待っていたらかなりの人たちが停留所にいた。意外と沢山の人がバスを利用しているんだ、と気落ちしたぐらい。寒気と気持ち悪さと頭痛で最低。

バスで一気にレオンに着いた。レオンは大きな街だ。都会だ。ヴェネディクト修道院の宿は部屋が初めて男女別だ。うれしい。地下室で殺風景ではあるがかまわない。

外で日向ぼっこをしている時韓国人の女の子と知り合った。スンジンという。身体が弱くてここに留まっていると。昨日のチェコの人、おとといのドイツの人、ここ何度か会っているカナダの夫婦等知った顔が沢山いる。

あまり寒いのでフリースの上着を買った。

5月15日

昨日よりはましだがまだ頭が痛い。ここにもう一日留まることにした。女達だけの部屋がありがたい。気が休まる。スンジンと街に出た。ミサに参列のためレオンの大聖堂に行く。すごい大きさだ。中に入ってびっくりしたのはそのステンドグラスの美しさだ。天高く広がりステンドグラスの大きな森の中にいるようだ。ため息が出た。

大聖堂から古い町並みの石畳を散歩していると学校へ行く子供達がいる。これが通学路なのか！とある種の感動。彼らの感性はきっと私とは違うんだろうなと実感。

ガウディの建物がある。彼にしては大人しいが洒落ている。銀行所有になり一階部分しか入れないのは残念だ。

都会風のカフェに入る。スンジンと話し込む。彼女の長い話。つらかった子供のころから今に至る話。私も娘のことを話す。私達は涙のうちに友情を結び、母と娘となった。

彼女の話ですごく素敵だったところ——このカミーノに行くかどうか決定できなかった時、ある人に相談したら神様に聞きなさい、お祈りしなさい、といわれたそう。そうしたら夢を見た……彼女の親指の爪に片方には太陽、片方には星の絵をピカソが描いてくれた！と。

昼ごはんはアルベルゲで簡単に済ませたので夕食はスンジンお勧めのレストランへ行っ

た。ほかに韓国人五人とイギリス人と南アフリカ人と一緒に。美味しく楽しかった。韓国人は韓国語で盛り上がっていたので、私はイギリス人、南アフリカ人相手にいっぱいしゃべって頭痛がとれた。

5月16日

スンジンとバスに乗りオスピタレ・デ・オルビゴまでゆく。手前の村で降りる予定だったが見た感じが国道沿線の味気ないところ。隣に座っていたスペイン人のおじさんが次の町にしたほうが良い、というので運転手さんも切符はこのままでよいと和気あいあいのバスの旅。着いたところは中世の石橋のかかった観光バスも来ているような美しい町だった。大きな河があった。

宿も内装を改築したらしい居心地の良い家だった。洗濯も久しぶりに大きい物を洗って干せた。キッチンが付いていたので料理をすることにした。お昼はスンジンの持っていた辛ラーメン。スーパーがあったので夜は私がサフランご飯とムール貝、チョリソーと野菜の炒め物をつくった。イタリア人とかスペイン人の女の人たちが、それは何だ、どうやって作るのかと見学に来た。

食後にスンジンがオカリナを吹いてくれた。音楽好きのフランスのお兄さんがスンジンを気に入ったようだった。ベッドに入ってから小声で彼女を口説いているのが聞こえていた。彼女は乗り気でなかったようだ。

5月17日

朝まだ暗いうちに私は一人で出発した。スンジンと一緒に歩けない、スピードが違うから。又どこかで会えるだろう、必要なら。別れの挨拶をちゃんとしてくればよかったと後悔はした。

やっとたどり着いたアストルガは丘の上。ガウディの建物がある。司教館にするために建てはじめられたものだが彼の先鋭さは受け入れがたく、もめて最終的には他の人が仕上げたとか。今はミュージアムとなっているが、中途半端さもそのままガウディ作品として感動しているミーハーな私。

ガウディという名のホテルがあった。カフェに入った。なんとなくガウディっぽい窓枠とかインテリアとかだった。

英語もほとんど話せない韓国のおじさん、こないだレオンで同じテーブルでご飯を食べた人で、挨拶して一緒にテーブルに座った方がいいが話がうまく続かない。カフェを持っていて神戸からコーヒーを買っていることまで分かったけど私の英語レベルでは片言の人と話すのは無理だ。韓国で熟睡していたはずの息子さんを呼び出して通訳を頼んだけど余計分からなくなった。

しかし彼の勇気には感心してしまった。これで一人で歩いているのだ。

アルベルグは大きかった。屋根裏部屋まで上がったら広くて二段ベッドでなかったので隅っこに落ち着いた。イタリア語がにぎやか。オーストリーの自宅から歩いてきたというおじさんが隣のベッドだった。昨日も同じ宿だったらしい。

5月18日

強い雨。

ポンチョのおかげで濡れはしないが、もう風邪はいやなので予定より早めに切り上げる。コーヒーを飲みに入ったレストランに宿が付いていた。ホテルとアルベルグ両方あったが、巡礼者の私は後ろ髪引かれる思いで質素な裏のほうへ回った。お向かいの教会で十一時からミサ。ジャストタイミング。昼過ぎに雨は止んだ。何にもない村だ。次第に山の景色になっている。

一人帰り道だというイタリア人が反対方向から歩いてきた。いい顔をしている。うらやましい。

食事の質がとても良かった。魚だったが久しぶりにまともな料理という感じだった。かわいいハンガリーの人と一緒に食べた。宮崎駿、安部公房とかが好きだと話す。ご主人が「居合道」のヨーロッパチャンピオンらしい。「ハイキ」とか言っていたけどたぶん俳句だろうと思う。

レストランのカウンターで働いている人がオーナーだろうと思うが朝から夜遅くまで働いている。翌朝早い時間に又カウンターにいるので驚いてしまった。昼休みをとっているのだろうが。

5月19日

ぐっすり眠れた。二段ベッドでないしゆったりしていたからか。折りたたみナイフがないことに気がつく。アストルガのベッドの下に落としたんだ。夜中に確か何か落ちる音がした。フランス製のすごくいいナイフだったのに残念だ。

フォンセバドンまで十六・八キロメートル。かなりきつかったので着いてすぐ近くにあるアルベルグに入った。部屋は地下室にあった。むんむんしておまけにじい様ばかりがぎゅうぎゅうづめで薄汚く、とても入る気にならなかった。上に戻ったらカフェでワインを飲んでいる女の人がいたので聞いてみたら、もう少し先にまだ他があると教えてくれた。二十メートルほど登ったところに小さい家だが人の感じがいいので、こちらにすることにした。ほっとした。ベッドを確保してさっきのをキャンセルしに戻った。

カミーノには三つの大きな山がある。最初のピレネーと此処ヒエロの十字架山と最後の難所セブレイロ。

この村は山の中腹にへばりついている廃墟のようだ。人が住んでいるとは思えないくらい家々が荒れているが、夕方になると羊や牛を追うおばあさんが出てきたりしたので無人ではないとわかる。見渡す限り美しい山々、しかし牧草地になっている此処が森に覆われていたはずの昔を思う。ヨーロッパはほとんどが森に覆われていたはずだ。

なかなか沈まぬ陽、十時近くまで明るい夜、シエスタという優雅な習慣、おかげで夕食は九時とくる。しかし我々巡礼者は朝が早いので八時にしていただける。

羊が草を食むとは遠くからなら牧歌的な眺めだが、近くで見ているとすさまじい勢いで地表から草をむしり取っていると分かった。その音に感じ入る。

日本でもよくいる、私も少しそうだけど、インド風アジア風のインテリアやファッションを好み自然体で生活している若い夫婦がこのアルベルゲをやっている。赤ちゃんがその辺で寝ている。毎日五十人からの巡礼者を泊め食事を出し食品などを売る。この村から先は山越えをして十一キロメートル行かなければ次の宿までたどり着けない。店と呼べる物は一軒もない。

此处で出してくれたパエリャは絶品でした。前菜のチーズ、サラミ、パンもすごくいいものだったしサラダもちょっとしょっぱかったけどたっぷり野菜。デンマーク人やフランス人、ドイツ人たちと一緒にテーブルで会話は弾んでいた。屋根裏部屋で普通のベッドでこれもOK。遅くまで宴会をして騒いでいたかなり年配のドイツ人のグループがすごくうるさくていい加減にして欲しいとベッドの中でため息をついていたのだが、私が起きた六時半にはもうみんなきれいに出発していた。すごいエネルギーだ。脱帽。

5月20日

雲海が下に広がり雲の間に光が走り静かに朝日が昇ってきた。山腹に立っていたのでなんのじゃまもなく真正面の絶景を味わった。すばらしい山の一日だった。なだらかで歩きやすく美しい山だった。

高くそびえる十字架の根元に小石を置く巡礼者たち。自分のとらわれ、悪癖、肩の荷等いらぬ物を石に託して置いてくれば受け取ってくれる場所らしい。家から用意して持ってくるのが本当らしいが私はその辺の小石を拾って投げた。そしたらころころと戻ってきてしまった。あわてて又投げた。

下りは少しきつかった。山を越えたら家々の屋根の色が変わった。赤から黒へ。

モリナセカでは町外れの古いほうのアルベルゲにする。スウェーデン人の女の子二人がアルベルゲに泊まりながら仕事をしている。ここが気に入ったのでサンティアゴまでの巡礼を終わらせてから戻ってきたのだと。秋まで残るつもりだと。北欧人らしく軽やかな夏姿ではだして掃除をしている。二人の二部合唱で夜のお休みと朝のお早うのお知らせしてくれる。

シャワーはあいにくお湯がどんどん出なくなった。後でオーナーが修理をしていた。一階のまんやかに囲炉裏がある大きなワンルームのよう。ぐるりと階段状になっている。街で買い物をし自炊をして庭のテラスで一人で夕食。洗濯物もきれいにかわいた。

5月21日

起き抜けに頭痛がしていた。食欲がない、というより水ぐらいしかのどを通らない。気持ちが悪く、息苦しい。何とか仕度をして出る、が、歩くのがひどくつらい。ゆっくりゆっくり…四キロメートル先に村…追い抜かしてゆく人たちが心配そうに声をかけてくれるが…杖にすがりながら、立ち止まりながら進む。胃液を吐く。もうだめだ。と思った時ルノーに乗った女の人が止まってくれた。紫色のズボンをはいていた。「大丈夫か？ 次の街のアルベルゲまで連れて行ってあげる」といつてくれた…救われた！ 涙ぐんでしまった。

ポンフェラーダのアルベルゲの前に車を止めてくれた。門が閉まっっていて午後二時にならないと開かない。ベルを押しても誰も出てこない。我が紫色のエンジェルは仕事に行か

ねばならぬので急遽その辺を見渡し、三人のおば様方を捕まえた。薄いピンクと濃いピンクと紺色の三人。彼らは私をタクシーに乗せ病院へ連れて行った。ひどく長く待たされているうちに彼らの一人が「あなたは病気か？」と聞くので「ただ疲れているのだと思う、寝ればいいと思う」と答えた。私の持病は心臓なので安静しか打つ手はない。「ではホテルを探すか？」ということになり彼らが推薦したホテルへタクシーで向かう。タクシー代は払ってくれる。ペルグリーノを助けるのは伝統らしい。四国のお遍路さんの土地柄と一緒にだ。

市場の立っている広場に面したこぢんまりとしたホテルだった。彼女らは市場に出かける途中でもあったのだ。部屋まで一緒に来て「お風呂もあるしバルコニーも付いているし、ベッドはこんなに大きくて一人で眠れるのよ」と彼らもはしゃいでいる。「二日は休みなさいね」と言って帰っていった。私の三人のエンジェルたち、カルメン、ミリアム、アウロラ。

まず風呂に入った。日本を出て以来はじめての風呂だ。四十三日ぶりか。体内の血液が今動き出したかのようにゆっくりとお湯の中で身体がほぐれていった。なんという幸せ。パラダイスだ、これは！

一回目の風呂は軽く済ませて眠ることにする。たった一人の部屋だ。ぐっすりと眠った。

目を覚ましてサッパリしているのに気づく。散歩に出る。市場を回ってビオの店（ナチュラル系）も見つけタイガーバーム、フェイスクリーム、自然食品を買って帰る。ボツカディーリョを食べりんごジュースを飲みまた入浴をして髪の毛も洗い、降ってきた雨の音を聞きながら又昼寝をする。夜も又風呂に入りぐっすりと眠り朝はいつもより遅い八時半に目が覚める。出発する元気はまだないと判断しもう一日このパラダイスに留まることにする。

5月22日

歩いている時には無理をしても気がつかないのだろうか？ 千メートル以上の山には登ってはいけない、という注意を軽く考えていたせいかな？ 疲れが溜まり、神経も結構疲れていて、意識だけが先走りしていたので身体がもう、イヤー！と悲鳴を上げたのか？

3人のエンジェルが今日の午前中にバールにコーヒーを飲みに来るはずだったが、なかなか来ないので置手紙をして彼らのためのコーヒー代を置いて外に出た。城の遺跡を見に行った。スペイン語の未熟さのせいで時間でも間違えたかな？

夜八時のミサに出る。古い聖堂が今まで多かったがここはかなり新しい。すぐ前の席に赤ん坊の乳母車を横においているすごく若い母親がいた。横顔が死んでしまった私の娘にそっくりだった。近くの席の小学生ぐらいの男の子が落ち着いて座ってられないのか、赤ん坊のほうにすぐ来たがる。お父さんに引き戻されてもまた繰り返している。その若い母親はあまり気にしてる風でもないが、父親のほうがかうるさいほど息子に干渉している。

ミサが終わって外に出たら雨が降っていた。

結局二泊三日で七回お風呂に入り、独り寝！をして生き返った。

5月23日

街を抜ける道を間違えたらしく交通量の多い舗装道路に行く羽目になった。やっと次の村で本来の田舎道のカミーノに戻れた。ほっとする。体調が良い。写真を撮らせてください、とか声をかけられたりして、おっと、休養明けで今日はいい女になったのかなと思う。

ゆっくり歩いて十五・六キロメートル、カカベロス。贅沢をした後だからどんなアルベルゲでも我慢できると思っていたが、全てが二人部屋という教会の扉を改造したモダンな建物だった。塔の上ではここでもコウノトリが巣を作って子育てをしていた。へんな鳴き声だった。クククーとかケケケーとか。

同室のブラジル人のお姉さんは二回目のカミーノだと。何故二回も？一回目が終わった時サンティアゴのカテドラルでどうしてももう一度歩きたいと思ったの。その時はお金も時間もなかったからあきらめたけど、八年たってやっと来れたの。子供達は二回目なんてクレイジーだと言っていたけど……足の豆で今は休んでいるらしい。英語、ドイツ語、スペイン語、もちろんポルトガル語もべらべら。

ヴィルジーネ教会はバロックでひどく気に入った。キリスト像も初めて美を感じた。夜八時からミサ。かなりの人。

5月24日

ヴィリャフランカ・デル・ビエルソまでわりと早く着いた。ここから山に登るバスに乗れる。しかし十四時四十五分まで待たねばならぬ。その辛抱ができなくて次の村まで行くことにした。日本人の女の人に出会った。「同行二人の菅笠」を被っていたので日本人だろうと思って声をかけた。去年途中までしか歩けなかったから今年は最後までと一人で歩いている。自然が好きだからという理由。四国のお遍路も歩いたという京都の英子さん。

小さな村ペレへの素敵なアルベルゲ。家も、家具も、庭も、管理も全てゆったりとしている。英子さんはお向かいのベッドでのんびりしている。さっさと食事を済ませてしまったらしい。

私は冗談好きのドイツ人のおじさんとおしゃべりしたり、雨が降ってきてあわてて洗濯物をいれ有料の乾燥機と一緒に入れたり、英子さんから果物をいただいておやつをしたりで気分が遊んでいた。

デートのように彼と二人で食事に行った。日本人と一緒に食事ができるチャンスなんてあまりないから聞きたいことがある、と。例えば日本人のクラシック音楽の演奏なんだけどヨーロッパの俺達の音楽を何故君達があのようなレベルで弾けるのか？という話から、日本の教育、歴史について説明を始めかなりいろいろな話題に広がっていった。原子力発電の仕事にかかわっている人らしい。体調を整えるために一週間に一度ぐらいはホテルを取っているらしい。スポーツとして歩いている、と。話し込むのが楽しかった。

5月25日

大きな木が目立つようになって林道を歩くのが気持ちよい。ヴェガ・デ・ヴァルカルセまで来てしまった。

バスに関する認識が甘すぎた。

*そもそもバスはカミーノを歩く人のためのものではない！

*一日に一本！

*日曜日はだめよ！

案内書にバスのしるしがあるからといってそれだけで安心していただけの私のいい加減さ。

もう身体の限度までいくなんて事は避けたいので、高い山は登らずにバスで行こうと思っていた。しかしかなり奥の方まで歩いてきてしまったので、上に登るバスはここからは出ていないのだ。ここを通っているバスは山を大回りして向こう側に行くものだけ。それも一日に一本、夕方五時のみ。日曜日はだめよ！で今日はたまたま日曜日……

アルベルゲを二つ覗いたが、薄汚さと切なさで決められない。パールに入りなにをするともなくそこに居る地元のおじさんに聞いたら、ペンションがあると。川のほとりでこぎれいだったのでそれにした。風呂とひとり寝の幸せを選んだ。

村の真ん中にある小さな教会で日曜日のミサに出た。歌が多かった。巡礼者にもプリントを渡してくれたので一緒に歌った。若い人、子供が多いと感じた。沢山の木彫りの像が飾ってある。スペイン人は像が好きらしい。

5月26日

歩き始めて四十日がたった。寒くて食欲もないままペンションのベッドに座っている私。私の四十日はなんだったのか？ なんでもなかった、なにもなかった。今私は夕方五時のバスに乗るためにじっと待っているだけ。無為、孤独。村の真ん中へゆく。パールの窓から外を眺めていると、霧雨の中雨具をつけて巡礼者がぞろぞろとどんでん歩いてゆく。私はあんなに元気ではなくバスを使うのです。私は弱いのです。精神的にも軟弱であり安逸に流れ贅沢なのです。私はどんでん心を閉じて何もできないのです。小さくて弱くて力失せて。

小さな教会は横の扉が道路に面していて開いたままになっている。ちょっと座りに行く。四十日目、意味深なこの日に神様は私に私の弱さを示してくださるのか。こんなに弱いのか…どうしよう…どうしたらいいの……今は…それを…受け止めよう、としか言えない。

四十日目に私は「ばおぼぶ」の良さにも目覚めている。スペインのカフェコンレチェは美味しい。しかし「ばおぼぶ」のカフェオレの方が絶対に美味しい。「ばおぼぶ」の精神性、優しさは個性だ。「ばおぼぶ」の場を大切にしなければとしみじみと思った。

食事をし終わっても寒気がするので厚いフリースのコートを引っ張り出して着た。やっと五時になり来た小型バスは地元の人でいっぱい。乗り遅れてはすごく困るとあせっている私は皆が下りるのを待たずに乗り込んでいた。皆優しいから見守っているだけ。ほとんどの人が降りる場だったのだ。

山を大きく回って乗り換えをさせられ向こう側のサリアについたのは夜も十時ごろ。バス路から眺めるスペインはカミーノから見るのと違って、現代に生きる普通の人たちと普通の街にみえた。カミーノには中世の時間が流れていてこちら側とは別世界なのだ。

サリアのバスセンターに着いた時、雨も降り真っ暗で人っ子一人いないし、どうしよう……何の店だろうかと戸の開いている近くの店に入ったら、出てきたその人がタクシーの運転手さんだった。街の中にも沢山アルベルグがある、と教えてくれたけど案内書に出ていた一つに決めていた。街から離れどンドン山の方へ行くので心配になってきたころやっと着いた。三キロメートル。

暖炉のある食堂兼居間が天井も高くインテリアもセンスが良くて芸術的で新しいのに居心地がいい。部屋は八人部屋だが洗面所が専用にあってゆったりと機能的だ。暖炉の周りでくつろいでいたドイツ人のおば様たちが私を知っていて優しく迎えてくれた。

5月28日

ここに三晩泊まった。翌朝起きれなくて、食欲もなく又ひたすら寝ていた。私の六十二回目の誕生日！に私からの贈り物として一日ここに居ることにした。後の二晩はがら空きで個室状態だった。暖炉の前に座り、火を眺める喜び、火の記憶をたどりつつとろとろと眠る。

七年前に逝ってしまった我が最愛のパートナー。富士山の山の家の庭で子供達とよく焚き火をした。高く燃え上がる炎。炎を眺めて夜がふける。澄んだ空気。横浜の家にもだるまストーブを置いて薪を燃やしていた。火の色は美しい。引き込まれる。炎のある生活、暖かい空気。木と骨董と酒と私達との生活を愛していた彼。

彼は富士山が好きだった。富士の山のように大きく美しく力を持ちそして優しい人だった。山のお家ではパパの料理が定番。手造りソーセージ、手打ちうどん、子供達の大好物。「お前達、うまい物が食べたければ自分で作るのだよ」とのパパの言葉は今でも生きている。

彼が私を私に戻してくれ、私が彼を彼に戻したふたりの時だった。私たちふたりの子供達がいて他にあなたの子供達と私の子供達。あなたの苦しみ、私の苦しみもあったけどふたりともやっと幸せになれたのだった。

誕生日の朝、部屋の外に出たらちょうど道へ出て行こうとする英子さんの後姿。どういいうわけか振り返った。再会を喜ぶ。私が登れなかったその山を降りてきて、泥だらけで、でも朝が早すぎるのでまだ先に行くことにすると。

私はこれから先歩けるのだろうかという疑問が出てきた。ゆっくり行けばいいのだけれど大丈夫だろうか。心臓がストライキをしている。

5月29日

歩けそうなので出発した。牧草地の真っ只中から虹が立ち上がった。すごく大きい。根元がそこにあるとは！ いけるといふ励みだ、幸せだ。

三キロメートル歩いてサリアに着く。坂道の多い古い美しい町だった。町外れの洒落た建物は何だろうと思ったら、学校だった。レオンでもそうだったが子供達は石畳を踏み美しい建物で学び、外に出て見渡せば緑の山々、牧草地が広がっているという世界。これだけでも決定的に何かが変わってくるだろう。

日本のミッションスクールにはスペイン出身の神父様やシスターがたくさんいらっしゃるけど、日本に留まっている彼らが望郷の念にかられているに違いない、それを抑えているに違いない、などと想像してしまった。

ガルシア地方に入ってから緑が濃くなっている。雨の多いところらしい。まるで沢登りをしているような道もあった。石が配置してあるから常に水が流れているのだろうか。

スイス人のおじいさんと追い越したり越されたりで何度か出会った。「年老いた木を見てごらん、美しいね、希望だよ、我々の」。若い木の美しさをもうとうと失ったとはいえ（我々の）とくくられた時の一拍の微妙な気持ち。しかし、美しい老木になりたい！

古い田舎屋のレストランで又出会ったので一緒に食事をした。本が好きらしい。カミーノに関する本は、ハーペ・ケルケリングのものとカルメン・ロールバッハの物があるが後者のほうが良いと教えてくれた。前者のは芸能人の書いたベストセラーで、この本のせいでドイツ人がわんさと来ているらしい。私が読んだパウロ・コエリョやシャーリー・マックレーンの物は読んでいなかった。

自死をした私の娘の父親はスイス人だった。いつも彼とスイス中を回ってこんな風に見知らぬレストランに入り食事をしたものだった。彼が生きていたら一緒に歩いているかも。彼との時間は美しいスイスの自然と重なった思い出となっている。我が青春。

牛が庭に居るようなこんな田舎屋でも、どんなけちなアルベルゲでも、キッチン設備は電気一枚板のレンジがついた最新式だ。横浜の我が家のガステーブルはクラシックだ。

次の小さな村、フェレイロスのアルベルゲはとてもシンプル。受付のおばさんが粗野な感じ。高校生の十二、三人のグループが又一緒。おしゃべりがうるさい。ゆうべはブラジル人のおじさんが夜中に堪忍袋の尾が切れたみたいで注意をしていたが。

最後の百キロ地点から歩く人たちが増えてくる。高校生は授業の一環として歩くらしい。先生は付いていない。歩き初めで興奮しているんだろう。今日「サンティアゴまで百キロ」の道標石を見た。よくここまで来れたものだ。本当に。なんでもない普通の道標だった。

目の前を何頭かの牛が棒を持ったおばさんに追い立てられて移動していた。

今までバスやタクシーに乗った距離を計算してみた。百三十八キロ。良かった、なんとか許せる。

「サン・ジャックへの道」というフランス映画があった。軽い喜劇風だったけどそこでこの美しい道を見たから私は、さあ、行こう！という気になった。「道」が私を呼んでいた。その中でイスラム教徒がメッカへの道と間違っ一緒に歩いてしまうエピソードがあるのだが、イスラムとの対立関係はヨーロッパにとってひどく根の深い問題であると、映画を観ている時は分かっていなかった。

その映画と日本人の作ったTV報道とが夕食の時話題になった。デンマーク人と、イギリス人と、スペイン人と同じテーブル。日本のフィルムはかなり美しかったらしい。俳句を作る女の人がいて作りながらこの道を歩いているというもの。俳句も美しかったとイギ

リス人が言っていた。

この旅に出てきてから俳句が作れないことに気がついた。その言語脳が働かない。外国語を話すのに精一杯だからか？ 日本での生活のことほとんどすっかり忘れ果て真っ白になっているところもある。脳をひっくり返すようにしないと思い出せなかつたりして。

歩いているうちに頭が空っぽになってくるという感じもある。

5月30日

予定より八キロメートル少ないところで切り上げた。これ以上は無理だった。ポルトマリンという湖のような広い河のほりにある高台の美しい町。アルベルゲの窓からの眺めも河が見えるし、三人部屋で専用トイレ、シャワーが付いて言うことなし。小学生の団体と一緒に上がったが先生が付いているせいかうるさは感じなかった。

街はかなり大きくスーパーマーケットがあった。大好物のチーズとパン。プラス、チョコレート、バナナ、りんご、オレンジジュースを買い天気がいいので河を眺めながら食べたくて公園に行った。ベンチには既に一人の巡礼者がいた。声をかけて一緒に食事をすることにした。オーストラリアからきたクルウェーという珍しい名前の人。もっと年かと思っていたら私と一緒に。バルセロナから来たという若いローザも加わって三人同じようにボッカディーリョを食べる。

道について、ヤコブ神話について話していたのだけれど、次第に神についての彼の質問は、「おっと、なんと答えるのだろう私は」と思うほど試されていると感じた。「この道で神は君に何か教えてくれたか？」。こんな風に答えていいのだろうか、とどこかで思いながら外国語のせいで直接的に言わざるを得ない私。「この道で神様が私に教えてくれたことは…期待したような奇跡の形ではなく日常生活の小さな積み重ねの中でこんなに出会っているだろう…ということでした」と答えていた私。

「神が私を愛しているということ、それは知っていた。でも私はその愛にこたえようとはしていなかった」「どうしてそう思うの？」「わからない」「それは君がパーフェクトとドラマを望んでいたからではないの？ 自分に満足していないからでは？」

娘の自死については、彼は涙を流しながら「どうして？ どんな風に？ 何処で？」「名前は？」と次から次へと問うてくる。「青遊のために君は何ができるか？」私は既にその答えを知っていた。「あゆみに良く似た娘達、息子達が私の前に現れる。彼らを愛すること、それだけ」

「君のために祈ろう」といって彼はローザとふたりで私を挟んで座り、肩に手を回し、残りの手はつなぎあって、「天の神様、ノブヨをお許してください」と祈り始めた。

「君はジェントルなスピリットを持っているね、話してくれてとても良かった、ありがとう」といって彼は歩き始め、去っていった。

5月31日

雨が降りそうで降らなかった。十六キロメートルも歩けた。

何かは抜けたようだ。つき物が落ちた、という感じか。路端の白い小さな花、勿忘草のようなブルーの花、エリカのようなピンクの花、石の上に咲く紫の花、灌木の黄色い花盛り、草の緑の、様々な木の葉の緑の美しさ……立ち止まり見上げると、森の中の大木が枝を大きく広げ蔭の葉が絡まり絵巻模様をなしている。

なんという美しさ、なんと言う喜び、私の中に喜びがある。世界が変わってしまった。

欲しかったのはこれなんだ！

若い巡礼の女の子が追い抜きざまに「あなたはこの道で何を思うか？」「そんなに簡単には答えられないけど」といったら「道が好きか？」というから「好きよ」、「ハッピーか？」と聞くから「とてもハッピーよ」と答える。「それが大切だよ」と足早に行った。

私と一緒に写真を撮らせてくれ、とやってきたドイツ人のおじさん。ソンプレロが珍しいのかしら。

ミカエルという名の若い大柄なスペイン人が私のズボンを褒めてくれた。魔法使いのような感じのオランダ人の女の人と一緒に歩いているらしい。三人で一緒にバールで休憩をした。私はホットミルクにした。マリアというそのオランダ人もコーヒーはもう飲みすぎだわ、ホットミルクはいい考えだ、と真似した。

リゴンデという山の中の小さな村は今日がお祭りだという。やな予感がしたがもう歩けない。ぎりぎりまでベッドが無くなり予備の部屋を用意してくれた。障害者用の個室だ。ラッキー！ 私の後に来た人たちは皆「満員」といわれ断られていた。しかし夕方になって一人の若者が私の個室に入ってくるではないか（ベッドは二段にすればもう一人眠れるのだ）彼は三十キロメートル以上歩いてきてくれたので屋根の下なら何処でもいいから、と頼み込んだそうだ。ああ残念、私の個室の幸せが……

彼、イムレに食事に誘われ一緒に行った。目のきれいなハンガリーの若者とのデート、ということで、個室がパーになったことは許すことにした。彼もスポーツとして、自分の可能性を試す、自分を見つめる、外国を見たいといういろいろな理由で歩きにきたと。ハンガリーは貧しい国だから大変なんだと。

案の定夜の十時半にお祭りがスタートした。打ち上げ花火と大アンプの音楽、それも又すぐ隣の広場。スペイン人というのはまったく…

6月1日

曇っていたが次第に良い天気になり、下り道だったので何とかサン・シュリアンに着いた。サンティアゴまでは後六十キロメートルだ。このアルベルゲは評判が良かったので是非ここに、と決めていた。古い山小屋風で雰囲気はよい。おじさんがとてもいい。ミケランジェロという名だ。

暖炉の横に本が積んであってスペイン語ばかりの中に一冊小さなドイツ語の本があった。“Auf dem Jacobsweg”「ヤコブの道で」

読み始めてびっくりした。私がこの道で感じていたことが全部出ている？というくらい

今の自分にぴったりとした言葉が並んでいる。まずは全部書き写すことにした。久しぶりに勉強をしているようだ。学生時代にこんなに熱心に本に引かれるなんてなかったよな。

午後ずっと書いて、翻訳もして、夕食前に済んだ。だめもとで、ミケランジェロにこの本が欲しい、と言ったら快くプレゼントしてくれた。

ここはインテリアもいいけどクラシック音楽が流れているのがいい。テレビがないのがいい。食事は皆と一緒に頂く。質がよかった。高校生のグループと又一緒で、そのうちの一人が誕生日を迎え皆でお祝いをした。楽しかった。

六十二歳の私の誕生日に朝起きて同室だったオーストリア人の女の人について教えてしまつて、そしたら彼女が一人でハッピーバースデイを歌ってくれた、なんてのが頭をよぎり少々寂しくはあったけど、十代の若者はやはりこんな風に派手に行かなくちゃ、と結構素直な私の反応だった。

ゲルトルートとその夫は何度か出会っている。カリンは初めてか？ スペイン人の若いペアも初めてだ。夕食後も和気藹々とおしゃべりで過ごした。この家の雰囲気があったかい。

ミケランジェロの犬達は私にひどくなつて猫のように身体を擦り付けてくる。足に絡まり遊んでくれと。大きいのが一匹に中くらいのと小さいのが二、三匹。今まで出会った犬達もつながれてないのが多かった。皆大人しい。大きい犬が目立つ。パウロ・コエリョの「星の巡礼」の中では犬が悪霊のごとく書かれているが、彼は犬嫌いなんだろうか。

6月2日

二十キロメートル以上歩いたか？ すごい霧だ。森が、野原が霧の中に霞んでいる。霧に覆われたのは初めてののような気がする。私の前のすぐそこに「空」があるような気がした。あゆうの空を見たような気がした。生きることへの絶望か？ 何かへの期待で空にとびこんだのか？

美しい川のほとりのいかにも公立という感じの立派な建物のアルベルゲにたどり着いた。

カリンと又食事を一緒にする。今までバスもタクシーも使ったことがないそう。すごい。二年前に四十歳になるお嬢さんを癌で亡くされている。優しい方だ。靴が合わずに豆が痛い、と言うので、サンダルにしたら、といたら同じところがあたる、とかだったけど今日サンダルを試してみたら、快調とのこと。なんとなく寒気がする、早めに寝る。

6月3日

また来た。頭痛と吐き気、胸苦しき。五十メートル程歩いたが無理なので戻った。ゲルトルートとその夫が歩いてくるのに出会う。彼らも迷っていたらしい、ゲルの腰が痛むのでどうしようかと。皆でタクシーを使うことにした。

ペドロウズは国道沿いの町。ペンシオンコンパスを私は選ぶ。風呂に入り一人で寝るた

め。睡眠不足かな？ 大部屋では深い眠りが難しい。お風呂と一眠りでサッパリして絵葉書を出しに外へ出る。ゲルの夫にばったり出会う。笑顔の君に会えてうれしい、と。いい人だ。ゲルの腰はこの町の医者に見てもらったら、ほとんど触らずに手の力、気の力で治ったと。こんなスペインの片田舎に気功の先生がいるのか!!とびっくり。

ペンションでのんびりして鏡を覗いたら、とてもアジア風の顔がそこにあった。おかしい、この言い方。五十日もたつせいか。目が変わっていた。これなら好きになれる。今までの私の目は何年も好きになれなかったのだ。

ここでは人はひどく単純になる。歩くという行為を重ねることで余計な物がそぎ落とされてゆく。

6月4日

<喜びの丘>

ゆっくり歩いて着く所まででいい、と思っていたが結局サンティアゴの三キロメートル手前の「大聖堂のみえる喜びの丘」モンテ・ド・ゴゾまでできてしまった。あの魔法使いのようなオランダ人のマリアと一緒にお昼を食べたり歩いたりしてきた。ミカエルには置き去りにされたようだ。私のミカエル、と大好きだったみたいなのに。マリアは障害児の教育をしてきた人なので共通する問題意識が沢山あり話がつきない。英語でなくドイツ語で話せることが分かり途中から楽になった。オランダ人の外国語能力はすごいと感じる。きちんと教育をされてきていたかららしい。しかし今のオランダの学校教育はどこかの国と同じで子供達に甘くなり、もういくつもの外国語を教えなくなったと。

八百人収容できるアルベルゲは一つの町のように丘の斜面に作られている建物群だ。設備は整っているがそっけない場だ。ここが気に入ってサンティアゴに着いた後戻って宿を取る人達もいるとか。人様々だ。

マリアと八人部屋に入る。もう一人のメアリーと発音するアメリカから来た韓国人はすごく元気。六十歳とは思えぬ。ちょっと部屋でふたりきりになった時そのメアリーが私のところに来て、「こんなにつらいこと、何故やっているんだかわからなくなる……」と彼女のつらさをしばらく話す。彼女は体力があるから一日三十キロメートルぐらい平気らしいのだが、やはりぎりぎり無理をしていたみたい。「あなたは何故このカミーノをやったの？」と聞く。

私はもう何度も答えたことだし自分の中ではだんだん明らかになってきているのでさっと「神のこと、娘と夫のこと……」、娘の話になったとたん彼女は大声で泣き始めた。「何故なの、何故私はこういう人と出会うの？」と。今まで出会って話をした人が、家族を自死で失った人ばかりだ！と。

彼女も子供の時に父親を自死で失っている。わけが分からなくて父を憎んでいた、と。

彼女が森の中で野宿をしなければならなかった時、やはり夜中に歩いてきた、そのドイツの男の人は彼が十八歳の時に父親が自死をしたと。その細かい部分を朝まで語り続けたと。鉄道の線路に身体を横たえ……しかし十日ほど生死の境にあり、息子はどうしても生きていて欲しいと願ったがだめだったと。今は医者になっている彼。精神を病んでしまった母親。

「あなたは今まであなたの父親の死について考えたことはあるのか？」と聞くと「ない」という答え。「考えるのよ、正面きって考えるのよ、そうしろとカミーノが教えてくれているでしょ」と私は言う。私達は涙ながらに抱き合っ、がんがん言って、その塊を少し消化したと思う。これがカミーノなんだと思う。

6月5日

よく眠れなかった。モーリタニアから来たという中国人のおじさんが荷物をいじる音、マリアのいびき、たぶん昨日の歩きすぎもある。頭痛で目が覚める。最悪のラストデイだ。雨の中をゆっくりと歩く。マリアは私と一緒にサンティアゴに入りたいからとゆっくり歩いてくれる。最後の力をふりしぼるようにして雨の中を一步一步ゆく。

着いた、サンティアゴだ。すごくうれしい！ ほんとうにうれしい！！

カテドラルに行く前に巡礼事務所に登録をしなければ。メアリーがもう済ませていて、私を人ごみの中で見つけ到着の喜びの抱擁をし、二階へ行くのよ、と教えてくれた。終了証をもらう。達成感とお祭り気分の軽い興奮状態、会う人全てと喜びをわかちあう。

<サンティアゴ>

マリアはアルベルゲを探すと云ってるが 私は巡礼が済んでまで大部屋なんかもううんざりなのでホテルかペンションにしようと思ったが安いところは簡単には見つからなかった。しかし高いところも満杯だったりでともかく観光地なのだ、ここは。安いが少し中心部から離れた屋根裏部屋のホテルに決めてからだったので、カテドラルの十二時のミサにはぎりぎりになってしまった。

五百人程は入るだろうか、十字型の聖堂で真ん中が祭壇。満席。立っている人も沢山いる。私はどんどん中を歩いて座れる場を探したがない。結局前の方の石柱の台に割り込んで座った。スペイン軍隊の音楽隊が目の前に入っている。三人の司祭によるミサが始まる。司祭が今日到着した巡礼者を読み上げてくれる。マドリッドからの四人とか、ドイツからのふたりとかそれぞれを。耳を凝らして注意をしていた。そして聞こえた。una japonesa (ウナ ハポネサ)、「一人の日本女性」だ。なんとうれしかったこと。このミサは私達のための、巡礼者のための、私自身のためのミサなのだ。大きな香炉がグリーン、グリーンと揺れて目の前にくる。

マリアがこの人ごみの中すぐ後ろに座っていたらいい。何故この人と出会うのだろうか、と思う。マリアも待ち合わせた人とは出会わずに、どういうわけか私と出会う、と言った。

ミサの後、聖ヤコブのお墓を巡り、聖堂の中をマリアと歩く。外に出てチラシをもらったレストランに行く。長い道中初めて布製の白いテーブルクロスのかかった食卓だ。ここは都会だ。

マリアとは食後の散歩で彼女の父親への憎しみ、というトラウマの話になった。私は親子関係を客観視するために、日本には「内観」というものがある、ヨーロッパでも広まっているはずだ、と説明をした。これかな？マリアとのいろいろな会話のとどめは？

明日の再会をはっきりとは約束せずに分かれる。明日は彼女の誕生日だという。海の方

へ行きたいらしい。巡礼者の最後の余韻の巡礼というか、大西洋に面したフィニステレへ。一日の行程だ。海を見たいと思ってはいた。しかしそれだけだったら、もういいかも、気が乗らなくなっている。昔ジブラルタルから大西洋側に入ったところの海と浜と山の荒々しい風景、そこに娘を後ろに置き去りにして、水際まで憑かれたように歩いていた私、あの海の大きさ美しさに比する物はもう何処にもないはずだ。

ホテルもかなりひどく何日もいる気はしない。バルセロナのドロちゃんに電話を入れた。明日出発すると。ドロちゃんの次はドイツの和美さん、そしてスイスのウルスラの家、ウルスラのところで休養をする、と予定している。一ヶ月の友人訪問の旅にさあ出よう。

もうカミーノは終わりだ。本当の巡礼は日常生活のなかでこれから始まるのだ。

愛する三人の息子達へそれぞれ「サンティアゴへ着いた」のはがきを書いた。

サンティアゴで買うべき物を買うため街へ出る。小さな街だから本屋も数軒だし目星はつけてあったのでカミーノの写真集と、ケルトの象徴に関する本を求める。お土産と一緒に日本へ送るため郵便局へ直行。そして十四時発、バルセロナ行きのバスに乗った。

アディオス、カミーノ！

第Ⅲ部 カフェギャラリー&窯 ばおばぶ ——ホームページから

2015

睦月のつぶやき

ばおばぶは、古い建物なので、昔風の縁の下があって、そこへは潜り込むことができる。ノラさんたちとしては絶好の住処となったのだろう。犬を二匹飼っていた頃にはノラさんたちはこの家には近寄らなかったのに、犬が死んでしまったあと、いつの間にやら住み着いていた。

二〇一四年春生まれた子等が縁の下で共同生活を送っている。一匹のミケの母さんから四匹。ミケと黒白と茶と茶白。こげ茶の母さんから二匹のキジ。もう一匹いつのまにやらぼやけたミケが加わって、七匹の子猫が常時いる。親たちは消えている。産後やせ細った母さん猫がおっぱいをやっている姿を見て、子猫の可愛さと母の姿の切なさでミルクをやり始めてしまった。これがそもそもの騒動の始まりだった。

ご近所の庭に糞をする。これが問題となる。非衛生的である。

ご近所の皆さんも迷惑をしているから、と行政に訴える人がいた。この方は、ノラ猫の養育者の方である私に対し、餌をやらないように、かれらがこの地域から消えてなくなればいい、とおっしゃる。

彼をエゴというなら私もエゴだろうと思う。

私には本当に何が一番いいのかわからない。

行政は以前はノラに餌をやらないでください、という指導だったけど、これは失敗だっ

たので、今は捕まえて去勢手術をする方針に変えたようだ。その案に乗ることにした。家の裏に彼らのためのトイレを設置することも教えてくださった。少し利用しているようだ。

手術のための捕獲だが、素人には到底できない。行政は猫捕獲ボランティアさんたちを紹介してくださった。優しい方々だ。ネズミ取りを大きくしたような猫捕獲器に餌を入れて設置する。ちょっとした間に捕まったのには驚いた。一回目は三匹。二回目も三匹。捕獲器を布で包み、犬猫病院へ運ぶ、手術の後は病院で一泊、その次の日はボランティアさんのお宅で一泊。それから帰宅。

手術の費用は行政から援助金が一匹につき五千円。オスの手術費はこれでトントンだがメスの手術代は一万円する。この低額でやって下さる病院は限られているので、車での搬送もあり、手間暇全てボランティアさんにお任せだ。

こちらは費用を払うだけだが、オスメス別の料金なんだから、なぜそれぞれ賄えるように助成してくださらないのだろうか。この痛みが関わるものの意識を変えるとでもいうのだろうか。

最近巷で聞くクレームは、保育園の子供の声がうるさい、鳥の声がわずらわしい、果ては雀の声がうるさいだって！ びっくり仰天だった。それも年配の方、地元の方が多いらしいと聞いて又またびっくり。緑豊かな街は健康のためにも環境のためにもいいことだらけなのに、葉が落ちることが問題となるご時世だ。

何がこうさせているのだろうか。豊かな生活と引き換えに世の中はせせこましくなり、権利主張が進歩と置き換えられ、人々は己中心に生きているのだろうか。

人のわからない部分で、例えば細菌がいろいろ役に立っているように、この世に存在するものは必ず何かしらのお役目があるのではないだろうか。

猫がこの家の縁の下に住むようになってから、ネズミが出なくなった！

フランスのある村でも猫が増えて困って猫退治をしたと。絶滅させようとしたのだが、ある女の子が二匹匿って育てた。ペストが流行り始め、その猫が大活躍で、人間を救った、とかで猫の銅像がやたらと立っているらしい。

日本文化云々を言えた立場ではないが、ぼろぼろと指の間から砂がこぼれるように良識ある豊かな文化、つまり心がなくなっているようだ、と私は感じる。

「寛容さ」という言葉が死語にならないように、願うしかない。

皐月のつぶやき

ばおばぶでは二ヶ月に一度連句を楽しんでいる。初めてからもう数年経つが、三十六歌仙はまだ一回しかやったことがなくて、いつも半歌仙だったが、今回は気合を入れてやることにした。いつもより一時間早くスタートした。全く新しいメンバーが加わることになり、その方も初心者としてすぐ参加された。二人ほど遅れて来て途中から入り、結局七人でわいわいに行ったわけ。ひょっとして三、四人だったらきついな……などと心配していたが、初心者のための説明も加わり、復習がてら、のんびりと順番が回るようになった。それでも半歌仙の時とほとんどかかる時間が変わらなかった！ すごい進歩だ！ こなすのは倍の量だが、後半は気楽にポンポン進むということもあるが。

五七五、の次が七七、そして五七五と繰り返すが、細かい規則がある。この煩雑な規則があつての面白さ、と言える。

初めて連句をやった時、本当に混乱状態だったが、普段と違う脳が活性化されたよう

で、頭のどこか、いつも眠っていたあたりが働いた感があった。

この連句を精神科の先生が治療に使っている、と聞いたことがある。箱庭療法とかも同じかもしれないが、枠に意味があるのだろうか。枠、規則、理り、形というもの。その枠の中で自分を表現する、これが、人がいわゆる人らしくなくなってしまった状態、つまり社会性を失った状態にいるとき、それを是正するのに役立つ！というのか。

枠とはなんなんだ……？とおしゃべりが始まったのだが、私ははっと気づいたのが、ユダヤ人のことだ。彼らの脳は決してほかの人種と違うのではなくて、彼らは常に苦境の中で生き抜いてきた、ということだけがほかの民族とちがっているのだ。天下泰平とか平和ボケとかとは一切縁のない歴史が数千年続いてきた。差別、迫害、虐殺とともにあった歴史なのだ。だからこそノーベル賞の二〇%～四〇%（ユダヤ系もいれてかな？）もとるほど、学問、文化、経済で突出している。能力が磨かれてきた、と言える。今や世界は経済のみならず、ひょっとしたら全てに渡って、ユダヤ人の支配下にあるのではないか、と思うほどだ。

苦境イーコール枠、規則とは言えないが、メカニズムは同じような気がする。

十世紀ごろスペインから追われたユダヤ人たちがモロッコからアフリカを経て散ってゆくのだが、その砂漠の逃避行で、ある父親は息子に哲学を教えていたと。

イスラエルの朝の町で、幼稚園や学校へゆく子供たちを引率しているのは父親たちであった。子どもの教育は父親の仕事らしい。

先日店にいらしたユダヤ人のご主人を持つ方にお話をうかがったが、ユダヤの教育重視はすごいらしい。身一つで世界のどこでも生きていかれる能力をつけることなのだ。

列強の表の歴史があり、その影にはきっとユダヤ人がいた。ユダヤの歴史とはほとんど正反対の環境と性格を持つ日本の歴史、文化ではないかと思うが、その違いをこれから調和させていきたいものだと思うのだが。

長月のつぶやき

マザー・テレサを想う

一九九七年九月五日、夜九時過ぎ、カルカッタの街は停電に襲われた。心臓を患っていたマザー・テレサが背中中の激痛を訴え、呼吸困難に陥ったが、準備されていた人工呼吸器は作動しなかった。真っ暗闇の中で彼女のこの世の命が消えていった、という最後のページを読み終えた。

その闇よりも深く暗い闇をマザー・テレサは心に何十年と抱えていた、という内容の本である。何故光の人ではないのか？ 何故闇なのだ？

一九四八年インド、カルカッタのスラムで、貧者の中の貧者のために働きたいと、たった一人でスタートし、今や全世界にその修道会の支部ができ、後継者もたくさんいて、ノーベル平和賞ももらった、すばらしい行動力と愛に満ちた人ではなかったのか？

「来て、わたしの光になりなさい！」という彼女の書簡集が日本でやっと翻訳された。

彼女が霊的に指導を仰ぐ師達に宛てて書いた手紙とその返事が主なのだが、彼女の謙虚さ故に、読んだら破棄してくれるように、と願ったにも拘らず、保管され、死後に発表さ

れた、というわけだ。

内容的に、深い信仰の世界のことなので、破棄しないでいてくれて、本当に良かったと思う。アメリカではベストセラーになったという。

私たちと同時代に生きた、ひとりの聖者の生き方を私はそこに見る。宗教界の聖人と言われる人で、ここまであからさまに心の有り様を見せてくれる例はほとんどないだろう。

キリスト教というものの本質が彼女の生き方に、余分なものなく、ダイナミックに現れている。驚いた。

人として、ここまで！可能なんだ！と驚いたのだ。

「全ての人から拒絶され、痛みの中で放置されたカルカッタの街路の貧しい人びとの状態は、『私自身の霊的生活の真の姿である』と彼女は宣言した。

彼女もまた、彼女を必要とした人々によってではなく、彼女の神、生命よりも大切であった方から、求められていないと感じており、彼女の周囲に群がる群衆からではなく、魂の全力をもって愛した神から、愛されていない、という思いだった。」

「この恐ろしい喪失感、未知の暗闇、寂寥感、神に対する絶え間ない欲求などが、私の心の奥深くに痛みを与えています。その暗黒は精神によっても理性によっても、全く見えないほどの暗さです。」

この暗闇は、過去に一度彼女が味わったイエスとの親密な関わりという特別の恵みがあったが故、ある意味その喪失によるものであるのだが、その恵みについては、説明はできません、公言できるものではありません、と彼女は言う。そして喪失したがゆえに、神に対する彼女の渇きだけが増していったのである。

「事業が始まる前（一九四六年九月～一九四七年）非常に深い一致……愛、信仰、信頼、祈り、犠牲がありました」

「六ヶ月にわたる甘美な慰めと一致は、余りにも早くすぎ去ってしまいました」

その内面の苦しさとは裏腹に、彼女の日常性においては、その無私の愛と、率直な純粋さとが称賛され、彼女から輝き出る喜びと平和が人々を魅了し続けていたのだ。そして具体的な事業はすべてがイエス様の仕事である、と彼女が常々言うように、細やかな部分に至るまでシスターたちの愛に満たされ、驚くほど上手く運んでいったのであった。その根底には祈りがあったと。いつもいつも彼女らは祈っていた。マザーの祈りの時間もすさまじいものがあった。

パラドックスのように思う。彼女の暗闇と彼女の行動は。

地獄の苦しさまで表現したその暗闇は彼女の死近くまで続いた。それを次第に受け入れるようになる彼女の道のは、その苦しさに潰されることのない彼女の理性、信仰、愛の強さの歩みでもあった。その強さが尋常ではなかった。

キリスト教の真髄は十字架にある。十字架は磔刑である。恥辱の死に方である。

そして愛されていない、という苦しみの象徴でもある。「私は渇く」と言われたキリストの苦しみを少しでも軽くして差し上げたい、と、とことん追求した人がマザー・テレサであった。彼女の持った暗闇はキリストの請け負った暗闇であるのだ。

ここで、あ～あ、なんという宗教に関わってしまったんだろう！！というため息がこぼれてしまった。

小休止（私には無理だよ、とつぶやいている）

一九七九年のノーベル平和賞の頃から、貧者は世界中どこにでも、又豊かな家族の中にもいる、と彼女は言うようになる。「あなたの近くにいる、あなたの愛を必要としている人を、愛しなさい」と。

大層なことは無理でも、あなたの近くの人を愛する、という課題は目標にできると思う。これですら、しかし、大変であることは重々承知ではあるが。

神無月のささやき

今月から「つぶやき」ではなくて「ささやき」にします。

小さな声しか出ないというのは同じなのですが、ささやきのほうがいいなあ〜と。
ささやきの方が軽いし明るい。
希望へ続くのはこちらでしょう。

そもそも大きな声がいいのか、というとそうでもない。
小さな声でいい。

怒涛の中では聞こえない
そよ風の中で耳をすます
聞こえてくる小さな声

小さな声
いのちの声

今というこの時

耳をそばだてる
聞こえてくる小さな声
心をこめ
小さな声で答える

今というこの時

祈る
小さな声で祈る

ちいさな光がみえる

祈りはどんでん返し

2016

睦月のささやき

昨年中に新しく始めたことが、歌を歌うということだった。

コーラスでもなく、カラオケでもなく、一人で朗々と歌いたいという願いが心の奥底にあったようだ。

夏からレッスンに通い始めた。

今までに四曲歌った。

その一つがアルカデルトのアヴェマリア。

アルカデルトは十六世紀の作曲家でフランスかイタリアか生まれははっきりしないが、たくさん作曲をしている。宗教曲以外のシャンソンも多く、とても人気が高くよく歌われていたという。彼が恋の歌として作ったものが……

十八世紀になってマリア讃歌に変えられ、今はこのほうがよく歌われている。歌いやすいので私もこのアヴェマリアを最初に選んだ。

恥をかかなければうまくならない、とそそのかさ、人様の前で歌うつもりになったけど、自分のカフェだからやれること。

十月のばおぼぶ誕生祭、十二月のマリア祭、そしてクリスマス会と、お客様の前で歌うとなると、練習の熱心さが違ってくる。

二つ目のアヴェマリアはモーツアルトのアヴェマリア。

これはマリア讃歌の歌詞ではなくて、キリストの受難を歌っている。

彼の体が十字架の上での磔刑の苦しみを受け、人のために命を捨て、わき腹から水と血が流れ出る、なんていうぎょっとする歌詞なんだけど、ラテン語だから聞いているほうはわからない。

メロディーはとても美しい。とてもとても美しい。

「アヴェマリアの中ではこれが一番美しい、これをへたくそに演奏したり歌ったりするのは許せない」と言っている人がいるという。私が歌っているときに来られなくてよかった！

三曲目はカッチーニのアヴェマリア。

これは今やかなり有名になっていると思う。十年以上前だと思うけど、レニングラードとかいう（はっきりしないけど）戦争映画があって、その予告編を見たのだが、そのバックに流れていた、つまり残酷な戦闘場面のバックに、この世のものとは思えないほどの美しい声とメロディーが流れていたのだ。ええ〜っ…これは何だ！とびっくり仰天、それから、探し探して曲名を調べ、CDを買い、スラヴァという男で女の声を出す、カウンターテナーというのだが、とんでもないいい男が歌っていることを知る。

息子や夫を戦争で失ったかあるいは失いそうな女の心をマリア様に切々と訴えているという声だ。

歌詞がない、ただ、アヴェマリア、あ〜あ〜というだけ。

カッチーニは十六世紀の作曲家だが、実際は旧ソ連の作曲家、ウラジミール・ヴァヴィロフ（一九七三没）の作品と言われている。発表にあたって他の作曲家の名前を借りることをしばしばしていた人だという。その国のその時代を思えば、さも有りなん。

次のアヴェマリアはいわゆる西洋音楽と言われているクラシック音楽が成立する以前のスペイン、バルセロナの近くのモンセラートへの巡礼者たちの歌っていた歌からのもの。

巡礼者たちがあまり品のよくない歌を歌っているの、修道院側から、これらを歌いなさい、と教育上与えたものである、という説明を聞いた。

どちらにしろ、古い時代の民族音楽を彷彿させるような、東洋人の心にも懐かしく思えるそのメロディーに惹かれて選んだものだ。

「モンセラートの朱い本」十四世紀編集、として有名である。その十曲のうちの一つ。日本語に翻訳して歌った。

初回のデビューの時だが、「下手でもいいから、感情をこめなさい」と先生のお言葉があったので、心を込めて、力みすぎるぐらいに、頑張って三曲を歌った。終わってホッとしたのだが、なんだか自分の中のどこかに穴が開いたような解放感があった。

今年もほかのアヴェマリアを探して歌おうと思っている。

アヴェマリアばかりを歌っているが、何となくはまっているのである。

如月のささやき

黒い聖母像がモンセラートに祀られていた。

スペイン人はキリストよりもマリアのほうを大事にしているのではないかぐらいで、スペイン各地の教会にはマリア像がたくさんある。教会の中心においてあったりする。

モンセラートもその一つ。

霊験あらたかで、お参りすれば力が頂けるらしい。大聖堂の中で二時間程の行列を作ってやっとその像のところへたどり着いた経験がある。

黒い聖母は世界中にたくさんあるらしい。

なぜ黒いんだろう？という疑問があり、様々に憶測がされているが、最近神話の本を読んでいたらヒントが出てきた。

女神の話だ。

ヨーロッパの石器時代でも既に豊饒の女神像はある。

日本の縄文時代にもヴィーナス像がある。

古代オリエント、インド文明においては大地の女神、豊饒の女神が祀られていた。

命を生じさせ育くむ母性と、様々な生命を生み出し、死を受け入れ循環させる大地の持つ神秘的な力に打たれ、敬い、祈願するようになるのは自然の成り行きといえよう。

文明が進み、次第に富が集積され、民族がまとまり、国家形成となると、強いリーダーシップが必要になってくる。

砂漠の民が国家形成に向かったとき排他的な男神が必要になる。

女神たちは排斥され、とって変わられる。旧約聖書の中では、ユダヤ民族の神が自分以外の神を敬うことを徹底的に禁止する、違反すれば怒り、それらを滅ぼす、というような展開となってくる。

キリスト教はユダヤ教から発生した。しかしユダヤ民族だけのものではなく、異教の人々を取り入れながら広まってきた経緯がある。そして男神以前の社会で崇拝されていた土俗的な女神崇拝の流れを、イエスの母マリアを神の母として崇拝すると決定することで、取り込んでいったようなのだ。

マリア信仰に大地の女神の流れが含まれ、そこで黒の聖母像が作られる、ということだったらしい。

男神だけでは、やはりことはうまく運ばないだろう。この三千年ぐらいは男神の支配する世界が延々と続いてきた。これは行くところまで行くと戦いの挙句に自滅するのではないか、と思われるのだけど。

密やかに生き続けてきた女神のおかげで、まだ滅びないでいるのかもしれない。

もう少し、女神に出っ張ってもらって、程よいバランスをもたらさなくては、と思うのだが。

卯月のささやき

完璧と完全

perfect と vollkommen (complete)

辞書（辞海・昭和二十七年発刊）で調べると、

完璧とは、傷のない玉、完全無欠、欠点のないこと、借りたものを返すこと。

完全とは、十全、全く、申し分のない、かけたところや足りないところのないこと、まったいいこと。

この二つの言葉は、ほとんど同じと思っていたけど、ユングの本の中で、男性性と女性性の対比で使われていた。

完璧が男性、完全が女性。

そう言われてみると、なるほど、とその差が見えてくる。

男と女との間で言い合いが起きる時、お互いをいらいらさせるのは何かといえば、双方の無意識からくる違和感かもしれない。

完璧を無意識に抱えている立ち位置と、

完全を無意識に抱えている立ち位置は当然見方、理解の仕方が違ってくる。

男同士、女同士の言い合いの場合も、双方の中にある、男性性と女性性がからんでいるのかもしれない。だから、ひとりの人間の中での男性性、女性性のそのバランスを取ることが大事となる。

男社会と言われている世の中に長く慣れてきてしまっていて、いろいろな意味で行き詰まりの感じられるこの頃、だからといって、女性の社会進出が、もてはやされるが、女性が男性化してゆくことは女性力の発揮ではなく、それは、まだ男社会の男理論にしたがったものだろう。

長い間男社会に潰されていた女性性の復帰、ということをも、考えてみたいのだ。フェミニストという立場とはちょっと違うのだけど。

というか、フェミニストという言葉の持つイメージとはちょっと違う、ということで大した意味はないのだけれど、豊穡の女神の子孫としての立場といったほうが近いかな。

女が女自身を知るべき時なのだと思う。
一個の人間として立ち、歩くため、必要なのは何なんだろう。
己のうちの大地につながる命の力を知らなくてはいけない。
己の内の天につながる古き記憶を知らなければいけない。
そういう非論理的な感じ方に命を持たせたい。

完全の持つ、そして完璧の持たないものはなんだろう。それを学びたい。
緩み、他の可能性へと開かれたなにか、あたたかみ、などかしたら。
見えない部分への信頼感もそうかもしれない。
完璧の中にある緊張感をほぐす対のものだろう。

上記の辞書に出ていた、まったくこと、という言葉は。聞いたことがないんだが。
なんだろう……まったくこと……？

葉月のささやき

七月中旬だ、あ～あ、がっくりだ。
相手は、つまりプロの政治家たちは、何十年とそれを組織的に専門にやってきているのだ、ということに又気づかされる。
やっと考え始めた素人が増えたところで、プロにはかなわないのだ。
無関心層が多いということも残念だ。
人というのは、何かがおこらないと、目が開かない。
政治というのはわたし達の生活の根本にかかわるものだ、ということに実感が感じられないのは一見平和だから？ そう、一見はね。
沖縄や東北では生活が懸かっているから人々の目が開きはじめ革新が躍進しているではないか。

わたし達には何が出来るか？を考える時、それは何時だってそうなんだけど、今がそうだ、本当に今だ。
価値観が違う人たちの集まりが社会なんだから、その違いをきちんと表明すべきなんだ。
言っても無駄、なんて思っただけはいけない、まあまあでごまかしてもいけない。
私は稚拙ながら私の思うところをいくつか今ここで表明させていただく。
今の世の中の仕組みを変えなくては。たとえば選挙のやり方もおかしいもの。選挙のたびに、いつも何かを変だと感じていた。ひとつは、もっと十分に検討できる日数がほしい、ポスターが張られるとあっという間に選挙日だ、内容を見比べ検討する時間もない。
立候補にお金がかかるのもおかしくない？ 三百万とか？ 貧乏人は出られない、組織がないと無理なの？
そして、小選挙区制っていうのが不公平なのでは？ 変えようよ。

戦争なんて決してしてはいけない。決してだ。必要悪などではない。少数の権力者の利益のため、一般人が殺しあうなんて馬鹿げている。国のトップ、企業のトップたちが戦争をやりたいのなら、自分たちだけでやればいい。

隣人が攻めてくるなんて、恐怖心をあおり続けている政府。『大本営』というのは嘘つきだと、知っている世代はもう少ないのかもしれない。七十余年も前のことだから。政府の言うことを丸のみにするのはやめよう。

マスコミは本来の批判精神を取り戻してほしい。今のマスコミはほとんど信じられない。

隣人を信じて、語り合おう。友になるのがすべてにわたってよいはずだ。しかめ面よりは笑顔がいい。武装を解けば、相手も解く。こちらが先に解く。これは理想論ではない。仏さまも、イエスさまもおっしゃっている。人間は靈性を失ってはいけない。欲得だけでなく善とのバランスをとるべき。

この世界で、平和について知っている数少ない民族が日本民族ではないか。縄文時代からのノウハウがあるはず。争いごとに明け暮れてきた世界に、平和の可能性を示すことが出来るのは、日本だけかもしれない。日本の文化の力もすごいと思う。

基本的人権がなくなるってなんなの？ 国民というのは奴隷なの？ 憲法は国民を権力から守るためのもので、権力のためのものではない、と学んだことがある。

ナチの真似をしよう、と政治家が発言したなんて、信じられない!! 時代錯誤であり非人間的。

何故そんな大臣たちが存在しているわけ？ 腐敗そのものでしょう。

原子力は人には扱い切れないエネルギーなのだから、チェルノブイリで今たくさんの人たちが苦しみ死んでいくのをしっかり見よう。同じ間違いを福島でしていることを本気で見直すべきだ。

ここは地震国なんだから、まず日本中の原発を止めること。想定外なんてとぼけたことをもういわせない。

日本の風土の美しさ、優しさは稀なものだ。人は自然の中で生かされていることを忘れてはいけない。

地球の歴史の中で今、どれほど人が地球をいたぶっているかということをしちんと知ろう、これ以上の放射能被害をわざわざ生み出すなんて、これまた時代錯誤だ。

持ちすぎている不便不幸があるのではないだろうか。不必要なものを捨てよう。断捨離はキーワードになるだろう。

脳の断捨離も必要だ。そして毎日の暮らしをシンプルに、出会う人々を慈しみながら、丁寧に暮してみることが試みようと思う。まず自分が日常生活で良きことを実行する人になることだ。

様々のジャンルで、各々が平和な世界を作るための働きをすることはできるはず、ということ、改めて見直したいと思う。

「アイスランド 無血の市民革命」というフィルムがある。

<https://www.youtube.com/watch?v=BZxR1VbTVkg>

これは政治に希望が持てなくなっていた私に希望を与えてくれた。

神無月のささやき

旧約聖書からみえてくること

前にも旧約聖書のことを書いたことがあると思う。いつ読んでも何か引がかかってくるのだが、今回は今の世界にもつながるポイントが見えてきたので少々述べたくなった。

旧約聖書にはかなり荒っぽい神様が出てくる。ユダヤ民族に土地を与える、と約束し、土地を獲得するため先頭に立って戦いを繰り広げ、自分を裏切った時には、罰として他民族からのユダヤへの攻撃を許す、というようなことまで、ユダヤ人を愛していると言いつつ翻弄する、ユダヤ民族とのアーでもないコーでもないを続けている家父長的な神様が居る。ユダヤ民族にとっての民族神である、と今のところ考えている。

この書物はBC七世紀頃にそれまでの伝承を編集したものであるらしい。

これだけ古くかなりのページ数(千八百余)の書物ということだけでも大したものなのだが、そしてこのユダヤ偏重の神様だけではなくて、神様に関しては様々な表現があるので、何度も読んでいくうちにだんだんわかってきたりすることもある。太古のいろいろな流れが入り込んでいる、玉石混合?カーオス?と旧約聖書をとらえたりしている。

文明の根源近くを探るのはいつだってわくわくするのだ。

キリスト教にとっては文化的、教義的に負っているところがたくさんある、と認めざるをえない。だって母体なのだから。(これを認めるには私は時間がかかった)

このユダヤ民族にとっての、明らかな土地獲得のストーリーの部分が、気になるところなのだ。ひょっとしてこれが現実の歴史に強く影響を及ぼしているのではないか、と思うのだ。

二千年前に出たイエス・キリストは当時のあの社会では革命家であった。旧約聖書の掟に凝り固まったユダヤ社会へ全く新しい価値観をもたらしたからだが、そしてその革命性故に彼は殺された、と新約聖書で示されている。新約聖書というのは、旧約とは違って、イエス・キリストのことが述べられている。

彼の新しい世界観は、戦いではなく、愛と慈悲なのだ。イエスは「敵を愛せ」「平和をつくる人々は幸いである」というようなことを言ったのだ。

民族への土地獲得が目標ではない。個々の人間へ働きかけ、回心をうながした。

戦え!と先頭に立っていたあの神とは全く正反対の、愛、慈しみ、弱さ、小ささ等に価値をみる教えがイエス・キリストによってもたらされた。彼より数百年早いインドでのブッダの教えによく似ている。

最近の紛争がイスラム教徒とキリスト教徒の宗教戦争ではないか、と言われているようだが、もし宗教戦争だとしたら、イスラム教徒とユダヤ教徒の戦いではないか、と私は推測しているのだが。

旧約聖書はユダヤ教徒にとっては聖典であり、また、イスラム教徒にとっても聖典となっている。

ユダヤ人もアラブ人(イスラム教徒)も両方とも旧約聖書の中での、始祖アブラハムの子供たちなのだ。アブラハムの正妻サラの子、イサークからの子孫がユダヤ人で、サラの女奴隷ハガルの子、イシュマエルからの子孫がアラブ人と書かれている。異母兄弟である。微妙な問題点である。

アブラハムに約束されたその土地はBC十三世紀頃のモーゼによって導かれたユダヤ人が獲得し、ユダヤ王国となり、アブラハムのゆかりの地であるエルサレムに都を築き、ソロモン王が父ダビデ王の悲願を叶えてユダヤ教の壮麗な神殿を建てた（BC十世紀）。

その後しかしBC七世紀にバビロニア軍によって壊され、それをペルシャ王の助けによって建て直し、BC一世紀へロデ王によって大増築され、AC七〇年、ユダヤがローマ軍に滅ぼされた時、又破壊され、その後は七世紀にイスラム軍によって占領され、ヨーロッパ十字軍の出兵で、取ったり取られたりを繰り返して、破壊、建て直しの繰り返して、今のエルサレムの街自体が二千年前よりは少なくとも七メートルも上に積み重ねられた高さにあるという。

十三世紀頃からはヨーロッパ勢は衰え、エルサレムがイスラム教徒の支配下となった。イスラム教徒にはメッカがあるだろう、と思うのだが、メッカが一番で、エルサレムが二番だか三番だそう。三十年程前にあのフセインという人が寄付した金塊でメッキされたドームはとても美しい。そのドームのある所はソロモンの神殿のあったところだ。今は、キリスト教徒もユダヤ教徒もその地域へは許可証なしには入れない。

キリスト教徒にとってはソロモンの神殿の再建の必要はまったくない。聖書に、あなたの祈るところが神殿である、と書かれているのだから、神殿はもはや、物理的な場ではなく、人の体や魂だったりする。しかしユダヤ教徒にとっては非常に大事なところなのではないか。今現在はユダヤ人は神殿の丘の下の西側の壁までの地域を許されている。その壁を嘆きの壁と名づけ、そこに頭をこすりつけて老若男女、多くのユダヤ教徒が祈っている姿には真摯なものを感じる。いつかは、この上の、アブラハムがイサークを捧げた石の祀ってある、ソロモンの神殿のあった、今イスラムのドームのあるところに、ユダヤ教の神殿を再建して礼拝をしたい……と祈っているのかもしれない。

ユダヤ人の聖地奪還、という思いがどの程度のものなのか、と考える。ディアスポーラといわれ、土地のない、離散の民として、過酷な苦渋の歴史を長く経てきたユダヤ人だ。ナチによるホロコーストという人類として最悪の状況を生き切ったユダヤ人にイスラエルという国を戦勝国が与えた、ような形だが、建国の翌日から土地を取られたと思っているパレスティナとの闘いが始まっている。いわゆる中東紛争だ。イスラエルの中のエルサレムという街は、そこを聖地としているイスラム教徒、ユダヤ教徒、キリスト教徒、アルメニア教徒に四分割されている。一番聖なる神殿の位置は、しつこいようだが、イスラム教の管理地である。

アメリカ建国というあの時に、土地を持たずに世界各地で虐げられ続けてきたユダヤ人が、何を考え、どういう動きをしたであろうか、と結びつけたくなるが、ユダヤ人としては大ロマンが描けたのではなかろうか。いかなる形を取ろうとも、ユダヤの強い思いがアメリカという国のどこかにあるのではないか。

建国以来アメリカはどこへ向かってきたのだろうか、アメリカ大陸の東海岸から西へ西へと着々と戦いとってきた、そして、太平洋戦争、それ以後も、西へ西へと戦いのラインが伸びてきたのではないか？ アジアから中東へ、ほとんどでっち上げの戦争をしかけてきたのではないか、今やシリアで戦闘が行われている、という現実。

アメリカの戦いの流れはとうとうエルサレムを目の前にしている、と啞然とするのだが。

どの宗教でも原理主義的なたくな部分、がある。それがいつもあちこちの発火点近

くにある。そして現代社会は宗教以外の複雑な要素が絡み合っている、ということも、現代人ならばわかる。しかし、狂気ではないか、と思われる極端な動きが今や多すぎる。

環境破壊をとまなう、戦争という人殺し、子供でもはっきりと分かる、人としてやってはいけない悪いことを、国として、躊躇もなく行っている超大国アメリカ。それを支えようとしている？日本。

世界の富は、ほんの数パーセントの人々が九〇%以上を持っているという、恐ろしい程の格差。

だから、戦争は決して金儲けのためではない。

聖地奪還願望というのが、実際あるかどうかは分からないが、あってもおかしくないのではないか、それが無意識であろうとも、意識の根底にあるのではないか、と私は思いを巡らすのだ。

もしそうならば、やめて欲しい、もう終わりにして欲しい思う。

追伸 この文を書いた後、ある本を読んだ。びっくりした。

エルサレムでのソロモンの神殿再建について、アメリカという国が関わっていると、書いてあった!!

「タリズマン」グラハム・ハンコック&ロバート・ヴォーバル著 竹書房

霜月のささやき

星野道夫

ばおばぶというカフェを始めて十四年程経つ。長年たつと常連と呼ぶよりは、仲間や友人と呼んだほうがしっくりくる人々がたくさん出てくる。

そういうお一人がつい最近「旅をする木」という本を読んで感動した、と話してくれた。私は星野道夫というその作者についての映画を見たことがあるし、なにか読んだことがあるという記憶があつて、なんとなくひっかかって、その本をお貸しくださるようお願いした。

持ってきてくださった時におっしゃるには、あまりに良くて二度読み、そして三度読んだ、と。

私は夜寝る前にベッドの中で本を読むのが好きだ。眠くなるまで読む。

その「旅する木」という本を読み始めたら、眠られなくなってしまった。

その夜に読み切った。

そういう本は時々出会うことがある。

星野さんは私より六歳ほど若い。大雑把に言えば同じ時代の空気を吸っていたのだ。

そして彼がアラスカに行きたくなり、アラスカへ行ったのは、どうしてもそうしたかったのだ。

今の若い人たちはあまり冒険心はないようだが、あの頃の若者は未知の世界への憧れは強く、行動力は今よりはあったと思う。

点数が足りなくてアラスカ大学入学が無理だと言われた時に、彼は、たった三十点足りないというだけでどうして自分を入れてくれないのだ、と学部長にねじ込んだという。

来年では遅いのだ、と、日本からこのために来たのだと。

四十三歳という若さでこの世の旅を終えたことを考えると、そして大自然が人の手によりどんどん変化しているスピードの早さを考えると、本能的に時間の短さを感じ取っていたんだろう、と思わざるを得ない。

彼の本、彼の言葉の持つ魅力は、柔らかい温かい心というだけではなく、澄み切った純な魂が彼の言葉を通して感じられることなのだ。

我々が行きたかったって行けるような所ではない、その手つかずのダイナミックな大自然を書き表してくれるから、未知なものとの出会いがワクワクするほどうれしい。

そして彼が出会った人達が皆なんていい人達なんだろう！と思ったときに、彼がいい人だから、いい人に出会うのだろう、そして周りがみんなより良くなってしまおう、という現象なんだろう、と理解した。

彼のオーラが地球のあのあたりをあの頃明るく温めていたんだろう。

人のみならず、全てに対しての彼の尊厳と愛が感じられるのだ。

その彼が幸せであることは一分の誤りもなく、その幸せ感を私は日本の一隅金沢文庫でプレゼントとして受けることが出来るのだ。

本が素晴らしかったので、ほかの本を探していたら、偶然というには余りにも出来過ぎに、たまたま翌日から横浜高島屋で彼の写真展が開催されるという。

来週の水曜日まで時間は取れないなあ、と思ったが、無理すれば初日の午後遅く行かれると、普段は夕方から外出したりしないのだけど、引かれるように、写真展に出かけていった。

彼に関してはいろいろな人が解説しているし、今更私が何を言えるか、なんだけど、私としての個の体験だけを語ればいいと思う。

会場に入り、大きな写真を目の前にして、とても嬉しかった。

ほんまもの大自然が広がっていた。ドキドキしてきた。胸が詰まってきた。

もうちょっとで涙だった。

動物の眼差しに人以上の人らしさを感じた。

大自然の多分その時だけの一回限りの美しさの強さ。

私はこれが見たくて世界をウロウロしたのかもしれない、しかし人生の途中で忘れてしまったんだ！

ああ、私が求めていて届かなかったものがここにある！と思い出したのだ。

圧倒的な大自然というのは神に近い畏怖を呼び起こす。

学生の時は山歩きが好きだった。その後私がしばらく住んでいたスイスという国はカレンダーの絵のように美しい自然が目の前にあるところで、飽きもせずに眺めていたが或時私は友人に聞いた。この国には人跡未踏のワイルドな自然というのはあるのだろうか。

手が入っている、だけではなくて、皆に見られ続けていることでの人の跡が感じられるのだ。

彼女はどこかにワイルドな自然があるとは言ってはいたが。

スイスを出てもっと自然に近いスペインに移った、目の前の地中海は自然ではあるものの、何万年も人が行き来した内海なのだ。アフリカへいく話にすぐ乗ったのも、もっとワイルドな自然に出会えるかも知れない、と期待していた部分を抱えていたからなのだ。

しかし私の中では、ワイルドな大自然に憧れていること自体が、はっきりと自覚されてはいなかった。星野さんを目の当たりにして、今、私の中にはこういう世界への憧れが深く潜んでいたことが分かった。

なぜ今？ なぜ今私はそれを知るのが？ この記憶の再燃の意味を考えている。彼が何を求めていたのかは分からないし、それだけではない、私に働きかけているのは。

彼はひたすら何かを求めていた、その彼の求め方の見事さだ。
彼の生き様の見事さだ。写真の素晴らしさはそれだ。

宗教という枠の中で神を求めている私のやり方が浮かんできたのだが。
私の生き様の中途半端さが浮かび上がってきて、オタオタしている。
いや、どうしようもないことはどうしようもないのだから、つまり中途半端みたいなことは問題にできないのだから……
多分もうちょっと時間がかかるのかもしれない、
星野さんの世界が私に関わってきた理由がわかるのは。

師走のささやき

こはる

立冬や命一つをあずかりて

この立冬の日、ばおぼぶではライブをしていた。笛とパーカッションと踊り。
音は控えめに、と言ってはあるのだが、だんだん興に乗ってくるとそうもいかなくなる。

ライブの渦中突然電話が鳴った。スタッフはご近所さんからの抗議の電話だと思って、恐る恐る受話器を取り上げたところ、私の息子からだった。

初孫誕生の知らせだった。予定日より早い、元気な女の子が生まれたと。わ～を～！と喜びがわいてくる。

なかなか見に行かれなくて、二週間近くたって東京にいたので、その足でお嫁さんの実家を尋ねることにした。

孫というのはかわいくて仕方なくてメロメロになるものだと相場は決まっている。
人様の孫自慢というのは聞いていても面白くもないし、
そんなばあさまにはなりたくない、
私にはワンクッション何やら冷たいところがある、と思っていた。

駅まで車で迎えに来てくださり、夕食を共にして、色々おしゃべりをし、時間もたつのだが、赤子はぐっすりねむっていて、明日は仕事だし、そろそろ帰ろうか、とベビーベッドの枕もとで息子たちにつぶやいたところ、それが聞こえたのか？目が覚めてくれた。嫁さんと息子の、もう既に熟練した一連のベビーケアを眺めて、それから、抱かせてもらった。

これが、この体験が、私の琴線に触れたようだ。

顔を眺めた時も小さきもの、無力なものへの優しさは自然に出て来たのだが、抱き上げて、私の腕の中で大人しくしている彼女を眺めていると、言ってみれば、驚きのようなものと愛おしさというものが、こみ上げてきた。

家に帰って、その時の写真が送られてきて、そこに写っているその婆、つまり私の表情が何とも言えずに優しいのだ。こんな顔をするんだ！とびっくりしてしまった。

魔女も聖母になるというか……

責任がないからかわいいの、というけど、それだけではないだろう。

ある適当な距離を経て眺めているから、一つの新しい命がそこに存在しているだけなのだけど、その奥につながる普遍的な命すら見えてきて、驚きを引き出したからだと思う。

パンチを喰らったように愛の世界に入り込んだのだ。

こういう命は溺愛するしかない、と思う。愛しすぎて悪いことは何もない。

2017

水無月のささやき

「各個人は皆基準からはみ出している。

Every individual is an exception to the rule.」 ユング

という言葉を見たとき、ハッとした。そうだよなあ……みんなだよなあ……私だけではないんだ、みんなどっかしらのはみ出しているよなあ。すごく規則が大事な人もいるけど、その人だって、どこかがはみ出しているしなあ……これって、当たり前のこととして言っているのかな。ルールってなんなんだろう？

ルールは破るもの、というルールがあった昔々の私を思い出す。

世間様に恥ずかしい、とか世間体とかいう言い方を人はよくするが、これが基準からはみ出してはいけませんよ、というルールでしょう。私自身は、若い時から反抗的で、世間や、親の考え方は古くて、固くて、狭くて、と思っていた。自分の方が正しいし、新しい世界の方がベターで、さあ冒険の旅に出ようと意気揚々だった。

五十年前若かった我々は、個において右か左か、白か黒かをはっきりさせる必要があったのでは？と今の若い世代に最近指摘された。私が自分の正しさを主張する癖がある、ということで、なぜだろう、と考えていての一つの答えだったのだが、時代のせいなのか？

私一人の癖ではなくて皆そうなのか？ 私個人のかんりのアクの強さもあるとしても、全体としてそういう傾向があるというのも当然考えられるよなあ、と納得。当時学生運動真っ只中、右にも左にも所属したくなかったので、私だけのという道を選び、それゆえに、自分を正当化する必要があった。最近は何がそれほどはっきり色分けされる必要はないらしい。大まかにグループ分けされ、また細分化されているグループが互いに緩くつながっているみたいなんだそうだ。

あの頃、すべてに覆いかぶさっていたあの重苦しい空気はなんだったんだろう？ 今もそれはあるような気がするが、政治という古狸、いわゆる大人の常識が純な若者をひねり

潰そうとしていた、と感じていた。なんらかの切迫感のある時だった。切迫感是个の意識を生む？

ヴェトナム戦争真っ盛りだったということも当時の重苦しさだった。

ある娘が、「ベトナム戦争反対」と意思表示をすると、父親は、「俺たちが食べていけるのはアメリカのおかげだ、黙れ」で話は潰された。

あの大学紛争は浅間山荘事件で終幕となり、その終わり方は不幸だったなあと感じていたのだが、最近、ひょっとしてそのための演出があったかもしれない、と思い始めた。学生運動そのものが悪の権化であると示すもってこいの終幕であったし、その後ぷつりと若い世代が保守化している。あの一部の極端な不幸な学生だけを追い詰めるドラマを放映し続けたのは、やはり古狸の策略があったのだろう。

その頃フランスでは、もちょっと大人のフランスの学生さんたちが着々とバリケードを作りながら、政府と戦い、学生の権利、女性の権利を勝ち取っていったと聞く。さすがフランスだ。彼らの歴史で獲得されていた民主主義は日本の地には根付いてはいない。戦後民主主義というのはお題目だけで、この地では育ってはいない。だって、対話がないのだから、ここ、日本には。百年前も、五十年前も、今も、あるのは支配者と被支配者。命令と従属。戦後すぐの教育を受けた私たち、さあ民主主義ですよ、という掛け声は大きかったようだが。

西欧では百年以上になるだろう、革命的な思想の変遷があった。キリスト教的な価値観、つまり教会の支配に二千年近く締め付けられ、それが理不尽であると感じ始めていたのだ。産業革命、科学の発達とともに哲学者やら思想家のオンパレードだった。学生の頃ニーチェやユングに魅力を感じていたが、一万キロも離れた極東の劣等生にすら、彼らの言葉が響くものだから、本当にすごいことだ。有難いことに、今や、百年前よりも、五十年前よりも、世界の思考の流れは、東も西も重なり合って、わかりやすくなっている。単純なイデオロギー紛争でもなくなり、多様化と緩さの自由が浸透している。

ユングはチューリッヒにおいて、世界大戦の頃、人の心の治療に新しい方法を取り入れた人だ。しかし、ユングの思考は様々な方面へと広がっているのだから、当時は一般には突飛すぎたのか、余りにも新しすぎ、理解されにくかったと思う。何十年も経た今は当然理解する側の変化がある。今や彼の危険性として指摘されていた、アンチキリスト教、スピリチュアルな世界、自由恋愛、等は全く当たり前の大衆感覚になっている！という現実に私はびっくりしている。スピードがすごい。

あっという間に、道徳的な規範はバラバラ壊れてしまっているようだが、これは我々の世代が望んだことだったのだろうか。壊したかったのは別物だったような気がするのだが。いやいや、人というのは理不尽で非合理的な生き物だから、なんでも起こるだろうし、なにがおこっても変化は変化でよしと。

二十年ぐらい前に、小学校のお母さん仲間とユングの勉強会をやったことがある。その時もまだ、ユングは少し危ない、と一般には思われていた。彼は預言者的でもあったろう。哲学とか宗教とかだけではなくて、精神医学、心理学を加えて、「人とは何か」を探った人だが、この永遠の間、「人とは何か」をとことん問い詰めた人、として私は眺めている。

日本にユングを紹介したのはスイス人司祭の I 師である。私の大学時代のドラマトゥル

ギーの教授であった。スイスのバーゼルの近く、古い小さな街で彼の実家がホテルを経営していて、そこで私はヨーロッパ滞在の初期の頃お世話になっていた。ホテル学校へ入るつもりでスイスに行ったのだけど、結局はそこでのある出会いを機にチューリッヒ大学へ入ることになり、運命の道が作られていったのだ。

私のチューリッヒ時代の友人たちは、ユングのことをことさら話題にはしなかった。自分らの街が世界の最先端をいっているという自負はあっても保守的であることは、どうしても否めない彼らなのだ。そして当時は彼はまだ新しすぎた！ だけど、ユングの思想がああ街で起きたのだ、という感動は、今になって私に起こってきた。あの湖畔の散歩道を彼は歩いていた。私も歩いた。キュスナハトの彼の家の前に立った記憶、そんな実感を私は大事にしたいと思っている。彼が八十六歳で亡くなったのが一九六一年、私が二十五歳でチューリッヒに住み始めたのが一九七一年、たった十年しか経ってなかったのだ。巨大な火芯に引き寄せられる虫のごとく、それ以上にもっと薄くて遠いけど、なにかつながりを、こじつけたくなってとりとめもなく……。

文月のささやき

庭木

桜の小枝が朝日を受け風に揺れている。さわさわと涼しげだ。時に動きが止まる、またそっとゆれる。

椿、金柑、茱萸、柿の木の重なりが、濃い緑となって、光の抜けてゆく桜の小枝のあたりを囲んでいる。

この庭の静けさが、何十年と私を癒してくれていた。デスクから、目を挙げては、じっとながめていた、

テーブルに座ってもまずは庭を眺めていた、朝も、昼も夕も。癒されていたことに気づいたのは今。

あるとき竹が一気に増えた。左手の母屋のあたりから出始めた。この竹を買ってきて植えたのは三十年ぐらい前、敷地の北東の角だった。竹田という名の故にこの地に竹を植えることにしたため、数株の真竹と黒竹だった。それが床下をくぐって敷地の南西にあたる裏庭へお日様を求めて二十年ぐらいかかって出てきたのだ。あつという間に鬱蒼とした竹林になった。夏は涼しくていい。緑に囲まれていたいという私の願いを叶えてくれたようだった。しかし、しばらくすると庭の主である大きな桜の木が弱っているように感じられてきたのだ。枝が枯れている？と気づいた。もう寿命なんだろうか？ いや、竹の根がそこいらじゅうを覆ってしまったからだ、と当時の植木屋さんが教えてくださった。どっちを取るか？ やはり桜だろう。花吹雪の美しさは他には変えられない。この桜あつてのこの庭なのだから。もう老木なので優しく扱わなくては。竹はほとんど取り去った。三年ほど筍をとり続けていたら、もうこちらへはポツーン、ポツーンぐらいしか出なくなってきた。桜は元気を取り戻した。

桜の咲き始め、幹の下の方にひこばえという小さな枝が出てくる。それが一番に花を付ける。大きな木になってしまったので、花ざかりの広がりには二階のテラスから眺めるか外に出て見上げるかしかない。階下では部屋にいる限り桜の太い幹ぐらいしか見えないので、ひこばえの咲き始めはとても嬉しい。その手前に冬も始めの頃からずっと咲き続けていた赤い八重の椿がある。艶やかな重たげな花が枯れた冬の庭に鮮やかなのだ。それが、今年は桜が咲き始めてもまだいくつか咲いているのだ。淡いさくらの色と真っ赤な椿の色

が、緑の中に浮かんでいる美しさは画家の山口先生が絵にってしまったほどだ。

隣家への慈悲だと思いなさい、と友に言われ、隣家にはみ出ている枝を切ることを、やっと思心。アマゾンの緑も、アジアの緑も私には守れない、しかしこの緑は私にしか守れない、と言いつけて、我がジャングルを守ってきたのだけれど、再三の申し出に、また友人たちの説得で若い植木屋さんをお願いしたのだが、切り終わった時の庭を見た私は涙が出てきてしまうほど哀しかった。これははみ出した部分だけではない！ 切りすぎだ！ しかしもう遅い……皆が慰めてくれる、光が入るようになった、隣家が納得してくださった、すぐ伸びるさ、などなど。

カフェのテラスの前の狭い庭は竹やぶのようになっている。こちらも床下を通り二十年程かけて北から南へ出てきたものだ。風に揺れる竹の風情はこんな街中では希少価値、毎春の筍も細いけれどとても美味しい。テラスの二階には小部屋があり時々セッションに使っているのだが、小部屋の北側はここ数年でものすごい緑に覆われてきた。これは三十年ほど前にちょっと玄関先に、と園芸店から買ってきた苗を植えたものだ。こんなに大木になるとは！ えのきの木らしい。見事な、この屋敷の主の風情を持つ。小部屋に寝転がって、その枝の広がり緑を眺めていると優しく抱かれているようで幸せになる。北側のビワの大木も子供の時からあるのだが、今年豊作だった。トパーズ色の実がたわわに天空に浮かんでいるさまは美しい。カラスお断りの看板を出す必要は今年なかった。果実は恵みだ、単純に幸せをくれる。枇杷の実、種、葉全てが薬効があり貴重なのだ。しっかりエキスやお茶として使っている。夏みかんのマーマレードも我が家の特産。

アイビーもすごい繁殖力で、裏庭から屋根を伝って、表の塀の方までびっしりだ。これも竹と同じく強すぎるので、時々カットしなければならない。こちら側のキウイもよく育っている。電線にかかろうとしている。ともかくにも切るなんて嫌だーとダダをこねている段階ではないのだ。隣家というのはもう四方に及び、四面楚歌。よくよく考えるとよくぞジャングルを作るといふわがままをここまで通してきたものだと思う。

しかしである、緑が人を癒すのみならず、地球を救うのだと、私は固く信じている。ばおばぶジャングルは永遠だ。

葉月のささやき

カフェにとって水は命なので、どの水を使うか開業する前に迷いに迷った。結局水道水を浄化しそれをミネラル化することにした。某大学鉱物学の教授に教えてもらって、ミネラル化に当たり、麦飯石とトルマリン石を大量に底に沈めたタンクに水を一晚寝かせるのだ。それに備長炭を加え、そして、愛と感謝の文字を陶板に彫り込み入れたのは教授の教えではない。

「水からの伝言」江本勝、という本があつて、初めて読んだ時からなるほど、と納得。水が言葉に反応するということだ。この本は科学的でないとか、オカルトであるとか取りざたされたようだが、科学とか、オカルトってこの場合何なんでしょうね。美しい言葉へ水が美しい形で反応する。当たり前のことのような気がするけど。愛と感謝という言葉への反応が一番キレイになるとか、さもありませんかと思うけど、そういうことをオカルトっていうのかしら。

人や動物だったら、植物ですら、愛と感謝に反応するのはいまや当たり前。現実でしょ

う。ありがとう、と言われた方が、ばかやろう、と言われるよりも、明るく元気になるのでしょう。人の体の七〇%が水分だということ考えると、この水分の細胞のひとつひとつがなにかに反応しているって、また一つ命の仕組みが明らかになったような気がする。

ある友人が、男から言い寄られて困っている女性を助けるために提案した一つのアイデアは、愛を相手に注ぐのだと。遠く離れたその相手に愛のエネルギーを集中させて送るのだと（十分あるいは一晩でも）。そして、その後相手に丁寧なお断りのメールを入れたところ、よくわかりました、と返事が来たそうだ。

又、ある友人が遅い結婚をしたのだが、しばらくして、ご主人がどうも普通ではない、と思ってたところ、テレビで特集があり、彼がアスペルガーだと分かったと。そして聡明な彼女は総力を挙げて考えた挙句、彼のあるがままを認め受け入れる、そして愛する、これっきゃない、と結論したらしい。その後、彼らはハッピーに暮らしているようだ。

愛というエネルギーが人々に理解されるにはまだ時間がかかる、と思ってた人がアインシュタインだったとは！ 彼の死後二十年がたち、彼の娘への手紙が解禁にされ、既に久しい。今や愛がエネルギーであると理解される時代となっているはず、アインシュタインの予想では。

保江邦夫さんという物理学者にしては突拍子もない方がいらっしゃる。この人の本を数冊読んだことがあり、この人が教えている「愛魂道」？の道場へ一回行ったことがある（前にも書いたことがあるかもしれない）。友人に誘われて、ホントかいな、と見に行ったのだが、つまり愛で技をかけるのだと。柔道場のようなところだった。女性は無料で参加させて下さる。運動のできる服装でOK。柔道着を着たメンバーたちが二十名以上？有段者たちだ。彼らを相手に初歩的などころだけやらせていただいた。相手の人を愛すと、技がかかるのだ。たまたま相手になってくださった人から、こんな爺を愛するのは難しいでしょ？と言われ、そうですねえ、とは言わなかったが、考えたあげく、過去の、人を愛した記憶に頼った。昔の愛の気分を思い出して自分を満たして、そのエネルギーを相手に向け技をかけた。何回目かにできた！ その後、若い男の人にもそれで成功した。これは、スペインはモンセラートからのキリスト伝来活人術とかに基をおく「冠光寺流柔術」というらしい。

彼の愛の方程式は、物理学者故の公平さか、キリスト教だけではなくて、神道やら、エジプトの神様やらあちこちの神様との交流体験に拠っているようだ。そして最近の著書でアインシュタインの言葉が取り上げられ、

“普遍的な力とは愛だ……中略……愛は神であり、神はまた愛である、愛を目に見えるようにするために私の最も有名な方程式 $E=mc^2$ において簡単な代入を行った。この世界を癒すためのエネルギーが、愛に光の速さの二乗を掛け合わせることで得られるということを受け入れるなら、その大きさには限界がないために、愛は最も強力な力となるという結論に到達する……おお良き神のなんと良きかな！”

を紹介している。娘さんへの手紙の中に書かれているらしい。

保江さんは、自分は常に空間を友として人生を歩んできた、愛と祈りを聞き届けてくれたのはいつも空間だった、と「ついに、愛の宇宙方程式が解けました 神様に溺愛される人の法則」という著書の中で書いている。

この空間って神様じゃないかしらと思ったのだけど、神様に溺愛されているとご存知な

わけだから、ま、いいか。

神様という言葉は手垢がつきすぎている、とクリスチャンの私ですら感じる。神という概念は人の作ったものなのだ。だけど、どの概念でも真実であり、本当のところは、それは、何やらわけのわからないものなのだ。何やらわけのわからないもの、という言い方が今私にはとても気に入っている。

エネルギーボールというお菓子のつくり方をロンドンから来た友達に教わった。干しイチジク、デーツ、くるみ、アーモンド、オートミール、チアシード、ココナッツ、カカオ等を細かくし、混ぜ合わせ、団子状にする。ばおばぶで売り出した。愛のエネルギーが入っている、お試しあれ。

2018

睦月のささやき

冬至が十二月の二十二日でそこが闇から光への分岐点。この後お日様の出ている時間がだんだん長くなって来る。

日本列島の置かれた位置は程よいところで、四季が有りバランスが取れて、冬中お日様が出ない白夜だったりすることはなく、太陽の熱さで命がカラカラになるような目にも合ったりしない。人は地球上どのあたりに生まれるかで、多分感性も違っていると思う。この列島に生まれ育ったことで、得ている感性はなんだろう。

しかしどこでも、冬至は光のスタート点だ。クリスマスというキリストの誕生日もその辺にあり、お正月もその近くにある、というのも、光の誕生と関わっているからだと思う。光の誕生は命の誕生。

光が誕生し地上が温められると命が吹き出す。春になる。美しい花盛り。夏になると命は燃え尽きるかのように力強い、そして実りの秋、思いもかけぬ美しい果実が生じ、本体は勢いを失う。冬は枝は残るものの葉っぱは消えたり、全く消える物も有り、眠るものもいる。静けさ。光が少なくなる。闇が来る。この太陽のサイクルは毎年自然界で行われ、毎年といわず、何十年のサイクル、極端に言えば何万年のサイクルで回っているものもあるだろう。サイクルでない動きをするものもあるだろう。

人もサイクルで生き死にするとしたら、輪廻転生ということだろうか。このことに関しては私はよくわからない。人の存在とは肉体だけではなくスピリチュアルな部分がある、というのは多分そうだろうと思う、しかしいかに、はわからない。そして宇宙とどのように関わるかがわからなくなる。宇宙は物質だと思うので、スピリチュアルな世界とは別物かも知れないとも思うし。何かを知ることや納得したり取り入れたりするためには直感で探っているようなんだけど、直感が把握できるのは自分に関わる狭い範囲だけのようだし、本当にわからないことは山ほどある。

確実性のないその曖昧さの中でゆらゆらするという生き方は老齢に入って次第に慣れてきている。老齢というのは冬ということで、もうすぐ終わるということなんで、エネルギーがギリギリに日々削がれてゆくというマイナスの感じと、今まで分からなかった曖昧な部分が優しく近づき明らかになるようなプラスの感じでゆらゆらしているのかもしれない。最後の日々のため準備をせねば、と最近よく思う。それはとにもかくにも収支決算のようなことで、やってしまったこと、生じさせてしまったこと、それがこんがらかって不自由な場合、その困難さを解決すること、それが、死ぬまえにやらなければならないこ

と、だと思う。その人の抱える課題を解決しないことには死にきれない、とはキューブラー・ロスの話の中によく出てきたものだ。問題があつたら逃げないで正面切って解決に当たろう、ぼけないうちに困難の坂を乗り越えよう、と日々言い聞かせている。

クリスマスには光の子が生まれる！ なんと嬉しいことなのだ。毎年毎年生まれる。こんなふうに太陽がめぐり一年が過ぎ、そして始まってゆく。光の子と共に一年を過ごすのだ、と正月には意識することなのだ。

卯月のささやき

啓蟄前からもぞもぞして、私は虫のように変化を望んでいたのだが、旅立つほどのエネルギーは無く、今年はカフェの模様替えをした。ピアノの位置がどうも引っかかっていたので、全体を考え直してみた。

一人よりも二人、二人よりも三人と知恵が加わるとどんどん良いプランが出てくる。ひょっとしてピアノが今の位置を選んだのではないか思うくらい、ピアノは終の場を得た。あと数箇所家具やらモノの位置を変えて全体がすっきりとしてきて、とても嬉しい。一番奥の席は椅子の向きを変えただけなのだけど、座ってみると落ち着き具合がまるで違う。前より利用する人が増えている。その席の上に高窓があり、今は八重の紅椿とさくらのソメイヨシノが額縁の中の絵のように姿を見せている。

美しさはある種の緊張から来ているかも。美しさには無駄もないだろう。実用の美とも言うから、使いやすくもあるのだろう。

その居心地のよくなったカフェに息子夫婦が孫を連れて遊びに来た。模様替えをしてくれた息子も遊びに来て春の午後をのんびりと、孫がやっと人見知りを克服して遊んでくれるようになったので婆は喜んでいたので、パパになった息子が突然、自分たちの育った環境はめっちゃめっちゃ良かったよなあ……と話し始めた。パッと反応してしまった親の私は愚かで、彼の話をもっとじっくりと聞くべきだったと今は反省この上ないのだが、だけど、と私は反論してしまった。それも私の強いことこの上なく、私の心はまっすぐだったんだから、と、弁明をしてしまったのだ。あなたたちは皆一人前に育ちあがっているでしょう？と念を押してまでいる。

いつだってこうだったのかもしれない、どうしよう。我をなくす、とか、己を捨てて、とかひとりではいるときはなるほど、我が欠点はそこに有り、なんて思って、そうしようと思ひ、少しは努力もして前よりは出来ているつもりだったりしたんだけど、現実には一瞬にして元の木阿弥、我我としたばあさまに戻ってしまう。この手のことは家族がモロ影響を被っているのだ。ごめん。

彼の言うとおりの、ひどい環境だったのは確かで、子供たちは安心感のないところでバランスを取るのに苦労していたんだろう。子どもの幼稚園時代からの友人に言わせると、よくぞあの地獄が、今のこの天国に変わったよねえ、との感想だった。まさにそうだったんだろう。しかしあの頃だって、私は一生懸命だったんだし、と小さな声で言いたい、今よりおバカさんだったのは確かだけど、今も十分おバカさん？ う～ん……

ダーリンに逝かれてしまってからにはもっと突っ張っていたのだろうか？ 思春期の息子三人を育てると、カフェを始めたのも同時期で、いま十五年経つが、まさに奇跡の十五

年だね、何がどう作用したんだかはっきりとはわからんけど、こんな素晴らしい三人の息子たちと、素敵なおカフェ！ おわりよければ全てよし！ 感謝、感謝、感謝！！

皐月のささやき

いつの世も若者は新しいことが好きで、もたもたした年寄りの感覚などは相手にもしていないようだし、私ら老人が彼らの会話に入っていくのはむづかしい、言葉が既に違っていることもあるし、私が若かった頃もそうだったが。

この感覚の差を乗り越えてコミュニケーションをする必要が有るか、ないか、と言ったら当然、ある。若者たちが異星人のように、我ら年寄りよりは賢いようにも思うが、いやどっこい、年寄りにだって彼らの到底及ばない、何と言ったらいいのだろう、とりあえず把握力と言っておくが、理屈では説明しきれない世界の判断においてはかなうわけがないはずだ。そして積み重ねによる確信は年寄りのものだ。頑固者もいるが、いくらでも柔軟になれるというのも年寄りだ。

年を取ってきて、そう、思い込みを外すことがメインの課題となっていた。その課題を抱えて数年たって、はっと何かに気づくことが時にある。例えば聖書。イエスを殺したのはユダヤ人、とずっと思い込んでいた。だからユダヤ迫害も起きたと言われ納得してた。なんどもなんども読んでいるところなのに今やっとその単純な文章が読めたのだ。イエスを殺したのはユダヤ人だけではなくてローマ人の協力があったから可能だったのだ。ユダヤ人が画策し民衆を誘導したのは確かだけど、実際に死刑を決定したのはローマの総督ピラトだし、イエスを侮辱して鞭打ったりつばをかけたたり、翻弄して十字架にかけてイエスを殺したのはローマ人なのだ。二千年この方ローマ人がそのように批判されたことがあっただろうか？ ない。あるわけない。彼らが中心でキリスト教を立ち上げてきたのだから。

輪廻転生も人の魂が人としてなんども人生を繰り返す可能性、としてヒンズー教の昔からあったのだが、キリスト教会は否定している。信者を教育するために行った数々の嘘があるようだと感じてはいた。時代、文化の差でと黙認していたのだが、やはり嘘は嘘として見極めたいと思う。そこにはそうする意味があるから。そう、輪廻転生もなかったことにしたその意味は？ 人々に緊張感を与えるためかしら？ 一回限りの生の方が救われるためには今ここでいい子になるしかないでしょう。カトリック教会は自分の掟の中に信者を統率したかった。歴史の中で宗教というより政治というジャンルでヨーロッパを制覇してきたようなので、宗教的に見ると全くの正反対の動きが見られる。輪廻転生が真実である、ないとは別問題。

輪廻転生といえばシュタイナーのアカシックレコードの差し出す世界観はさっぱりわけのわからんところもあるのだけれど、いろいろ可能性を飲み込むなあ〜と眺めだしたのも最近だ。だからといって私はキリスト教を捨てようとしているわけではない。あそこにはいい部分もあるのだ。真ん中によくわからんけどなにかがある。キリスト教も変化し成長するのだ。私の立ち位置は変わらない。

そう、だからどこかしらでいつも何かがほぐれてくるようになると世界理解が進むと言える。今オープンダイアログと言われる精神医療治療法が注目を浴びている。これは革命的な治療法だと思う。普段の対話にも応用できそうなので、五月一日から始まる勉強会に参加したいと思っている。

ほぐすのだ、ほぐせば通じる、あたらしいエネルギーの流れはいいものを運ぶ。今ばおばぶで始まったフェルデンクライスという療法も全く同じだ。体をほぐすのだ。全く力を抜いて、ほぐせば流れる、流れれば自然にどこかの何かが治っていく。

水無月のささやき

皐月は我が誕生日があり母の日もあり、花が美しいし、緑は勢いを増してくるしで、グーンと元気の出る月だ。今年は特に元気だ。

母の日の朝教会のミサへ行こうと、カフェの入口のガラス戸を開けたら、足元に真っ赤なバラの花束が寝かせてあった。

びっくりしたが、そうか、ゆうべ遅かったんだらう、鎌倉での結婚式にカメラマンをやると言ってたから、帰りに寄ったんだな、今日は来れないということか……

毎年母の日には紅薔薇の花束を持ってきてくれる息子が居るのだ。パパが生前事あるごとに紅薔薇の花束を買ってきてくれてたのを、子供が覚えていたのか、私が語って聞かせたのか定かではないが、うれしいことだ。

十年以上も前の話になるが、俳句を一緒に作っていた若い人たちがいて、三人で、私の還暦の誕生日に、六十本の赤いバラの花束を持ってきてくれた。なんという驚き、喜びだったことだろう。素晴らしく大きな花束だった。そしてまた数日前の誕生日にはこれまた美しい花束がわんさと来て本当に幸せだった。

日本の男性は花を買う習慣があまりないようだが、私がスイスに住んでいた頃、スイス人のダーリンは、かなり頻繁に小さな花ではあったが買ってきてくれたもので、それがとても嬉しく、日本に帰ってきてから、日本のダーリンにそのよさを伝えたのではあるが、根付いたようで嬉しい。

スイスでの体験で日本の控えめな男性に欠けているもうひとつ習って欲しいことがある。それは頻繁に「愛してる」と言ってくれること。朝、出かけるときにでも、「いってきます、君を愛してるよ」、台所仕事をしている時も、「愛しているよ」と囁いてくれてもいい。いつでもいいから時々言ってくれると、「君は美しい」もその一つだけど、その気になって、幸せな気分になる、それでいい。多少真実味がなくともいいじゃないですか。言わなくたってわかってるだろう、では楽しくない。パチンと幸せの小さなシャボン玉がはじけるようなのだから。しかし文化風土というか、男女間の在り方があちらとこちらでは多少違っているようではあるが、宇宙は変化し続けているのだから、良いことは取り入れよう。

シュタイナーの「治療的教育論」の読書会のおしゃべりで聞いたことだけど、保育園では、かわいい、とかいう褒め言葉を園児に言うてはいけならしい。本人にはどうしようもできない容姿とかだったら、言われぬ子供がいるからですかね。反対に言われ続けるとその言葉でその気になり、そうなるってしまう。磨かれる、ということだったら個人的に自分の子供に言い続けたら、そうなるかもしれないという期待が出てくるではないですか。その気になっていい方向へ行けばそれはそれで素敵なことではない？ 見えている長所を言えばいいこと。足が長い、ということを書いていたらどんどんそうなった、という話まで出てきた。

しかしどちらにしる無理なく自然に、心の中に浮かんだ言葉があったら相手に伝える、というのが基本ではあると思う。

男は黙って〇〇〇ビール、なんて古いが、そんな空気が美化されているのが日本だ。対話不足であることで起きる問題はたくさんありそうだ。よりよき対話をする必要性に迫られている時代だと思う。オープンダイアログというフィンランド発の考え方（精神治療法ではあるが）は、とても興味深い。多くの人に应用できそうだ。その勉強会はこの五月にばおぼで始まっている。

霜月の書き散らし

我がカフェの十五歳になったお祝いをしました。準備期間も楽しかったけど、当日はあたたか味というか、みなさんの醸し出す優しさが満ちて、なんとも幸せな夕べでした。お客様は五十名ほど。

出し物の出演者が二十名ほど、

“愛の讃歌”というシャンソンを素人がフランス語で試みました。あなたの腕の中で幸せよ、という日本語訳の甘さのみものではなく、ピアフの原詩に忠実に、愛のためなら何でもするわ、という凄まじい思いの歌詞をわかって欲しくて、一部日本語で語りにし、全体をゴスペル風のリズム感でイエイ、イエイと勢いを付け、手拍子、腰振り、叫びを上げるといふ試み。聞く側はどうだかわかりませんが、歌っている方は、ハトちゃん、谷下さん、寧環さん、國近さん、中川さん、のぶと六人いたのだけれど、楽しくて楽しくてもうタガが外れました。

松尾慧さんの篠笛はやはり素晴らしかった。こりゃあもう日本でのトップレベルですね。中近東の曲でした。私の心は宇宙に漂いました。

大久保泰明さんのテノールもびっくりする声量で我ら素人とは違っていました。

悲しげなりリーマルレーン、リコさんの美しい歌声で、ドイツ語がいい。

ベリーダンスの夕紀さんが全く踊らずに歌いがたりとは！ 踊りを楽しみでいらした方もいらっしやっただと思うけど、これはこれで素敵との感想。林さんの歌い語りもなんだか彼女の可愛らしさが見えてきました。

朗読は三人いらしたけど、松崎、須藤、美優さん、それぞれ独特の味が出ていて味わい深かった。

舞踏の山田くん、五年前の衝撃的なデビューが美しく記憶にあって、今回は御免ね、よくわからなかった。最後のゆりは素敵でうれしかったよ。

サティーが流れたりして、サラッとよかった。お名前がわからなくてごめんなさい。

スタートの竹田の子守歌でみなさんの合唱が力強かった。國近さんや佐藤さんの笛も練習の甲斐がありましたねえ。

寧環さんの歌はプロ級ですね、ちゃんとシャンソンだもん、スゴイ。

ゴンゴンの伴奏、わかこさんと山本さんの伴奏、見事です。

大介さんのチェロは毎回少しずつ上手になっているといわれますが。

のぶは歌のむつかしさを感じ入りました。練習せにやダメだわ。

さて、終わって数日なのですが、生まれ変わったような気がするのです。あたらしい“ばおぼ”です。十六歳で社交界デビューではないけれど、やっと一人前かな。皆様にごここまで育てていただいたこと、本当に感謝致します。皆様ひとりひとりの暖かい思いが

あったからです。これからも皆様とこの場のエネルギーを作りつつ、同時に必要なエネルギーをもらいながら、参りましょう。

ばおぼぶ祭は楽しかったのだけど、やはり何やら一言言わないでいると物足りなくて、付け加えます。

* * *

沖縄の県知事が玉城デニーさん、過去最大多数票だって？　すごいね、うれしいね。基地問題を解決しようという意欲が県民の間で高まっている、ということだよ。

ひっどく当たり前のことなんだけど、戦争は嫌だ、とか、米軍基地は迷惑だ、とかは普通の感覚だよ。それがなぜ政府与党の言うような賛成に回るのかが、それも本当に国民の大多数なの？　全くよくわからない、とずっと思っていた。

政治には仕組みがある。民主主義というのは選挙で議員が決まるのだけど、その仕組みに手を加えることは可能だろう。議会というのがある話と話し合われるはずなんだけど、今まで、例えば基地問題について議論されたことはあるのだろうか？　政党とか議員とかが公平な正義に基づいた意見を言うことができるのだろうか？　金儲けと議席以外のことを考えている政治はあるのだろうか？

金儲け以外のことを考えている大人はいるのだろうか？　金は天下の回り物、強欲になる必要はないのだ。生きるポリシーが金ではあまりにも情けなくはないか？

私は横浜住民だけど、ここに基地ができるなんてとんでもないと思う。それをちょっと想像しただけでもあり得ないよ、と思うくらいの反応だった。横須賀基地近くなのでヘリコプターの音がするだけで神経に障る。沖縄の基地をなくすために、本土で引き受けなければならぬのか？と設定したところ、とんでもない、と思うのだから、だから沖縄の人たちが、どれだけの犠牲と苦しみ、不快感、を持っているか、が瞬時に、今までと違った意味で実感できた。

アメリカ軍基地はすべて撤廃。アメリカとの国としての関係性を立て直す時が来たのではないか？　敗戦国といつまで言われているつもりなのか？　アメリカにしっぽを振ってしがみついているような関係性を切ろうではないか？　ジャボジャボとどぶに流し込むようにお金を軍備に使う政府を切ろうではないか？

国民の平等なる幸せを築くために働くのが政府ではないのか？

2019

正月の書き散らし

宗教って？

宗教ってなあに、と改めて問いかけられて、考えているところだけど。

集団催眠に過ぎないのだ、と？

「サピエンス全史」というユダヤのユヴァル・ノア・ハラリによって書かれた、世界のベストセラー本にそうでている。私が読んでから、息子に貸したのだけど、息子は目から

ウロコだった、と。そして私に、あなたはこれを読んで、どんな反応をしたのかと聞いてきた。

私自身はごく若い時から、ミッション幼稚園、ミッションスクール、カトリック大学と期せずして、そういう環境にいたため、思春期に自発的に洗礼を受けた。でも、学校を出てからはほとんど教会に近寄らず、ヨーロッパに十年滞在していた時も全く教会へは足も関心も向かなかった。

五十過ぎて人生の問題をモロかぶった時にやっと、ああ、神様のこと棚卸ししなくちゃ、と思って、少しずつ勉強を始めた、というわけで、今はとっぷり浸かっているようなんだけどいつもどこかで疑いを持つことはやめられないという半端な立ち位置。

つまり私自身もこのぬるま湯、といってもいいのかもしれないけど、ないよりはあったほうが生きるということがとてもわかりやすくなる信仰の世界は手放せないのかも。人を愛する、そして感謝、それが生きる上で大切、と言ってくれて、とてもわかりやすいのだ。

元に戻るが、宗教は集団催眠に過ぎないのだ、と言われて怒らないのか？反対論を出さないのか？と問われたのだけど、私の答えは、そういう意見もあるでしょうね、あってもいいと思う、である。私の考えとカトリック教会の考えも違うだろうし、あなたの考えは私の考えと違うから、あなたは間違っているのだ、なんて誰が言えるのですか。怒りを起すほどのことでもないし、他の意見を認めることは自分の信念を変えることでもない。自分が変わるとしたら、成長、進化するのだと思えばいい。

そして、集団催眠的な要素が時にあったとしても、構わないのでは？とも思う。方向性が美しければいい、と私は思う。というのも宗教の扱う世界は摩訶不思議でわけのわからない対象を扱っているのだから。人は美しさを目指さなければ混沌の中に陥る。美しさ？あるいは光？そこからはずれなければすべてはいい、とおもうのだ。

わかるわけのない対象を扱っているのだ、と分かることが大切。それが分かれば、文化的に様々な違いがあるから、どんな表現であろうともかまわない、と私は考える。

クリスマスにキリストを知らずに喜び楽しむというのも、わけのわからんお祭りでもいい。

冬至で光が始まり、クリスマスを迎え、さあ新年だ。宇宙の流れに添って人は生活している。

新年ともなれば、初日の出を拝みに人々は海へ、山へでかけ、あるいは自宅で、登ってくる光を眺めるという日本の習慣は美しい。

日本人は無意識に宗教的だと思う。曖昧さの中に見えるまっすぐな心、このまわりの曖昧さがいい。

宗教はわけのわからんボワーッとした世界への道を示している、ともいえるかなあ。

皐月の書き散らし

今の花が一番きれいだと感じる時がある。裏庭の桜は老木で枝もまばら、背も高く、下からだと見えるのは幹と下枝だけで、二階の物干し台からはちょうどよく花が見える。柿の木や松ノ木が少々うざったく邪魔をするのだけど、薄紅色の花は咲き始めには一つ一つが強く「私を見て！」と言っていたのに、集団になった今は、もわーっと最高の美しさになる。

息子のMがかなりの枝を切り取って世田谷のマンションに持っていった。友人たちと中目黒の川端の桜見物をしてその後自宅で宴会をする、という趣向でその場を飾ったらしい。あれから一週間たって、あの枝は切るべきではなかった、と。あれは生き物だ、切っただけではいけなかったんだ、と言い出した。花びらが散るのだけれど新緑の葉が出始めたそう。どうやって育てたらいいんだ！と後悔している。彼の今住んでいる環境はこの辺より植物が少なく、ウン万円もする観葉植物を買い込み、葉っぱが落ちればハラハラドキドキの暮らしで、それもやっと新芽が出るようになり一安心だとかで、こんなに植物好きだったのかとこちらは面白がっている。ペットもいないし彼女もいないし自分で作ったショールームのような無機質な空間に、自然の生きてる気配が必要なんだろうね。「美しくなければならぬ」と金言のように言いながら。

もうすでに老桜には新緑が覆い始め、紅椿の咲き残りとはコラボレーションをして、全く違った美しさが今私の目の前に広がっている。あすはまた違うだろう。

桜を後ろに感じつつカフェではオープンダイアログというメソッドの勉強会が行われ、丸一年を迎えた。これはフィンランドにおいて統合失調症治療法のために開発された革命的な手法である。これを発見し、面白い、日本に紹介しようとした斎藤学、斎藤環両氏のおかげで、文化的な革命すら可能であるというこの発想法を今や、たくさんの人々が学んでいる。プロではない一介のおばさんである私のような者も学んで毎回新しい現象を感じている。

例えばその日の課題である数行の内容がある。それを軽く読んだ後皆のフリートークはその内容を自然に生み出すし、個人の問題点が語られていても、それが全体の問題となってきたり、一つの偶然の発言によって、その場にふさわしくない現象が、ふっと消えてしまったり、対等な関係性を壊す要素がだんだん減っている、それも自然的に、ということに驚く。学びの場自体が学びの実践になっているようだ。毎回新人さんがかなり加わるのだけれど、それがまたいい雰囲気をもたらす。初めての方が口を開くその時は、奇跡のようだ。人々の心がどういうわけか開かれていて暖い。

最初に聞いてびっくりしたのが、問題を解決しようという心を捨てなさい、だった。わからないことはそのままにしておきなさい、だ。幼い頃から我々が受けた教育は「問題は解決せねばならない」だったような気がする。

医師を交えた数人の病院スタッフと患者と患者関係の人たちとのオープンなダイアログが、患者からの電話がかかって二十四時間以内に患者の家で行われ毎日スタッフが通い続ける、というのもすごい。スタッフ、つまり病院内のすべての人々が対等な関係性を持たなければならない、これが完成するまで時間がかかるそうだ。医師たちのプライドとかが問題なんだろうね。投薬なしで回復する患者さんが増え続けているそうだ。回復した患者さんに、この治療方はいかがでしたか、と聞くと、え〜？これ治療だったの？僕はひとりだけで治ったんだよ、と答えたとか。街の大きさ、病院の大きさ、はフィンランドのその街のように可愛らしければ適切なのだろうが、日本で同じようには無理だろう。でも、これは根本思想が革命的なのだ。日本的に、というひとよっとしたら北海道、浦河町のべて

るの家はすでにもう長いこと似たようなことを行ってきたのではないかと、思い当たった。「当事者研究」で知られてきている。

支配傾向のない関係性によるそこで行われる対話は、患者を治療するためではない、対話から生まれてくる、もやもやとした何ものかが目的、であると……もやもやとした、それ、そこから各々が何かをもらっているらしい。

斎藤環さんは説明文の中で、論文に使うには希な「愛」という言葉が使われている、と驚いてらした。

このオープンダイアログというのは単なる治療法ではない、ということを説明するまでもないのだが、学び始めて一年、私は頭の構造が入れ替わったとまでは言わないけれど、なんだか違う自分になっているのを感じている。まだほんのとはぼりなんだけど！

春陰や眠る田螺の一ゆるぎ 原 石鼎

水無月の書き散らし

土の香りのいい時期だ。

鈴木大拙の「日本的靈性」という本の中に、大地性と見出しのついた文がある。

天は畏れるべきものであるが大地は命そのもの、天の恵みも大地を通して初めて人に届く、大地の母性について

とかの説明があり、平安時代の文化がいかに大地から遠く、武士が平安時代に地方において政治に関わらなかった間、農耕を通して大地性に親しんでいた、大地は命に関わり、靈的なもの、宗教性へとつながってゆく。鎌倉時代はその流れで靈性が伴った生命力のある武士の時代となり、仏教が生まれてくる、という説明であった。

ひたすら生い茂っている垣根があまりにも、荒れている感じなので、手入れをしようと、助けを借りて始めた。伸びに伸びたアイビーの先の方を切り落とし、笹を切り、積もった枯葉をどける作業にかかった。萩やバラの木が弱々しくアイビーの影から出てきた。かわいそうに、ごめんなさいだ。枯葉を軍手の手で掻き出すようにすると、土が出てくる。なんとも香りがいい。懐かしい土の香り。

教会付属の幼稚園の運動場から土が消えてかなり立つ。緑色のヘンテコなモノが敷き詰められている。気候がよくなったこの日曜日に、ふっと足に違和感をおぼえた。土でも草でもない嘘っぽいものの上で子供たちは遊んでいるのだ。私がこの幼稚園に通っていた時は、まあ大昔でしたけど、石ころだらけで、ホコリっぽかった。私の子供たちも水たまりで泥遊びをしたことを覚えている。それらはもう許されないのか？ 行き過ぎた衛生観念は人を弱くする、と感じてはいたのだけれど、「あなたの体は九割が細菌」アランナ・コリン、という本でまさに目からウロコ。細菌が人を活かしているかのようだ。びっくり新発見の世界だった。

大学で陶芸をやっていたという方から聞いた話。（私も何年も陶芸をやっているが全く知らなかった事だったが）古くなって固まっているような粘土に砂糖を加えるのだと。そうすると中の菌がそれを食べて、そしてウンコをするそうだ。すごくくさいって。でも粘土は柔らかく粘りが出て使えるようになるのだって。あの陶芸用の粘土の中に細菌が生

きているのだ。

海の公園に散歩にゆく。我らが母校文庫小学校の東校門のすぐ前から昔は砂浜だったのだけど、今は埋め立てられて海はずっと遠くになってしまい、房総半島も見えない池のような海に変形されてしまったが、公園ができ、緑地ができ、散歩道ができ、広い砂浜が広がる。散歩道を外れ緑地の中に入って歩けば土を踏める。ここに来てやっと柔らかい土の上を歩ける。足裏から心地よい。

称名寺にゆけばほんまもの土がある。後ろには山もある。ここは縄文人の住んだところ。金沢町のへそ、子供の頃そこで遊びまわっていた私の原風景、海もつながって原風景。

大地、自然には大きな大きな慈しみを感じる。ほっとする。

朝ごとに筍探すわくわくと ざくろ

文月の書き散らし

荒行と所作

酒井雄哉

比叡山千日回峰行を2度達成した行者で、この千年間に三人しかいない。
なにになんとか大阿闍梨と呼ばれる。

大阿闍梨を訪ねるのだが一緒に来るか？

と言われ何となくついていったという人がいて、彼が語ってくれたこと。

「小さな庵に住んでおられた。入り口の部屋には本棚があり沢山の本が並んでいた。お茶を出してくださいました。その所作がとても美しかった」と。

これだけのことなんだけど、私はその所作の美しさということが印象づけられた。そしてその事を納得もしていた。難行をやり遂げた人だもの、と。しかしこの話をある人にしたら、千日回峰行というものの後に、何故その所作の美しさが現れるのか？と言われ、はたと困った。日本文化において、形から入り所作の美しさに到達する、というのは一般的で知ってはいた。しかし山の中を二千日駆け巡るという荒行？が何をもちし所作を美しくしたのか、という説明はできなかった。

たまたまその次の日にその語ってくれた当人がいらしたので、聞いてみた。

その答え、「命がかかっているのだ、死と紙一重で山を駆け巡っているのだ、謙虚にならざるを得ない」と。どっきりとした、謙虚さ、究め得たもの、はこれか。

あまりにも簡単に得た答えに啞然ともしている。

今道元の弟子の書いた「正法眼蔵随聞記」の読書会を始めた。日本の心、日本の瞑想、禅について学びたいからだ。人に勧められて、直感的にこの本を選んでしまったが、楽しみたい。

今までは「Word into Silence」というベネディクト会のジョン・メインという人のキリスト教的な瞑想についての本を読んでいた。深い世界を知らされた。（英語から日本語に翻訳したので、今出版社を探している）

次の本として眼を日本に向けた時に、「弓道と禅」というドイツの哲学者が書いた本もあった。このドイツの哲学者、オイゲン・ヘリゲルが弓道、禅の心を知るに至る、困難な旅路についての本なのだが、彼を指導した阿波研造という人は素晴らしい師匠だった。ヘリゲルにとって最初はまったくちんぷんかんぷんだった、ドイツ哲学とは正反対ともいえる東洋の神秘的なありようを、師匠の導きで理解できるようになったのだから。西洋的な教育をバッチリ受けている我々も、ひょっとしたらヘリゲルと大して変わらないのかもしれない、理性の部分は。感性は？ でも違うだろう。我らの師匠は我らの感性か。

所作の美しさは形から学ぶ、と聞き及ぶ。生活を律する、という側面もあるらしい。生活を律するには大きな枠の意識もあるかもしれない。開放された世界ではないかもしれない。内へ内へと入ってゆくかもしれない。

所作の美しさ、我々団塊の世代は知らずにいる者がほとんどではないのか？ いやそれはあなただけよ、と言われるかもしれないが、確かに私は全く外向きの人間だったし、所作を意識したことが無くて無作法に近かった。いまだ息子に荒っぽさを注意されている体たらくだし。しかし今は日本のその美しさにあこがれる。今更なにかお稽古を始めるのか？ いや、違う。だがなに？

ああ、やはりこれしかないでしょう……謙虚さ……今まで学んできたもろもろのこと、すべてがこれが大事なんだよと教えてくれている、と今気づいた。

我我我がとカラス鳴くなり梅雨の空 ざくろ

霜月の書き散らし

この神無月はなんと異常に荒々しく過ぎたこと!!
素敵な語りのコンサートがふたつほどあったけど、
大きな台風が二つも正面切って来るぞ〜と構えたのはまれにみることだったけど、
ともかくシーーンという落ち着き、静けさがなかった。流れがいつものように平穏ではなかった。

ある場で、超えることのないはずだった柵を超えてしまった。言葉は剣になる。
それがきっかけで起こるはずのない破壊的な現象が起こってしまった、
剣を振りかざし、振り下ろしてしまった、確実に相手を傷つけただろう、
傷ついた相手は違う方向からの切り込みに対立し剣を振り下ろした、
何が飛び出したのかわからない程の流れが始まり、双方傷を付け合うばかり、
ちゃんばら騒動が始まってしまったのだ。
今の世の中の常識的な空気だったら、きっと誰かがまあまあといいながら間に入って丸くおさめるはずだったのだが、それがなかったとは、なんだったんだ。

しかし反対に今まで認めることのできなかつた価値を公平に見るようになっている発見もあった。

素直によしとを感じる心があるなんて、と気づいたこと。
その人を嫌いだから作品も嫌、ではなく作品自体を見るようになったなんて素敵だ。
思い込みというのは強いものだと思っていたが、外れることも可能なのだ。
外すということは簡単で、まっすぐに見ること、ただこれだけ。

友人にもとんでもない事が起こってしまった、と偶然聞かされた。
ばおばぶでの一大騒動と同じ頃だった。
この時期がこの神無月が宇宙の流れの中でそういう時だったのだろうか、
つまり大きな波がうねり、皆がその波に翻弄された時だったのだろうか。

秋になるまえの台風のように、クラッシュし、
隠れてた命がむくむくと起き上がる時、

ばおばぶの中でもクラッシュ&ビルドは常に起こっているようだ。

変化するのだ。

宇宙万物は変化し続けているのだ。

2020

睦月の書き散らし

十一月の末にローマ教皇フランシスコが日本をおとずれた。風のように、あっという間の滞在だった。四日間とか言われているけどまるまるは二日間だけ。

この間、長崎被爆地でのミサと慰霊とメッセージ、その夜に広島でも同じく慰霊とメッセージ、この二つのメッセージが核保有絶対反対であるのだが、日本の現状を捉えた上で、厳しい政府批判であった。被爆国の政府、つまり日本、は声を上げて二度と核兵器を使わないでくれと世界に訴える義務があるということ。右の手で平和を掲げながら、左の手で武器を作り売り続けている日本という国はテロリストと同じ犯罪を犯しているのだ。平和は非武装からしか生まれえない。と。

二日目東京では朝、若者たちの悩みをお聞きになり、それにお応えになった。いじめを受けた外国からの移住者、生き方を分らない思春期の子供たち、社会の価値観があまりにも経済効率主義での生きがたさなど。マリアカセドラルで、真剣かつ和気あいあいと若者と過ごされた。その後、天皇陛下、安倍首相との対談があり、午後は東京ドームで五万人のためのミサ聖祭が行われた。これは我々が与る毎週のミサと形式は全く同じなのだけど、美しく優しかった。私は映像で家で参加した。

翌朝は上智大学で学生のためのメッセージがあった。イエズス会の精神を大切にすることはもちろんだが、弱い人を助ける人になりなさい、それで際立つようになりなさい、だった。

ほかの国に比べると、日本は他人に冷たい国であると。そして若者や老人の孤立化による社会問題が増え、この問題は、どこの国でも緊急事項として解決しようとしているのだが、この国はその問題を放置しているかのようである。対話を奨励するどころか反対に自分の面倒は自分で見ろ、という大号令をかけている。経済優先のゾンビのような冷たさである、と。

彼はアルゼンティン出身である。イタリアからの移民であった。かれは司祭になってからもずっといつでも一番弱い人、貧しい人びとの味方であった。変化の激しいアルゼンティンの社会は軍事政権の交代でひどく暴力的であった。その中で、彼は人々の命を守る

ために彼の命を張っていた。凄まじい体験であった。

彼が二〇一三年に教皇に選出されてから、すぐさまに彼は教会内の毒出しを手がけた。ひとつ経済的な教会の腐敗、ひとつ聖職者たちの子供や女性に対する性的な犯罪行為である。着々と成果を上げている。

日本には人口の〇・四%のカトリック信者がいる。四十万人ぐらい？

科学万能の世だから、日本人として教育を受けてきているから、宗教を絶対的なものとして帰依するのはひどくむづかしいことがある。しかし、今回の教皇フランシスコの考え、行いを見ていると、カトリック信者である自分にご褒美がもらえたような気がする。人として、勇気のある素晴らしい人だ。彼を支えたい、と思う。

今回彼が日本におられた間、私は何やら、暖かい日差しに照らされているような、光の中にいるような、幸せな気分の中にいた。

こはるびや聴かぬふりする昼寝猫 ざくろ

睦月の書き散らし その2

二〇二〇年の正月も大寒の頃、おしゃれさがちょっと異文化かなあと感じたお客様がいらした。彼の存在自体がすでにおとぎ話の世界に近かったかも。彼はニューヨークでメイクアップを仕事としている方だった。二回いらして、二回目にお二人のお友達を連れて見えた。そのうちのお一人は本当に美しいアメリカ人女性だった。あっと口を開けて見惚れる程の美しさだった。

彼が漏らした一言、
ここは世界中で一番気に入った僕の店だ。これ以上誰にも知られたくない。と。
それを聞いて、
うれしいと、私は胸の前で手を合わせた。
今までの苦勞のすべてがすっ飛んだ！

彼はBAOBABという私の作品の幕閉めをしてくださったのだ。

その翌日、私はこの店を閉めなくてはならない現実を知る。

多分これから先この書き散らしもなくなるであろうから、その現実とやらをここに書いておく。

はい、私、このばおばぶのオーナーである、ほりこしのぶよですが、棺桶に片足を突っ込みました。

骨のガンが素早く広範囲に回ったようで、動きにだいぶ制限がかかり、只今モタモタしております。

命のことですので、いつ、とははっきりしませんが近いようです。

ですから、この書き散らしもこれで終わりとなるでしょう、
いや、そうじゃないかもしれない……
ともかくは、

皆さま、今のところ、さようなら！

薔薇のコト。 あとがきに代えて

薔薇とはよく話をした。様々な経験と知識を持っている彼女との会話は私にとっての楽しみの一つでもあった。私が珈琲を淹れ、薔薇が喋っている。思えば、彼女が人生について語り出したのは、胸の病が見つかったからのことだった。

私が子供の頃、薔薇が良く幼少時代の思い出を話してくれた。私が知る地元の風景とは別物の、広大な自然が残る金沢文庫の記憶。わんぱくだった小学生の時分に誰に怪我させたとか、どこを怪我したなど楽しそうに話していた。戦後間もない激動の日本で、薔薇もまた時代に負けないくらいダイナミックに育って行ったのだと手記を読んで思った。海に見えるこの街で幼少の彼女も海を見てその彼方に思いを馳せていた。薔薇が世界に旅立つ事はこの時から決まっていたのではないだろうか。全てがダイナミックな彼女に島国は狭すぎたのだろう。

天真爛漫に青春を過ごした彼女に言わせれば、大学時代は「酒と薔薇の日々」だったらしい。

私が京都で学徒をしていた時分に薔薇が訪ねてきた時があった。私の行きつけの店で彼女の大学時代の話聞いた。私も大概だったが薔薇も大概に酷い。血は争えないのだと思った事を覚えている。

彼女の大学時代は70年安保に学生達が殺気立っていた時代でもあった。内ゲバで友人同士がゲバ棒で殴り合った話や、自決前の三島由起夫の食事をサーブした話など話題に事欠かない。学生紛争真っ只中のキャンパスで右にも左にも揺れず、我が道を一人颯爽と歩く様が想像できる。いい仲間にも出会えたらしい。

素晴らしい恩師にも巡り合った。そして世界に旅立つ機会もこの青春時代に得る。大学時代の世界一周旅行は、のちにヨーロッパで繰り広げる放浪生活の序章だったのではないだろうか。

スイスは美しい所だと薔薇はいつも言っていた。その美しさの中には彼女がそこで過ごした思い出が眩いほど輝いていたのだろう。しかしそこには悲しみの色も差し込んでくる。自ら命を絶った我が姉アマリリスの父親に関してはこの手記で初めて詳細を知った。若かりし薔薇の恋は死が別ち、後に残った小さな花は、めまぐるしく変わる環境に必死に順応しようとしていたのだろう。ヨーロッパでの薔薇の行いに私ははっきりと嫌悪感を覚える。全てが浅はかで未熟だった。愚かでどうしようもない薔薇はそれでも自分のできる最善を尽くしている。それは否定する余地もない。ただ、人の子の親になるには余りにも幼すぎたのだろう。頹廢的な放浪生活を終わらせ満身創痍で帰国の途についた薔薇は、自分の傷を癒すのに手一杯だったのかもしれない。しかし、幼きアマリリスの根はすでに水を欲していたのではないだろうか。

乾いた地に生命は宿らない。帰国後授かった我が兄ケンとアマリリスにとって薔薇はトゲのある花であったのかもしれない。ルーカスの子である私たちには理解し得ない苦悩。唯一の寄り辺が荒地であるならどうやって生きていくことができようか。薔薇も必死に地を耕し潤そうとしていた。ただ、手遅れだった。アマリリスが散る。乾いた地に生命は宿らない。

断っておくが薔薇は決していい母親ではなかった。私の幼少の記憶には幸せな時間と同

等の不穏が伴う。薔薇とアマリリスとケンとルーカス。そして兄と私。この歪な均衡は少しの衝撃で崩れてしまうような緊張感を持って日常を不気味な空気で満たしていた。そしてこの均衡を作り上げたのは誰でも無い薔薇の人生である。全てが必然的に薔薇へ帰結していった。しかし、だからこそ薔薇は素晴らしかった。決して諦めなかった。荒地を耕し潤そうとした。自分が死ぬ最後の瞬間までもそうしようとあり続けた。娘が死に、夫が死に、母が死んだ。その都度堪え難い痛みが襲ったであろう。それでも薔薇は愛する事を見つめ、実践しようとしていた。私が彼女を心の底から尊敬しているのは、彼女の言動、行動、思考に愛を感じることができるからだ。荒地はすでに荒地ではなくなっていた。

豊かな土が木々や花を育て緑が鬱蒼としているこのカフェは薔薇が作ったものだ。私はこの空間を愛している。いい空間には生き物が集まる。虫や鳥、猫や人間。私は薔薇の病状を心配して週一回はこの薔薇のいるカフェに顔を出すようになった。彼女の顔を見るたびに時間が限られているのを感じた。

薔薇の病が重なり始める。私が初めて病院へ一緒に行ったのは一月の半ばのことだった。診察が終わった薔薇を迎えに行く。診察室横のベンチにぽつんと座っている彼女がとても小さく見えた。

伝える事があると薔薇は言った。癌が全身に転移していたのだ。お互いとても冷静だった。薔薇の望みは予めから聞いていた。彼女が愛した自宅で最後を迎えたいと再三言っていたので、その日のうちに必要な手続きを行った。全てが完璧なタイミングだったと思う。診察に行った日の午後には往診医が自宅に来てくれた。薔薇をサポートするための看護師さんやヘルパーさん達もすぐに決まった。皆素晴らしいプロフェッショナルだった。薔薇が自宅で療養できる準備が整って行くに連れて、彼女の最後が近づいてきたのだと感じる。

ゆったりとした時間が流れている。薔薇は自宅のベッドで一日を寝たままで過ごしている。毎日誰かしら来客がある。たくさんの花が送られるのでベッド横のテーブルでは収まりきれなくなっていた。

日の光が気持ち良く、庭の緑が美しい。薔薇の横に座っている。少し痛む時は薬を飲めばじきに治る。

また誰か来たみたいだ。楽しそうだ。夜は彼女の横で眠る。寝息に耳を澄ます。とても静かだ。朝起きて薔薇の胸元に手を置く。薔薇はまた遥かなる航路に出ていった様で、もう苦しそうではないみたいだ。

2020/02/20 -7:00 大海の魚

謝辞

母、堀越信代の手記を出版するにあたって、母と私たちを助けてくれた以下の方々全員に感謝をいたします。

カフェばおぼぶを開店初期から支えてくれて、ばおぼぶの看板娘だった三浦麻実様。いつもニコニコと優しい笑顔を絶やさず、母の無茶に付き合ってくれた山本美佐江様。母の良き友人、私の恩師でもあり、カフェを支えてくれた谷下幸恵様。エネルギッシュな感性と母には無い広報知識でばおぼぶの事を世に広めてくれた大本夕紀様。優しく母に寄り添

い、ピンチの時に助けてくれた我が同級生の母君、國近かをる様。母のために細やかな気遣いを頂き、支えてくれた福田菊枝様。カフェスタッフの皆様には心から感謝いたします。

母を優しく導き、亡くなられた後も母を救い続けてくれたジョンストン神父様。上智大学カトリック研究会の皆様。母の青春は皆様と共にありました。母に素晴らしい時間をくださったこと感謝いたします。

母と父と私たちがみんなお世話になったヒッポの皆様。いつでも変わらない友情にとても感動しました。皆様と過ごした楽しい時間は母との思い出の中で光り輝いています。

母の最後の日まで毎晩電話をくれたスイスのウルスラ。あなたの電話をドイツ語で受ける母が、いつもすごく生き生きしていました。特別な友情を本当にありがとう。

母が最も長く関わった親の会のメンバーの方々。聖書通読会。オープンダイアログ。俳句の会。美術の時間。ばおばぶでイベントをしていただいた全ての皆様。母の作ったカフェを愛してくれて本当にありがとうございます。ばおばぶに来てくれたお客様。母に色々な話を聞かせてくださって本当にありがとう。皆様がいてくれたお陰でカフェギャラリー&窯 ばおばぶに生命が宿りました。

母の良き話し相手であり、素晴らしいカメラマンである飯田浩一様。写真をご提供いただき誠にありがとうございました。表紙の題名をお書き下さった伊東通先生。先生が主催された写経の会を母はととても楽しそうに参加していました。本当にありがとうございました。

母の思いつきを具体化し、製本までの一切を取り仕切っていただいた須藤久士様。そして素晴らしいセンスで膨大な量の母の文章を纏め上げてくれた寺島寧環様。タイトなスケジュールをこなし母の誕生日までにこの手記を完成させてくれた朝日新聞東京本社「朝日自分史」の藤井達哉様、鈴木明治様。母が最後の願いを託したのが皆様で本当によかった。

竹田家の皆様。一郎様。皆様のお陰で母はどんなに心穏やかでいられたことでしょうか。私たち家族を見守って頂いて本当にありがとうございました。父の元に母もいると思います。

母に寄り添い、最後まで一緒に時間を過ごしてくれた我が兄、堀越観様。私では到底不可能な孫の顔を（二人も）母に見せることに成功した我が兄、堀越撰理様と我が義姉、堀越逸美様。愛らしい笑顔で母の人生に喜びをもたらした姪っ子のこはる様、甥っ子の葉介様。私にできない事をカバーしてくれる皆様がいた事でとても心強かった。

そして最後になってしまいましたが、ばおばぶに来ていただいた全ての方々に。皆様がいたから、薔薇のいたカフェはこんなにも美しくなれたのだと思います。本当にありがとうございました。

2020年 春

堀越 真魚

奥付-----

真珠の道

発行年月日	2020年5月28日
著者	堀越 信代
発行者	堀越 真魚
編集協力	須藤久士、寺島寧環／朝日新聞社
写真提供	飯田浩一、片岡裕二
題字	伊東通
印刷	大日本印刷株式会社